
光翼のリベンジャー『だけど俺は戦闘狂だった』

蒼鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光翼のリベンジャー『だけど俺は戦闘狂だった』

【Z-コード】

N1722T

【作者名】

蒼鳥

【あらすじ】

それは始業式の次の日のこと。 、

悪の組織（？）に誘拐されたクラスメイトを救出するために日向たちは奇襲作戦することになった。 、

そこで発覚した日向の驚愕の秘密とは ！ 、

「俺……実は“戦闘狂”だつたらしい……」

「……は？」

養成学園に通う主人公、成宮日向は一見普通の鈍感主人公に見えて実は戦闘狂だつた！？

……ラノベとしてありなのがどうかは置いておいて皆様のおかげで8万5千PV、ユニーク1万6千突破！！

意思によつて形状が変化する武器での変幻自在バトルと、個性豊かなキャラたちによる学園ラブコメが織り成す主人公戦闘狂系ノベル！

ラノベ好きの方や、主人公最強ものがお好きな方はぜひ読んでください！

はい、とこりうじでここでは「光翼」関連でいただいた絵を紹介していこうと考えてます^ ^

第一回目は プー太LOWさんに依頼していた絵を例にしながら紹介していきます^ ^

「絵」

> i 3 4 2 5 4 — 4 2 3 4 <

「今回の絵師さん」

ゴーザー名： プー太LOW

「絵師さんの小説紹介」

小説名・執事一揆

あらすじ&URL；http://ncode.syosetu.com/n5687o/

「大国アトランティヌスの王についてまだ日の浅いアラン・ルーラーのもとに先代の専属執事セバスチャンに雇われたロール・クライシスは昔、ホームレス状態だったがその卓越した知識や技術、身体

能力を買われて専属執事として働くが王のそばを歩けるのは王妃か側室だけという絶対的な世界で女ということを隠して先代の専属執事との約束である王を立派にするため一生懸命努力するが側近にばれて何故か見初められるわ、王様に男でもかまわないとせがまれるわでてんてこ舞い！

そんなゴルダラ少女の奮闘の生活を書いたラブコメです」

「絵の説明&感想」

ブー太LOWさんに依頼していた絵です^_^

左から順に「日向」「香奈」「凜華」です

『三話くらいまで読んだイメージでお願いします』とか今思えばなんとも描きにくい依頼だつただろうに（特に制服とか）ホントすごいです！

それにこんなにカラフルにしていただけるなんて思つてもなかつたんでとても嬉しいです！><
ありがとうございました！！

と言つた感じでこれからも紹介していきます

ですので宣伝目的を兼ねていても構いません（JPGで載せて効果があるかは保障できませんが…）

上手い下手などは関係ありません！

キャラや人数なども指定はありません！

似顔絵であつたり日常風景であつたり戦闘シーンであつたりなども指定はありません！

どうぞ気軽に描いてみてください！

みなさまの絵を心よりお待ちしております^ ^

質問等ありましたら蒼鳥までメッセなり活動報告のコメントなりでお聞きください。

プロローグ（前書き）

初投稿ですのでまだまだ未熟者です（＾＾；）感想や評価なども待つてます。悪いところの指摘だけでもありがたいです。

ちなみにお気に入り登録が増えるたびに作者は部屋で踊ります（笑）次話からついている「第〇話」～「」の「～」はその話の中ででてくるセリフの一つです。

プロローグを見る限りでは「これ学園？」と思うかもしれませんが、次話からほとんどが学園生活等がメインですので安心を

プロローグ

それは科学が進み生活がよりよくなつていていたある日のこと。

戦争のない国も少しずつ増え、きっとこれからは平穏な日々が続していくのだろうとほとんどの人が心のどこかで感じていた。

しかしこれもと同じ日常が続いていたこの日、状況は一転する。

謎の地球外生命体の襲来。

小さいものでも3mはあるだらうその巨体が突如空に現れたとき、人々は驚愕した。

生命体たちの姿は統一されてなく、何種類かに分かれていた。しかし人を見るなり無差別に攻撃を始めるところは一緒だった。

これにはどんなに頭の回転が悪い者でもすぐさま理解できた。

やつらは人間の敵であると。

そして人々は絶望した。

自分達はこの化け物たちに勝てるのだろうかと。

最初の襲来こそは既存の兵器や軍の投入でなんとか撃退できた。しかし、二回目以降は生命体の数も増え、敗戦することが多くなつた。

そこでこの謎の地球外生命体に対し、どの国の政府も緊急対策本部を設置、世界共通の名称として謎の地球外生命体のことを「アグレッシン」と名づけた。

ただ、アグレッシンの影響で終わることのなかつた戦争が停戦したのは不幸中の幸いだったと言える。

さらに各国の政府はアグレッシンに対抗するため、最新の技術を駆使して製作した特殊武器、『ブレイカー』を作成する。もちろんブレイカーを扱う者を育成するための教育機関も設置した。

そして人々は唯一やつらと渡り合えるだろうブレイカー使用者たちのことを、願いを込めこう呼んだ。

「リベンジャー
復讐する者」

こうして軍は対策を進め、比例するように徐々に勝率も上がってきた。

これで一安心か。誰もがそう思った。

しかしやはり人の最大の敵は謎の生命体などではなく、人間だった。

第一話 「ハ、ハハハ… 早く行く… いわせゆめー」（謹書也）

この作品はライトノベルをかなり意識しているのでハノベを読む感じで読んでいただけないと嬉しいです。

第一話 「う、うるさいー！ 早く行くー！」これは命令だー。

雲ひとつない快晴の空の朝。聞き慣れている田舎まし時計の音が今日もまた、盛大に鳴り響く。

一
眠し

俺は田舎ましの音に眉をひそめながら手探りで時計をとり、音を止める。

いつもならこのまますぐ起きられるはずだが、今朝はなぜか寝た気がしない。

（まあ後5分くらいならいいか……）

「バカ日向、起きなさい！ これは命令よ！」

どうやら最近の田舎まし時計は音を止めても起きないと喋りだす
らしく。

いやあ素晴らしいね、科学の進歩は

もつとも、だからといって起きてやるわけがないが。

「……へえ、私がせつかく起こしてきてんのに。いいわ、そつちが
その気なら意地でも起こしてあげる」

へぐふお！？

不穏な台詞とともに突如強い衝撃が腰あたりにおそりてきた。

息がしづらい。

いきなりの謎の襲撃に頭が混乱しつつ田を開けてみると、そこには

幼馴染の凛華がまたがっていた。

状況をみると、どうやらそのままの衝撃は凛華が俺に乗ってきたときのだらけ。

「つて、なんだよ？」

「『なんだよ？』じゃなくて早く起きなさいよ」

凛華はそう言つながら俺の背中に乗つけていた右手を後ろに引くと、

「イタツ！ ちょっと、やめろー。」

ものすげえ強いビンタをされた。

「なんのよ、私がせっかく起きてあげてんのに！ このまま脊髄折られたいの！？ それともこの状況から助かるためにあの川でも渡る！？」

それって渡つたら人生が終わつてしまつ絶対渡つちや駄目な川だろー！ てかどつちにしろ俺は死ぬしかないのか！？

(……最悪の目覚めだ)

こままだにポカポカ叩いてくる凛華の腕を押さえながら、俺は深いため息を吐いた。

俺の名前は成宮日向。なみやひなうが

今は17だが今年で18歳になり、遂に18禁PCGゲームとつも

のを正直に語れる歳じと……ほん。

髪は少し茶色が混じつており、よべ、「染めた?」なんて聞かれるが地毛だ。断じて染めてはない。

背は170後半。体は下級生徒のときのトレーニングのおかげで結構引き締まっているみたいだとは思つ。

でもつて俺の上にまだがつてゐる大バカは幼馴染の杉原凜華。身長は俺より頭一つ分くらい小さく綺麗な金髪の長髪で、一部を後ろで一つに束ねてゐる。少し違うけど、簡単に言へばボーネルだ。

体はすりつとしで顔も整つてゐる。これで胸もあれば完璧なのが……残念だ。

それとクオーターのこともあり、田は綺麗な藍色をおびてて名前のとおり凜とした雰囲氣がある。

それと今年、俺と凜華は上級生徒になる。

……ん? そここやまだ始業式やつてないな。

「なあ凜華、始業式つていつだっけ?」

「寝ぼけてんの? 始業式は今日よ

「ああ、今日ね……」

俺は苦笑いを浮かべながら時計を見る あれ? おかしいな。凜華の言つとおりまだ寝ぼけてるのかな。こつもならもう登校の準備をしてる時間だな。はつはつは

「まさかの寝坊!?」

「だから今起こしに来てんでしょうが」

あ、そうだった。と納得する前に凛華のストレートがとんでもくる。

「なんで俺はそんなに叩かれなきゃいけないんだ。まあ昨日ちょっと夜遅くまで起きていて目覚ましの時間をセツトし間違えた俺も悪いといえば悪いが。

「凛華つてすぐ人のこと叩いてくるよな」

「んなつ！ う、うるさい！ 起きないあんたが悪いのよ、このバカ日向！」

いきなり顔が赤くなつた凛華に今度は強く押される。いつもなら一步下がるくらい（それでも十分強力だが）で済む一撃なのだが、まだ寝起きで体が起きてなかつた俺はよろめいて

「うぐっ」

「あつ……」

その勢いのままタنسの角に頭をぶつけてしまい、凛華の心配そつな声を聞きながら俺はまた意識が遠退いていった

東京から南に位置する海面に作られた超大型人口島。

その島に作られたこの近未来試験都市こそが俺たちの住んでいる場所である。

アグレッシンのときの戦闘時に備え、地下シェルターなどもあるかわりに「近未来都市」ということで最近の流行の店やデパート、遊園地に繁華街となんでもある。

さらには本島とは海中電車によつて繋がつてゐるので非常に住みやすいのだ。

だから学園関係者以外にもここに住む一般市民や観光客なども大勢いる。

そしてそこに建設された教育機関の中の一つが俺たちの通う学園である。

政府アグレッシン対策本部直属リベンジャー養成機関。

通称「リベンジャー学園」と呼ばれるこの学園は少々特殊で、14～17歳が下級生徒、18歳からが上級生徒となつてゐる

そのほかにも入学時から科目選びがあり、選んだ科目に所属することになる。

戦場で負傷した者の回収及び応急処置の訓練と、最新の医療技術を学ぶ医療科。

アグレッシンの謎の解明や性質を研究する分析科。

敵の襲来時、全体に指示を出す及び通信役をする通信科。

ブレイカーを調整する工武科。

アグレッシンの襲来時、戦場に出、戦う迎撃科。

「この学園は、本部の指示があればアグレッシンと戦う」ともなるので科田選びはとても重要だ。

ちなみに俺も凛華も同じ迎撃科に所属している。

そして、この学園はあの面倒くさがりの校長の仕業か、行事のときのみ遅刻者に罰がある。どうせ早く終わらせたいのに遅刻者がいると式が始まられないとだろ？

「 ュウガ！ 田向！…」

「ん…」

田を開けてみれば田の前に少し田を潤ませている凛華がいた。

「よかつた……もし田を覚まさなかつたりびつしそうかと……つて、そんなこと言つてゐる場合じやないわ。田向、早くしたくして」

「つ！ そつだつた。遅刻は避けなくては」

「私も今日だけは遅刻したくないわ。ほら、早く」

一度でいいからこの制度つづつた校長をぶん殴つてやりたいよ。

「よし、凛華。走るぞ」

「わかつてゐるわよ。……全べ、これも全部あんたのせいなんだからねつ」

「なんでだよ？ 確かに寝坊したのは悪かつたが、凛華が俺を置いて先に行けばよかつたじやないか」

実際、やつすれば俺はともかく、凛華はこんな急がなくてすんだはずだ。

「そ、そんなことできるわけないじゃない……」

消え入りそうな声で凛華がなにやら呟く。

「ごめん、なんていつた？」

「う、うるさい！ 早く行く！ これは命令よー。」

「お、おう

……いつたいなんなんだ。まあ言いたくなさそうだったし、遅刻しそうだし、あの危険な川は渡りたくないから問い合わせはないでおくか。

「凛華。時間がないから学校まで全力で走るぞ」

「わかったわ」

そういうわけで俺たちはなぜか初日から学校まで全力で走るはめになつた。

第一話 「あの……なんで雑巾がけをしてるんですか?」

俺と凛華が寮から（この学園は全寮制だ）学園へ全力で走りはじめてから数時間後。

俺達は雑巾を持って校舎の外に立っていた。

「……結局遅刻したじゃない」

そう、俺たちは全力で走り普段は十分かかるところを三分という好記録をだしたわけだが結局始業式には遅刻したのだった。

「わ、悪かったって。明日からちゃんと起きるから」

「信用ならない」

「……すまん」

凛華は、むうううと言いながら頬を膨らませている。

ご機嫌斜めだな。機嫌が悪いときの凛華はほんとに怖い……。

「それにしてもあと少しで間に合ったのに」

「まあまあ。罰もかるかつたし」

「……かるい？ これが？ 学園内全部を掃除するのよ！」

「わ、わかつたからそんな怖い顔するな。まあ雑巾がけだけだし、スバルタ訓練とかよりはいいだろ？」

「それは……まあね」

恐らくもう数分遅刻していたら俺達は迎撃科の教員達によるスバルタ訓練があつただろう。

まあ、学園内全部（正確には学園内の建物）を掃除するのもかな

り辛そうだが……。

「もういいわ。時間ももつたいないし。お互に半分ずつやる、でいいよね?」

確かに分担したほうが効率いいな。『機嫌斜めな凜華様からも逃げられるし。

俺は「それでいい」と言しながら雑巾を洗うバケツを取りに向かう。

「んじゃ、終わったらまたいいだな

「うん。だらだらやんないでよ

俺つて信用あるんだな……逆の意味で。

「はいはい。それじゃ

「また後でね

さて、いつたい何時間かかるんだろうな。考えただけで嫌になる。

「はあ……

くそつ、始めてから結構時間がたつたんだが……一向に終わる気配がない。

これ今天中に終わるのかよ。

現時刻は夕方の五時。学園の校則で七時半には下校しないといけ

ない。

残り約一時間半といったところか。まだ半分しか掃除できないこの状況はさすがにキツイ。

とにかくできる限り終わらせなこと。これで明日も一日掃除になつたら洒落にならんからな。

よし、わっとスピードを上げてやるか

「わおー」「ひやあー」

気合を入れてスピードを上げた瞬間、誰かにぶつかってしまった。

「わー……ーーーー」「じめん!
「つふあ?…………ひやあー!？」

俺は一応それなりにぶつかった人を庇おうとしたわけで、それで右手を相手の後頭部にもつていいこうとしただけなんだけど……まあ、その、なんだ。決してわざとではないんだが……そのぶつかった女の子を押し倒した状態になつてしまっている。

しかも一見右手はまるで相手の顔を自分のほうに引き寄せているように見えるのだ（頭を地面に打たないよう庇つただけだ。他意はない……はずだ）。

凛華がいなくてよかつた……それにしてもすゞしく綺麗な子だな。

身長は俺より少し小さくくらいだらうか。所々緩くウエーブがかかつた黒髪のロングストレート。

そして髪留めの桜の花びらと、暗闇に火の粉が舞い散つてゐるような少し紅い瞳。無意識のうちに異性に色気を感じさせるおつとつとした目元が組み合はれておしとやかそうな、いかにも清純な子だという印象を与える。

そして男ならつい守つてやりたくなるような気弱で可憐な容姿。たぶん、着物なんか着るとすぐ似合つんだろうなあ。そしてなんといっても……

上から順に、

ボンツ、

キュツ、

ボンツ。

うん。このスタイルは反則ですね。
それにこの子の胸、凛華の一倍くらいあるんじや？

いや、まあ、凛華が貧乳だからとこいつもあるが。

……などと俺がものすごく人には言えないこと（いや、ただの変態か）を考えていると女の子が顔を真っ赤していった。

見知らぬ男とこんなことになってしまったのだ。至極当然の反応だろう。

「あ、あの、び、びいてくれませんか」

「あ、ごめん。今びくから」

「は、はい。…………あれ、あなたは」

俺がびくと、女の子はびくか遠い記憶の中からなにかを思い出してこるような顔をしていた。

（あれ？ 僕との子は面識があつたかな…………？）

こりからもつられて考える。

が、記憶のどこを探しても分からぬ。

「あつ！ あなたは今朝助けてくれた人ですよね！ 先ほどはありがとうございました」

「お、おう？」

いや待て待て待て。ノリで返答してしまったが今朝は誰も助けた覚えはないぞ！

しかも最後疑問系になっちゃつたし！

しかしそんなことを気にせずに彼女は深々と頭を下げる。

「あのときあなた方が助けてくれなかつたら私はあの不良たちにな

「」をされたか……」

そのときの「」とを思い出したのか、ブルッと体を震わせる。

（不良……もしかして）

確かに今朝、凛華と一緒に学園への近道として裏路地を通りとき、不良がいて邪魔だったから蹴り飛ばしてやつたんだが……それのこどだらうか。

ちなみにそのあと少々その不良に追っかけられ結局タイムロスをした。

「本当にありがとうございました。あ、あのお名前は？」

「えっと俺の名前は成富田向。科目は迎撃科。それと今日から上級生徒になった」

それにしてもこの子、すぐ可愛いい。制服の上から主張するかのよくな立派な二つの富士山に気弱そうな目での上目遣いを組み合わせるところまでの破壊力が生まれるのは初めて知った。

しかもそれを無意識にやつてしまふのだから罪深いよな……。

そんな子を助けたことになつたとは……運命の神様、グッジョブ。
「成富田向さん……素敵な名前です……つあ、私の名前は焰香奈です。科目は同じ迎撃科です」

焰つてことは何か火に関係する家系なのだろうか。

ふと疑問が浮かんだが、どうでもいいことだと思い直す。

「焰さんか。珍しい名字だな」

「は、はい。よく言われます」

フフツと優しく微笑みながら答えるのがなんだか似合つてこる。

「あつ、ちなみに私も今日から上級生徒になつたんです。だから同級生ですよ」

「へえ、同級生だったのか。もしかしたら同じクラスになれるかもな」

ちなみにクラスは科目関係なく分けられるので違う科と一緒になることも多々ある。

なぜ科目別ではないかとこつと、多いクラスと少ないクラスに分かれてしまうからだ。

……つて校長は言つてこたがどうせ科目いとに分けるのめんどうだつたからだろ。

「はー。そのときはよろしくお願ひしますね」

「ひつりんやようしく」

お互に簡単な自己紹介を済ませた後、焰さんは首をかしげながら俺を、いや正確には雑巾と俺を実に不思議そつに見てきた。

「ところでなんで雑巾がけをしてるんですか?」

「ん? ああ、これね。あの後始業式に遅刻しちゃつて……んで、罰つてわけ」

「あ、あの、もしかしてそれつて私を助けたから……?」

「いや、そんなことはないぞ」

なんせ今まで焰さんがそこにいたなんて気づかなかつたからな。

「で、でも、私を助けなかつたら間に合つたかもしれないですしね。私も手伝います！」

「え、いいの？」

正直手伝ってくれるとは思つてもなかつたので俺は驚きながら聞いて返した。

すると焰さんは「う」口ごと微笑み、

「はー、もちろんです。どちらにせよお礼がしたかったので

「そうか。それじゃ、お願ひしようかな

「は、はいっ。がんばりましょうね

「おう」

第二話 「……なんでお前が俺の部屋にいるんだ

それから一時間後。

「……やつと終わった

俺は掃除をやつきた後の独特的の疲労と達成感に体の芯まで浸る。結局焰さんに手伝つてもうつたおかげでなんとか時間内に掃除は終わった。

本来、これを一人でやらなくてはいけなかつたことを想つと……ホントに焰さんがいてくれてよかつた。

「結構疲れましたけど間に合つてよかったです」

「ホントだよ。これも焰さんのおかげだ。ありがとうございます

「い、いえ……」

俺がお礼を述べると焰さんは恥ずかしそうに視線を横に逸らした。

「もう時間もないし早く凜華と会わなきゃいけないよな……焰さんも一緒に帰る?」「?」

「えつ……は、はい、そうします。もう周りも暗いですしあ

一瞬驚いた表情がすぐに笑顔に変わる。

「本当、遅くまで」「めんね

「大丈夫ですよ

「ありがとう。それじゃ行こうか

確か待ち合わせ場所は学園の中央にある噴水広場だつたはずだ。
凛華はもう着いているのだろうか。

噴水広場には周りを少し大きめな石で囲んだ噴水がある。この広場の正式名称は噴水広場ではないのだが、噴水以外にベンチすらないからここの学園の生徒は皆、噴水広場と呼ぶ。

だから待ち合わせ場所にはピッタリなのだ。こんなに暗い時間でも見渡せばすぐに凛華をみつけられるからだ。

あたりを見渡すと案の定すぐに見つかった。あつちはまだ気づいてないようだ。

「お~い、凛華

「遅い！」

俺を見つけるなり凛華は人差し指をビシッ！ と俺に指差し、犯人はお前だ！ 見たいな感じに突きつけてきた。

なんでそんなことをしているんだろうな。俺にはわけがわからな
いよ。

「何でだよ。まだ下校時刻過ぎてねえだら」

俺は半分呆れ返る。正直、凛華の理不^通さにまともに付^合つて
ると身がもたない。

「言ひ訳無用！ 私より後にきたら遅いの！」

……さすが天下の凛華様。そのむちゅくむちゅぶつは折り紙つきだぜ。

まあずつと一緒にいたからもつなれたけど。

「……ところでその人は誰？」

「ああ、この人は焰香奈さん」

「初めまして」

焰さんがあづらをすると凛華は少し不機嫌そうに、ふうんとつぶやいた。

「んで、田向は焰さんに掃除を手伝つてもらつたわけ？」

凛華は少し小さめな声でしかし責めるように俺をにじりんでくる。

「な、なぜそんな睨む！」

「に、睨んでなんかないわよ！ いいから答えなさい。これは命令よ」

「ま、まあ手伝つてもらつたけど」

「一体何がそんなに氣に入らないんだ？ いつも以上に不機嫌オーラがでているぞ。

「……へえ、私が一人で頑張つて掃除してたつて言つたの……あんたたちは楽しくイチャイチャしてたのね

どうしてそうなつた！？」

「これにはかの憶測IQ-70のアインシュタインでさえびっくりだろうよ。

「俺、だつて掃除してたつての」

「信じられない」

いや信じろよー。

と、俺は声に出しそうになつたが、凛華の表情が憤怒になる寸前だつたので喉の手前で押し殺した。……声にだしてたら逝つてたな、俺。

「…………もういいわ、帰る」

しばしの沈黙の後、凛華は急に少し悲しそうな表情で身をくるりひるがえし、てててつと行つてしまつた。

「お、おい、一緒に帰るんだから待てつて」

なんか今日の凛華は変だな。いきなり不機嫌になるわ、いきなり帰るつて言いだすわ、悲しそうな顔をするわ。

いつもならこんなことなかつたんだけどな。

「あ、あの、私用事があるんで一人で先に帰つててください」

「え？ でもさつときは帰るつて……それにこんな時間に一人で帰るのは危ないし」

すると焰さんは、俺にだけ聞こえる小さな声で、

「凛華さんと一人きりで帰つてあげてください」

しかしこの時間帯に女子を一人でおいていくのはさすがに躊躇つ。

けれど焰さんが早く追いかけてくれた。「と俺の背中を押すの
で結局俺は手を振る焰さんを置いていく」となった。

男子と女子の体力の差なのか、すぐに追いついた。
「なあ待てって。なんで怒つてんだよ」

走ってきたので少し息を切らしながら話す。

「……焰さんはどうしたのよ」

凛華はまだ不機嫌なのか、俺のほうを向かずに答えた。
「焰さんなら用事があるとかでまだ学園にいると思つ
「一緒に帰らないの?」
「だつて凛華を一人で帰らせるわけにはいかないし」

焰さんを一人で帰らせるのは心配だが凛華のほうもやはり心配だ
しな。

すると凛華はちょっと顔を赤くして「や、やあ……」と両手を
うにそっぽを向いてしまった。

「ま、まあ今日は一緒に帰つてくれたから許してあげる
「そ、そつか」

どうやら機嫌は直つたらしく。

俺がホッとしていると今度は凛華がこちらをチラシと見てきた。

「ねえ田向」

「ん？」

「田向は姫さんのこと好きなの？」

「ふほつー、俺は凛華の予想外すぎる質問に思こつもせぬ。

「な、なんでそんなこと聞くんだよーー？」

「き、聞いてるこつちも恥ずかしいんだから卑く答へなさいよーー！」

「じゃあ聞くなよ！ と、心中で突つ込むがせつかく機嫌が直つたばかりなのでやめておく。

「好きなわけないだろ。今日知り合つたばっかだし」

「……ホント？」

「うつ……そんな上田づかいでこつちを見るな。……幼馴染だからよく忘れるけど、こつ不意打ちされると結構可愛いなと思つてしまつ。ちなみに決して上田づかいに弱いわけではない。

「ほんとだ。嘘ついたつてしょつがないだろ」

「……そうよね」

少し上機嫌になつて隣を歩く凛華。

なんだかこのままだと、こつちが酷くやられっぱなしな氣がある。

「なあ、そういう凛華は好きな男いないの？」

「な、なな何てこと言い出すのよーー、い、いないもん！ 絶対絶対絶対対いないもんつー！」

俺の言葉を聞くや否や腕をぶんぶん振り回して大否定をする凛華。

正直そこまで大否定されると返つて問い合わせる氣も失せる……そ

れともう腕を振り回すな。俺に当たっているか。

それにしても今まで一番顔が真っ赤になっているな。新記録更新つと。

顔を真っ赤にして否定する凛華は見ていて楽しい。いつもこんな風に表情がこころ変わるで一緒にいて飽きない。だからいくら理不尽でもずっと付き合つていられるんだろうな。

真っ赤な凛華をじっと見ながらそんなことを考えていると、俺が

まだ疑っていると思ったのか、ひときわ大きな声で否定する。

「絶対いないんだからねっ！ 勘違いしないこと！ これも命令です」

「わかったって

まるで拗ねた子供のようになにか張る凛華をなぜかなだめる俺。

そんな感じでわいわい言い合しながら帰つていると、二つの間に
か寮の部屋の前に着いていた。

「そういう部屋が隣になつてよかつたよな」

「うん。用事があつてもすぐ会えるしね」

ちなみにこの学園の寮はA棟とB棟で上級生徒と下級生徒に分かれている。

男女で寮が分かれていなければ珍しいと思つが……まああの校長のことだから当然というべきか。

部屋は一人一部屋でたしか1LDKだ。寮の割に広いのはやはり国家直属だからなのだろうか……そうだとしたら税金の無駄遣いなのでは？ と最近疑問に思つ。

まあ一人一部屋のおかげで今朝みたいに凛華が俺を起こしにきても誰かにバレることはないのだから文句はない。

「それじゃまた明日な」

「うんっ」

凛華と別れて部屋に入る。さて「ンビニに夕食を買いに行こ」うか、それともシャワーでも浴びようか
「……なんでお前が俺の部屋にいるんだ」
「フツ。気にすることはない親友よ」

なんと俺の部屋には先客がいた……鍵閉めておいたはずなんだけどな。

その先客とは、俺のクラスメートで見た目不良の上岡トオルかみおかだつた。

最初に言つておぐがこいつは俺の入学当初からの親友ではない、ただの悪友だ。

第四話 「なあ、田可。今日またおれを説いてきたんだぜ」

なぜ俺の部屋に招いてもないクラスメートがいるのか……俺は今にでもぶん殴ってやりたい衝動をとりあえず抑えて聞く。

「んでも、なんでお前がここにこるんだ?」

「罰掃除お疲れさん」

「なあ、ここつ殺していくのですか。

「俺の質問を無視してもうひとつ困りますよ、トオルさん」

俺はかの有名なスナイパー、「ゴゴゴ~? も後れするくらいの殺氣をだしながら、再度聞いた。

「なあ、鍵を開けるくらい俺にとっちゃアリを踏み潰すようなもんよ」

だから質問の答えになつてないし。

つてかアリを踏み潰すようなもんって……俺の部屋のセキュリティービンだけ低いんだよー。

「まあまあ、落ち込むなって」

「何に落ち込むんだよー。むしろ、じつはお前を誰にもバレずに殺せるか思考中だよー」

それと、リビングにあるソファに勝手に座つてんじゃねえ。

いかんいかん。突つ込む要素が多くて俺のほうがおかしくなってきた。

ちなみにこいつは工武科で俺のクラスメートだ（いや、明日クラス替えがあるから「元」かな）。

髪は染めるのに失敗したのかといふどこかの黒髪が混じっている微妙な金髪で、体ががつちりしていることもあり、見知らぬ人が見たらまず不良だと思われるだろ？。背は俺よりも少し高く、まあそこそこいい顔をしている。

成績は中之上で工武科としての技術もある。だから普通なやつこそモテるのだろうが……こいつは全然モテない。

さつきみたいにを人の話を聞かないところもあるが、俺が思つにモテない理由は別にあると思つ。

「なあ、田向。今日はこれを持つてきたんだぜ」

少し偉そうに宣言しつつオルがソファから降り、側にあつたかばんの中から出したのは……H口本だった。

そう、俺が思うにこいつがモテない理由は「変態」だからだと推測する。

それにしても、H口本をびいびいと見せつけてくるこのアホ……まるで、小学一年生が徒競走で一位をとつてきたときのよつたな顔をしてやがる。どんだけ嬉しいんだよ。

「またそれか」

「こいつはよく買ったH口本を俺の部屋に持つてくるのだ。
なぜ俺の部屋かとこいつと……まあ、俺も健全な高校生なのである。

正直言つて見たい。

決して邪な考えがあるわけじゃがないんだ。

しかし自分で買つたH口本の度胸はないのでこいつして見せてもらつて
るわけだ。健全な男子学生諸君なら分かつてくれるつて俺信じてる。
「そんなこと言つたりやつたりよお～見たいだりよ～？」

「……まあな」

「ふわっ！ こいつすぐえむかつく！ 今すぐ殴りたい！！！ け
ど持つてきてくれたから許す。

「んぐ、どんなやつなのよ

「ふつふつふ。なんと…… ポニテ特集なのよ」

「な、なん……だと！？」

「はー いかんいかん、またおかしくなつてしまつた。

それにしておもポニテの子とせ……『くへつ。

こままでトオルがもつてきたのはどれもH口本ではあつたりの

黒髪ストレートの巨乳ばっかで正直つまらなかつた（決して貧乳萌えなのではない。決して）。

が、ポニテの子となれば話は別だ。今すぐにも見たい。と言つ
か見せる。

「トオルよ、ついに見つけたのだな
「ああ、俺はやつたぜ、親友！」
「さすがだ我が親友よ！」

ガシツ！

俺達は熱い友情の握手をした。

そう、それはこいつと初めて知り合つた日からの、ポニテの子特
集のエロ本を見つけるという一人の夢が叶つた証。

それはポニテは正義だという証。

それは友情は見返りを求めないとこつ証。

それはこれから鑑賞会を始めよつとこつ証。

それは喧嘩せず交互に見ようといつ

ああ、俺はこいつに敬意を払おう。この究極に田の保養になる本
を手に入れてきてくれたこいつに。

「ああ、鑑賞会といこつぜ、親友……ぐふふ」
「もちろんとも、親友……げへへ」

こうして俺らは変態だと思われても文句が言えないくらい、にやけた顔をしながら俺の部屋で徹夜の鑑賞会を始めたのだった

第五話 「それじゃ朝のエラは終わった

翌朝。

窓の外から朝を告げる小鳥達の声がよく聞こえる。俺はこの鳴き声を聞きながら朝を迎えるのが結構好きだ。

しばらく聞いてから体を起こすと気持ちよく起きれる。

しかし昨日は聞いてたら寝てしまつて遅刻してしまったので、さすがに今日はすぐ起きる。

(ん……体中が痛いなあ)

背伸びをしながら起きると体中が、特に腰あたりが痛む。昨日の罰掃除とその後の鑑賞会での夜更かしで、どうやら昨日の疲れが残つてゐるらしい。

そんな疲れが残つてゐる体をほぐしながら俺は朝食の準備を始めた。

朝食はいつも簡単なものを作る。今日はスクランブルエッグとトーストだ。俺は朝は小食なのでこれくらいでたりる。

俺が朝食を作り終えゆつくつとテレビを見ながら食べると、ピンポンとチャイムが鳴つた。

(凛華かな……)

いつもこのくらいの時間に凛華は俺の部屋にくる。俺は食べかけのトーストを口にくわえたまま玄関に向かった。

ドアを開けると予想通り凛華がいた。

「おはよう日向」

「おはよう」

いつもどうりの挨拶をする。なんか日常って感じだよなあ と俺が漫りながら凛華を見ると、制服をいじりながら少し恥ずかしそうにしている。

「ね、ねえ、制服似合つてる?」

どうやら上級生徒の新しい制服が似合つているか気になつてしまがないらしい。そういえば昨日もその制服だつたけど遅刻しそうで（結局したけど）それどころじやなかつたからな。

上級生徒の制服は下級生徒の制服の子供っぽいのと違い、清楚な感じがあり、いかにも大人っぽい感じだ。

凛華の元からある凛とした雰囲気もあつてか結構似合つている。スカート丈も短くひらひらしていて、胸以外は女子の理想の体型をした凛華が着るとそのほどよく引き締まつた、でも異性を感じさせる太ももが少し覗いていて、すごくいい。

「は、早く言こなさい！」

沈黙に耐えられなかつたらしい凛華が恥ずかしそうに言ひつ。

さて、これで胸さえあればなあと常田頃思うわけだが決して口にだしてはいけない。だしたものならその日が俺の命日になるだらうから。

「結構似合つてるぞ」

とりあえず俺がありきたりの感想を述べると凜華は「あ、ありがとう」と恥ずかしそうに、でも嬉しそうに呟いた。

そのまま俺が仕度が終わるまで迷うておくと、ずっと「兀」「兀」しながら待つてそんな感じがしてしまったけどの上機嫌だ。

仕度が終わるまで待たせるのも悪いので玄関に戻りながら聞いた。

「うん、そうする」

凛華は「返事でうなずいて鼻歌をしながら、おじやましまーす」と礼儀よく挨拶をした。

俺と凛華が朝食と一緒に吃るのは入学してから結構あることだつた。俺が朝食をいつも多めに作つてしまつ、とこゝにもあるが凛華が料理が苦手というのが一番の理由だと思つ。

「やっぱ田向のスクランブルエッグはうまいわね」

凛華がスクランブルエッグを頬張りながら俺に言った。ちなみにスクランブルエッグは凛華の大好物だ。

幸せそうにもふもふ食べている凛華が小動物ぽくて少し可愛い。

「ありがとよ。凛華もスクランブルエッグくらいは作つてみたらど

「うだ？」

「むむむ……私が料理苦手なの知ってるくせに……田向の意地悪」

眉を眉間に寄せながらぶつぶつ言い訳をしてくる。卵をフライパンで炒めるだけなんだけどな……。

「まあまあ、それより今口は新しいクラスの発表もあるし早く食べてとっとと行こうぜ」

「うん」

凛華はそれほど氣にしてなかつたのか、怒る「」ともなく素直にうなづいた。普段も「」うだつたらいいんだが……。

それから俺達は少し早めに朝食を食べ登校した。

寮から学園までの距離は近く、徒步10分くらいいだ。

なので、凛華と話しながらいくとすぐに着いた。
学園に着いた俺らは校門近くにいた教員から新しいクラス表をもらひ。

「今年」それは田向と同じクラスであつますよつ

「

「ん？ なんか言ったか？」「

「べ、別に何も言ってないわよ」

なにか呟いていたような気がしたが俺の気のせいだったのか。

「お、今年は俺も凛華も一緒にやん」

「え！ ホント？」

「ああ。後トオルや焰さんも一緒にだな」

「へ、へえ……」

下級生徒のときは一回しか同じクラスになつてないからか、一緒にクラスと聞いたときは、ぱあっと嬉しそうな笑顔を見せたが焰さんの名前を聞いたら少し不機嫌そうな表情になつた。

「おい、凛華。どうした？」

いきなり黙り込んだ凛華に心配そうに聞くと、

「う、うるさい！ 大丈夫だもんっ」

と言つて俺にポカポカたたいてきた。

このポカポカたたく、が見た目以上に痛いんで俺は手で防ぎながら謝る。

しかし凛華は、バカ田向！ 鈍感！ アホおおおーー！ と俺の悪口をさんざん叫んだ後、一人ですたすたと先に行つてしまつた。

やれやれ、理不尽にもほどがあるだ。

しかし、まあ凛華もしばらくすれば機嫌直るだろ？。

教室に入ると結構生徒がいた。みんな新しいクラスの発表の日だから早く来たのだろう。

仲のいい友と喋っているもの。

一人で本を静かに読んでいるもの。

疲れたのか、机に突っ伏して寝ているもの（ちなみに後で確認したらトオルだった。昨日の徹夜がひびいたのだろう）

やはり上級生徒となると皆だいぶリラックスしているようだ。

俺は熟睡してるトオルの頭を忘れてた昨日の不法侵入の罰として、思いつきり叩き起こしてから自分の机に向かった。

「席に着け~」

座つて一休みしてたらチャイムが鳴り、だるそうな声とともに教員が入ってきた。恐らく担任だろう。

教員は壇上の上にクラス名簿を置いた後出欠を確認した。

「焰香奈。……ん？ 焰は休みか」

（焰さんが休み……？ 昨日別れたときは元気そうだったんだけどな）

「まあいい。後で私が確認しておく。それと上級生徒は下級生徒と違つて午後からすべて各課の棟で専門授業だからな。忘れんなよ」

下級生徒のときは午後まで普通の学校と同じ授業をやつて放課後から専門授業だったが、上級生徒になると午後から専門授業なんだな。いよいよ本格的なことをするつてことか。

「そうそう、それと迎撃科は専ブレを持っているものは持つてくるよ！」

専用機ブレイカー、か。

よく略称として「専ブレ」「専用機」などと呼ばれている、適性率が高いものに『えられるその人専用のブレイカーのことだ。

そもそもブレイカーとは、簡単に言うと人の感情をエネルギーとした武器だ。

アグレッシンの姿は派虫類のようで特徴などは一體一体違うが、どいつも「コア」と呼ばれる唯一の弱点がある。そこを破壊することアグレッシンは活動を停止し、死ぬ。

しかし鱗が硬く、ミサイルなどの普通の兵器ではコアに到達する前に鱗でふさがれるか、かわされるためあまり効果がないらしい。

そこで対策本部は確実にコアに攻撃するために動きの自由が利く人が持てる武器で、なおかつアグレッシンの硬い鱗に防がれても耐えることができる強度を持つ武器を作成しようと試みる。

そこで思いついたのが人が持つ怒りや憎しみなどの「感情」をエネルギーとして武器にする、だった。そして本部は開発に成功し、その武器をブレイカーと名づけた。

専用機ブレイカーは所有者しか使えない分、所有者との適性率が上がり感情が伝わりやすくなり、武器の性能も上がる。

さらに、人によっては適性率が高いと「」く稀にだが超能力のようなものが使えたりする。

逆に適性率が低いとブレイカーが起動すらしない。

なので専用機ブレイカーは適性率が一定以上のものでないと「えられない。ちなみに、俺も凛華も適性率が専用機の基準適性率よりも高いので専ブレ持ちだ。

ブレイカーがどうやって作られているかは國家級のトップシークレットのため本部の開発チームしか知らない。工武科のやつらも調整や改良などはできるが作ることはできない。だからブレイカーは俺達にとって最高の武器であるとともに、どうやって作られたかもわからないのだ。

まあ、ここ十年くらいアグレッシンは襲来してなく、俺も見たことはないから詳しくは分からぬけどな。

「それじゃ朝の H.R. は終わりだ」

その後も簡単に下級生徒との違いを教えた教員は、「もつ用は済んだ」といわんばかりにそそくさと教室を出て行った。

それから俺は次の授業の準備をはじめた。
ちなみにこれは昼休みになる前に気づいたことなんだが、俺達はこのとき一番重要な説明を聞いていなかつた。
そう、担任であるはずの教師の自己紹介だ。

第六話 「ん、特に変わんないんじゃね？」

午前の授業が一通り終わり昼休みになり、俺は凛華とトオルと屋上に昼食を食べにきていた。

ちなみに午後の授業は科目ごとの専門授業で服を各科目との制服に変えなくてはいけないため昼休みの時間は結構長い。

屋上には人があまりいなかつた。恐らくほとんどの人は動くのが面倒で教室で食べているのだろう。

俺達は風当たりがいいところに座り、食べ始める。

しばらく雑談しながら食べた後、俺は朝に気になっていたことを思い出した。

「なあ凛華。焰さん大丈夫かな？ 昨日はあんなに元気そうだったのに」

「知らないわよ、そんなの」

さつきから普段より強く吹いている春風で乱れる髪を右手で鬱陶しそうに押さえながら嫌そうな声をだす。

……おいおい、まだ不機嫌なのかよ。さつきまでは大丈夫そうだったんだけどな。

さて、どうしたものか、とため息をついていると先ほどからずっと肉を食べているトオルが俺と凛華を交互に見ながら俺をひじで小突いてくる。

「ありや、凛華さん不機嫌じゃ〜ん。日向〜、わてはお前なんかしたな〜？」

ホントめんべくせこやつだ。その語尾をのばすのも気持ち悪いからやめてくれると嬉しいんだが。

「とりあえずお前は黙れ。喋るな。その憎たらしい口はなんかに呪われて永遠に開かなくなれ。それと肉ばつかくうな。野菜食え。栄養バランス考えろ」

思いつく限りの嫌味を言い、野菜ジュースをトオルの顔に投げると、たすがのトオルも黙つて野菜ジュースを飲み始める。

すると何か不思議そうな顔をした凛華がこちらを横目で見てきた。「そういえば日向、迎撃科つて上級生徒になると何やるの？」

「ん、たぶんチーム」とにわかれて実践訓練じやないか。確かに入科時の説明会みたいなやつで上級生徒はブレイカーを使っての実戦訓練があるとかいつてた気がする

「そういえば入科したときはいろいろな検査やつたね」

凛華は少し懐かしそうな目で外を見る。

乱れる髪を片手で抑えながら遠くを見る凛華はすこく大人びた感じがして……恥ずかしさを紛らわかすかのよつに俺は記憶を探るのに集中する。

「確かに。ブレイカーの適性テストや運動能力調査は分かることで、血液採取なんかもやつたな」

「結局なんのために血液なんか採取したんだろ?……血なんかとっても使い道ないと思うんだけどなあ」

「さあな……まあ気にはしないんじゃないか」

他にもいろいろな検査をしたためそのときのことはあまり覚えて

いない。

「それもそうね。とにかく下級のときは樂しめやつね」

「そうだな」

下級生徒のときは筋トレや武器の使い方の練習、体力をつけるためにランニングなど実際に面白くもなんともない、それこそ普通の学校で言う部活動みたいな授業だった。

そのときは「こんなにアグレッシン倒せるようになんのかよ」とよく愚痴つっていた気もある。

もつとも、アグレッシンが襲来していくる周期は6・7年に1回ほどで、迎撃科のほとんどが生徒達は自分達がアグレッシンと戦う“ゴッド・リベンジャー”なんだということを忘れている。

それに、近年危険な武器を持った凶悪な犯罪者やブレイカーを悪用する元生徒などが増えており、警察では対処しきれないため迎撃科が武力を持つて解決する仕事もある。

さりに実際ここ十年はアグレッシンは襲来してきてないため、最近はそちらのほうがメインになつている。

ちなみにこの学園は普通の学校とは違ひ得点制で、勉学のほかに所属科でいい成績を残せればポイントがもらえる。

もらえるポイントはその功績に応じてだ。なので犯罪者を捕まえたとなればかなり大きなポイントになる。

しかし反面相手は銃などの凶器を普通に使ってくるのでたまに油

断して命を落としてしまつ生徒もいるため、ノーリスクではない。

一度本部のほうで「命の危険があるからやめたほうがいいのでは」という意見も出ていたが……今まで世間にアグレッシンのことは隠してきたため、アグレッシンのことをよく知らない一般の人々には、この学園は凶悪犯罪者に立ち向かうための特殊部隊育成機関と認識させている。

だからやめるわけにはいかないのだ。

ちなみにアグレッシンを一般にほとんど公開しないのは、アグレッシンはそんなに恐ろしい存在ではないのだと人々を思い込ませて、襲来時にもパニックにならないで避難できるようにするためだ。

アグレッシンのことは学園内最高の機密事項なので、卒業後にもアグレッシンのことを世間にばらそつとすると、すぐに学園からの迎撃科の教員で組まれた特殊部隊で牢獄にいれられてしまうほどだ。

他の科がどうなっているかは知らないが、迎撃科が一番危険な科である理由はこれである。そのかわりに待遇は全科の中で一番になつている。

「そういうや、工武科つて上級になつて何か変わるものか?」「ん、特に変わんないんじゃね?」

トオルは飲み干した野菜ジュースのストローを歯でかじりながら、

いかにも興味なさそうな感じで答える。

つてか子供じゃないんだからストロー噛むなよ。いやそれより疑問形に疑問形でこたえるなよ。

とはいえた半分予想していた答えなので聞き返はしない。どうせ聞き返しても同じ答えが返ってくるだろう。もう突っ込む気力もないわ。

また肉を食べ始めたトオルを注意していると凛華が時計を見てから、こちらを見る。

「田向、やうそろ部屋戻らないと間に合わないわよ」

おつとせうだな。

俺はまだ少し残っていた白い飯を口に押し込みながら立ち上がり、凛華と一緒に寮の部屋に着替えに向かった。

第七話 「よし、殺り合え」

部屋に戻った俺は迎撃科の制服に着替えた。

迎撃科の制服は活動上命の危険が伴うので、防弾性になっている。

胸には迎撃科であることを示すバッジがある。バッジは学年を表すのと、非常時にこれを見せるこ^トとよつて立ち入り危険区域などにも入れるなどの役割もある。

腰にはブレイカー^{マチック}や拳銃を収納するホルダーがついている。

ちなみに銃は非ブレイカー^{マチック}所持者などの犯罪者を捕まえるときによく使^つ。

ほかにもまだブレイカーを扱え切れない下級や上級の一年がブレイカーの変わりに使つたりする。聞いた話だと、相当な上級者はアグレッシン戦でもブレイカーと銃を使い分けるらしい。

銃は自動拳銃^{オート・マチック}だ。ただ、拳銃を工武科の連中に頼んで改造し自分専用の拳銃にしてもよいことになつてるので支給された拳銃をそのまま使つている者は少ない。

「まあ、拳銃^{これ}を使うことがないことを祈りたいけどな」

俺の拳銃はトオルに改造してもらい、反動を少なくしてもらつた

のだが……なにかに失敗したのか、引き金を引く度に1発ずつ弾丸が発射される半自動式時に一回引いただけで3発ほど同時に出てしまつのだ。

ようするに、3発目、2発目が前の弾に当たつてしまい失速してすぐに落ちてしまうのだ。運が悪ければ跳ね返つてきて自爆だ。

それでは洒落にならんのでトオルに直すよつに言つたのだが、「もう疲れたからまた今度な」と一発で断られた……今度あいつに向かつて1発撃つてやるうか。

と、冗談にしてはリアル感があるなと思いながら、俺は拳銃をしまいブレイカーを手に取る。

ブレイカーは扱いやすいよつにか、箱のよつな形をしている。これが起動するといろいろな武器の形になるんだからすごい。いつたいどうやって作られてるんだろうな。

「それにしても専用機ブレイカーを持つてゐるくせに使つたことは一度もないって変な話だよな」

入科時に高い適性率をだしてから持つてはいたが、使つたことは一度もない。ブレイカーの専門授業のときも適性率が低くても起動できる練習用のブレイカーしか使わせてもらえなかつた。

今日やつとこれを使えるのか そう思つと、なんだかうずうずしてくる。

一刻も早く行きたくなつた俺は、ブレイカーをしまい部屋の外にでる。

各個部屋につながつてゐる渡り廊下に出ると、なんだか先ほどよりも暑く感じた。

さつさまでは風が南に強く吹いていて涼しかつたのだが……

いきなり風が吹かなくなつたのに少々違和感を感じてゐると、隣の部屋から同じく迎撃科の制服に着替えた凜華が出てきた。

「あら、日向にしては早いじゃない」

心底意外だつたらしく、少しつり田氣味な田をまんまるに見開いている。

「失礼なやつだな。そんなに俺はダメ人間か」「えつ、違うの?」

……嘘をつこうるよつては見えない顔で言つてこられたると結構傷つくんだが。

「それよつざつする?」

昼休み終つてまで約20分ある。今から行くと少々早く着いてしまうのだ。

「そうね、ゆっくり話しながらでも行くのは?」

「やうだな、ここにいてもやる」とないし

すると、凜華はいきなり田を輝かせて、

「ねえねえ！ それじゃ久しづびにグリコで行くのはどう？」

……幼稚園児か、お前は。

「そんなことやつてたら今からでも間に合わねえよ」

ちえつ と少しふてくされた凛華を横田で見ながらスタスタと学園へ向かう。

「ちょ、ちょつと待つてよ！ 「冗談だつてば。それにそんなに早く歩こいやすぐ着いちゃうじゃない」

後ろから袖を引っ張られたためしかたなしにペースを落とし、俺達は「」の後どんなことをやるかなと話しながら学園に向かった。

「全員銃を出せ」

授業開始のチャイムが鳴るなり迎撃科の教員の一人、狼火わいがが名前

のとおり獲物を射殺す狼のように「」ちらを見る。

狼火は全科目の教員の中で一番狂つてる女教員だ。

歳は20代後半と教員の中では若く、何色にも染まらない漆黒のショートヘアに威圧感のある鋭い目。しかし、どちらかというとかっこいい美女を連想させる綺麗な顔立ちとモデルも顔負けの抜

群のスタイルのよさで入学したての男子生徒に人気だ。

もつとも、この狂った性格を知れば老若男女問わず誰もが恐れるが。

口調は荒いが実績はすごい。

13年前の過去最強のアグレッシンが率いる大群が襲来し、過去最悪の被害を被った決死の迎撃戦。

そこで15にも満たない少女であつた狼火は、普通は8人がかりでやつと倒せるかどうかのアグレッシンを一人で3体倒したという化け物じみた、それこそ神のみぞなせる業をやつてのけたのだ。

ちなみにそのときの狼火の戦いを見ていたリベンジャーは口々に「あいつの戦闘能力は人間じゃありえない」と言つていたらしい。

そして、そのときから狼火はリベンジャーの世界ランクでも一桁に入るようになり、そのありえない戦闘能力と狂った性格からついた二つの名が『狂神』だ。

そんな『狂神』を怒らせては一瞬にして殺されかねないので生徒達は皆、ビクビクしながら銃を手に取る。

そして狼火のことを下級のときからよく知つてるのでこの後何を言つか大体分かる。

恐らく……

「よし、殺り合^ヤえ」

いきなりの殺し合い宣言に生徒達の間で動搖がはしる。

……ホント、狼火だと冗談じやないから困る。しかも何人か殺し

たことのあるような日つき。いや、教員になつてんだからそれはないと思うが。……たぶん。

狼火の隣にいる副教員の人もビクビクしながら「狼火先生、ちゃんと説明してください」と注意している。

つーか同じ職務の人からもあんな感じなのかよ。何んだけ恐れられているんだ。

狼火はいかにも不機嫌そうに頭をかきながら補足する。

「あー、ようするにだ。今からチームわけをして戦うってことだ。セーフティもちろん銃を使え安全装置も外せ」

皆、安全装置を外す。

それを見て満足したのか、よし と一つ頷いて説明を続ける。

「もちろん勝つたチームには少ないがポイントをやる。ブレイカーはお前らじゃまだ使えんだろうから無しだ。そんじゃ今からチームわけを

「

これからチームわけが始まろうとしたとき、狼火の携帯が鳴った。

どうやら電話らしく、俺らに「少し体を動かしてろ」と指示を出してからこちりに背を向け電話に出る。

俺は少し気になつたので凜華とともに狼火に後で睨まれない程度に近づく。

「なんだ……緊急……んだと……奴らが焰……い
い、」ちらりがやる

あまりよく聞こえない。

電話を終えた狼火はこちらに振り向き、俺らに気づくなり急ぎ気味に歩み寄ってきた。

「、こええ……！　ただ歩み寄せただけでこの威圧感かよ！

俺と凛華はすくっと姿勢を正しこちらにくる狼火の目を見つめた。
いや、正しくは動いたら殺されると思つてしまつほど怒りが
こもった視線から目を逸らせなかつた。

狼火は、俺達の真ん前にくると周りを見渡し、他の生徒達がこち
らを気にしてないのを確認すると俺達にだけ聞こえるよう耳元で小
さな声を、しかし事の重大さが伝わるよう威圧のある声でささやい
た。

「焰香奈がジヤスティスの連中に連れ去られた」
正義の裁き

第八話 「大丈夫だ。俺達なら、やれる」

「焰香奈がジャステイスに連れ去られた」

「そんなつー？」

ジャステイス。
正義の裁き

ジャステイスは養成学園の迎撃科やリベンジャーを「人ではない化け物だ」と言い、「我々が神に代わって化け物を抹殺しなければならない」という俺達にしてみりや意味不明の理念を掲げている組織だ。

卒業生たちのなかで、近年ブレイカーを悪用するリベンジャーが増えてきたせいなのかもしれないが、それだけで「化け物」と呼んで殺そうとする奴らが正義を名乗ってるなんて……ふざけた連中だと思う。

しかも最近では超能力の研究をしているとかの噂もあり、もはや正義の欠片もない。

もつとも、奴らがどんな超能力を持つてしてもブレイカーには断然劣っている。

なので基本的にリベンジャーが殺されることもないし、リベンジャーは「いかなる状況下でも人を殺してはならない」ため相手が死ぬこともない。

だが、だ。ブレイカーがまだ扱えない下級生徒や上級生徒の1年

は拳銃しか武器がない。

拳銃と超能力。

どちらが強いかなど考える必要もない。こちらが負けるに決まっている。

そしてこちらが相手を殺せないので対し、向こうはまるで自分の死も恐れていないかのように問答無用で殺していく。

そう、ブレイカーを扱えない生徒が連中に捕まつた場合その場で殺されるか組織の基地にでも連れて行くのか……どちらにせよ、学園からの救援作戦が間に合わなければ死ぬのだ。

そして焰さんはまだブレイカーを使えない

……」

俺は一瞬頭によぎつた最悪の結末のイメージを打ち消すように手を強く握り締め、唾を飲む。

恐らく焰さんが連れ去られたのは昨日の夜、俺が凜華を追いかけて帰つてつた後の下校途中。俺らを見送つた後帰ろうとしたら襲われたのだろうか。

（あのとき焰さんと無理やりこでも一緒に帰つていれば ）

どうしようもない怒りが、苛立ちがこみ上げてくる。だが今は過ぎたことを語つていい場合じゃない。

俺は怒りを静めるためにゆっくり息を吐いて目を閉じ、確かめる。

ふと横を見てみると凛華が手を口に当てたまま固まっていた。恐らく凛華も昨日の「」とを思い出しているのだろう。

そんな凛華に声をかけようとしたそのとき、

「もつとしつかりしろバカ共が！ 今から救出作戦を立てるから聞け。撃ち抜くぞ」

ショックで何も喋らない俺達に痺れを切らした狼火が俺と凛華の顎に銃を突きつけてくる。

怖っ！ そんな物騒なもん顎に当てるなよ。[冗談だとしてもあんただと[冗談に聞こえないから本気でやめてくれ。

凛華もさすがにヤバイと思つたのかしきりに「へへへ」と頷いている。

「学園側は今さつさ救出作戦として襲撃任務をだしたそうだ。ちなみに今回は奇襲だ。なので私が引き受けておいた。本来なら迎撃科の教員でのみ任務を遂行するのだが、今回は敵の数も正確に把握してないため私以外の教員は学園で待機することになった」

「ちょ、ちょっと待つてください！ 本来襲撃任務は教員が3年以上の上級生とでなければ受けることはできません。なのに教員はダメだなんてできる人がいないじゃないですか」

そう、襲撃戦にはブレイカーが必須なので教員の承諾をもらわない限り、受けて遂行することができるのは3年以上だけなのだ。

そして今の時間帯は3年以上は全員任務を遂行しているところだらう。

なので残っているなかで任務ができるのは教員のみ。しかしいくら教員でも襲撃任務は複数人でないと学園は受諾しない。

要するに焰さんを救えないのだ。

だが狼火は、「最後まで聞け」と余裕の表情で　いや、むしろ楽しんでいるかのような表情で話を続ける。

「お前の言つとおり今この場で任務ができるのは私だけだ。そこで、だ」

俺達の顔を交互に見ながらいつもとは違つ、まるでいたずらを思いついた子供のような笑みで言つ。

「お前らで奇襲しろ」

「なつー」「えつー」

狼火の言葉に一人して同時に驚きの声を上げる。

「なにそんなに驚いてんだ。私が焰が連れ去られたといったときお前ら何かに思いふけていたじゃないか。なにか心当たりがあつたんだろ?」

その核心を突いた言葉に俺達は反論のしようもない。

「いいか、今からお前らには強化服に着替えてもらひ。まあ、一応お前らが死なないよう私は後方で医療科のやつと待機しといてやるからやばくなつたら退却しろ」

それだけを言うと時間がもつたないのか、「15分後に裏門だ」と言い残しどこかへ行ってしまった。

強化服とは任務や対アグレッシンなど、実践で使うもので、強防弾性（通常の防弾服は弾があたると少なからず衝撃が来るが、これは軽く平手をされたくらいしか衝撃は来ない）だ。

ちなみに制服をただ強化しただけのようなもので、防弾性が高い割には重さはほとんどない。噂では制服のようになつも着てこないやつもいるらしい。

とにかく着替えに行くか。やるだけのことはしないとな。

……さて、どうしたものか。

裏門に着き、教員が持つてきてくれた強化服に着替えながらため息をつく。

（つていうか、なんで強化服に俺の名前が刺繡してあるんだ？）

普通に考えて生徒の専用強化服なんてあるわけがない。卒業してリベンジャーになつたときに専用強化服を注文するのが常識だ。それなのに俺達だけあるとは……なんだか早かれ遅かれ、俺が強化服を着ることが分かつっていた　いや、決まつていたかのよつた。

いや、考えすぎか。第一、そんなことをして学園側に得がないのだから。

「おーい凜華」

「うー、うるさいー。べつ別に考え事なんてしてないもんー。」

怒られた。呼んだだけなんだけどな……。

「それで、なによ」

「ああ、ここまできた以上断るわけにもいかないけど……お前は大

丈夫なのか？」

「大丈夫って何がよ？」

「いや、ここからは命を失うかもしれないからや……お前はやらなくともいいんだぞ」

そもそもこれは俺の責任で凜華が無理に付き合つ必要はないからな。

「あんた一人で何ができるのよ」

「そりやあ……なんもできないかもしれんが……」

「でしょ。だからあたしも行くの。べ、別に田向が心配とかそういうのじゃないから期待しないことつー。」

「そんなの、初っから期待してなーっての」

「……期待してないんだ」

なにやらびつぶつ凜華が呟いてたが、それをかき消すかのように遠くから馬鹿でかいエンジン音が聞こえてきた。

第九話 「約束して、死なないって……」れは命令よ

エンジン音はどんどん近づき、バイクと人影が見えはじめつて危ねえつ！ このままだと直撃コースじゃねえか！！

俺はなぜか不機嫌な凜華を引っ張りながら避難した。

ものの数秒後、狼火と医療課の制服をきた上級生徒がさっきまで俺たちがいたところに2台の大型バイクが豪快にドリフトしながら止まった。

……気づかなかつたらホントに当たつてたよな。

「ちょっと、狼火先生！ 危なかつたじやないですか！」

「成宮、待たせたな」

「……無視ですか」

狼火がバイクから降り、上級生徒の人もぶつぶつ文句を言いながら降りる。

（綺麗な髪だな……）

俺と同じくらいある女子にしては高い身長と医療時に邪魔になるからなのだろうか後ろで軽く結んでいるストレートの赤髪。少し長いまつげの下にはキリッとした目がどこか迎撃科の雰囲気をも漂わせる。

「今回後方で私と待機する医療科二年の雌ヶ崎だ」

「しがさき雌ヶ崎です。今日はよろしくお願ひしますね」

「いらっしゃるこそよろしくお願ひします」

一応簡単な挨拶をした後狼火は説明を始める。

「お前らにはこれからこのT-SAで奇襲を仕掛けてもらひ。前座席は成宮、後部座席は杉原だ。通信科の情報によると奴らはどこかの建物にこもっているらしい。なので近くの高速路から一階か二階辺りに突っ込み、空中で銃を乱射、着地後に混乱している敵を銃で牽制しながら焰を保護、その後は追手の迎撃は私がやるからすぐに学園まで退却しろ」

なるほど、確かに人数も分からぬ相手を殲滅してからじや流れ弾もあるから焰さんの無事が保障できないし、戦闘時に誰かが焰さんを連れて逃げる可能性もある。

だから俺らが先に焰さんを救出し、外で待機している狼火が残りの敵を殲滅するというわけか。さすがは迎撃科の教員だな。作戦に無駄が無いし、本来の目的を最優先としている。

……それにしてもT-SAか。

最新の科学技術をフル活用し、世界で唯一超小型原子力エンジンを搭載した奇襲戦用重装大型バイク。

一人での奇襲戦を基準としているので前部座席が操縦用、後部座席が銃撃用（立つても体がぶれないようバランスがとりやすい構造になつており、座席の下と横には予備の銃弾が入つてゐる）。

さらにはタイヤからエンジンまで全て強防弾性、車体の前に弾数は少ないがなぜか超小型バルカン砲がついている。（動きにくくなるのでヘルメットは無い）

……この重装備をしても最高時速は300kmを超えるといつん
だから……乗り物じゃなくてもはや兵器だろ、これ。

ちなみにT-SAの正式名称は『TYPE Surprise Attack』だ。

そしてこのT-SAを活用するために作られた迎撃科作戦時専用
超高速道路、通称、高速路はビル3階～5階ほどの高さがある。

高速路には目的地に一気に奇襲するため、ところどころにジャン
プ台のようなものが置いてあり、そこから奴らがいる建物に突っ込
んでいくのだ。

俺達一年には多少、いや素人に銃撃戦をやらせるくらい無理があ
るかもしけないが、それが一番早く焰さんを救出できるので一人と
も文句は言わない。

「よし、準備はいいか？」

「私は後方で待機だけですからいつでも

「わ、私も大丈夫です！」

「俺も準備オーケーです」

狼火の最終確認に雌ヶ崎先輩は特になにも、俺達は銃の最終チエ
ックをしながら答える。

その様子に満足したのか、狼火は好戦的な笑みをこぼしT-SA
のエンジン音を鳴らす。

「よおし、そんじゃ任務開始！」
ミッションスタート

「目的地まで残り2分です。敵は建物の中にいる模様。以前、動きはありません」

「了解」

耳につけた小型通信機から通信科のオペレーターと狼火の声が聞こえる。

この小型通信機はオペレーターからの連絡や戦闘時にも正確に指示を伝えることができる。ちなみに小型カメラもついているのでオペレーターもリアルタイムで指示を出すことができる。

それにしても、だいたい180kmくらいで走っているのにまるで静かな場所で聞いているかと錯覚するほどの聞きやすい声だ。しかも知りたい情報を先読みしてすぐに報告してくれる。オペレーターの技術もさすがだな。

「おい杉原、そろそろ銃の安全装置外しどけ」
セーフティ

凛華は狼火の指示通りに銃（ちなみに凛華は二丁拳銃だ）のセーフティーを外す。

「残り1分です」

「よし、やあそりからスピードを上げ始めり。後杉原は成富にしてかり抱きつこむか」

「「ええつー?」

「こちこちうみむかこー。建物に突つ込むときこ衝撃でとばされないみつ抱きつけって言つてんだよ」

こきなつの命令に同時に声を上げた俺たちだつたが、こつも正論を言わると反論の使用もない。

しばらくした後小さな声で、「す、少しでも変なことしたら許さないんだから」と遠慮がちに凛華が背中に抱きついてきた。

(お、おこねー)

こべら幼馴染でも抱きつかれたことは一度も無い。手すり繋いでたのはものすごく幼いこみだけだ。なんだか心拍数が異常に上がっている気がする。

(マ、マズイ……作戦中だつてのに余計なことを考へてちやだめだ)

しかしそうはいつもどうしても気になる。妙に背中に凛華にはいはずのやわらかいものがあたつてゐし……。

凛華の体温が直に俺に伝わつてくる。幼馴染でもこんなにキビキするもんなんだなあと改めて思はされる。

「残り40秒」

「成富ー スピード上げろ! 200km以上だせー!」

「つよ、了解」

つて返事しちゃったけど無理無理！－ そんなことしたら転倒するだろ！

しかし狼火の指示を無視するわけにはいかない。

俺はむりやり背中のことを忘れ、心の中で転倒しないよう祈りながら、徐々にスピードを上げていく。

183 187 193 201

速度が200kmを超えたとき、腰に回つてた手が、ギュッと強くなつた。

不思議に思つて顔を後ろに向けようと思つたが こんなスピードで後ろ向ける度胸なんて俺にはない。

「日向……」

俺がアホみたいにあたふたしてると凛華がいつもとは違つ、か弱そうな声で俺を呼んだ。

「凛華……？」

まさか緊張してるので……？

いや、当たり前か。俺は敵の的にならないよう走り回ればいいのだが凛華は違う。

突つ込んでから着地も待たずに立ち、そこからずつと銃撃戦をしなくてはならない。しかも相手が何人なのかも分からぬ状況で、だ。

弾道を予測する訓練はしてきたから死ぬことはないかもしれんが、大怪我をする確立は俺なんかよりはるかに高い。

本来なら俺がすべきだったことを凛華がやっている。

ならば俺は凛華に比べればちっぽけでも、こいつをできる限り助けなきやならない義務があるよな。

「なあ、凛華」

俺は加速と操縦に集中しつつサイドミラーに田をやり、まだ強く俺に抱きついている よくみれば手が震えている 凛華に声をかける。

「な、なに？」

「帰つたらスクランブルエッジ作つてやるよ」

その俺の場違いすぎる言葉に凛華は最初ポカーンとしたが、すぐこ俺がなんでこんなことを言つてこるのか分かり、くすつと苦笑を零す。

「絶対に、よ。忘れたり作れなかつたりしたら許さないんだからつ」「もちろんだ」

すると凛華は少し黙つてから恥ずかしそうに顔を近づけてきて、俺の耳元で呟いた。

「約束して、死なないって……」これは命令よ

田を閉じ、今この瞬間をかみ締めるかのようにぎゅっと、でもはつきりと優しくささやかれたセリフ。

その言葉を聞いた瞬間、体から抜けていくように不安、緊張が消えていく。なんだこの感覚は。今ならなんでもできる気がする。

「ああ……その命令、引き受けた」

俺は顔が少し熱を帯びて『いるのを感じていた。

（せうだ。お前は笑つてゐ顔のほうがいい）

だからもう一度とわつきみたいな顔はすんな。

俺はさうに強く、しかしそうのとは違う、どこか嬉しそうな凛華の温もりを感じながら最後の加速を始める。

「残り10秒。目標の建物発見しました」

オペレーターの言うとおりの場所に目を凝らすと廃棄となつたらしいビルがあつた。

（なるほど、隠れるにはもつてこいだな）

コンクリートの壁をぶつけて壊そつが、などと考へていて俺の考へてゐることが分かつたのか凛華が俺に聞こえるように大きめの声で話す。

「曰句、小型バルカンをリロードをせておいて」

なるほど。こういう状況のためにバルカンがついてたのか。

俺は凛華の言つとおりロードする。

しかし、まあ奴らも漫画の世界じゃないんだからまさかビルの外からバルカンぶっぱなしながら奇襲してくるとは夢にも思わんだろうな。

そのときの奴らの顔を想像するだけで笑いがこみ上げる。

「後5秒」

カウントダウンが始まり、俺と凜華は徐々に体を前傾させていく。

「4」

T-SAの進路をビルに一直線に微妙に軌道修正をする。

「3」

指をバルカンのトリガーに当てる。

「2」

照準をしつかり合わせ、緊張を沈める。

「1」

ビルに一直線にあるジャンプ台から、大空へ羽ばたく鳥のように飛び

「0」

俺は盛大にバルカン砲を放ちながら全ての想いをぶつけるかのように叫ぶ。

「行けよおおおおおおお！」

第十話 「つー何をふれた」とをー（前書き）

第十話 「 つ！ 何をふとけた」とー」

「な、何だ！？」

突如上から爆音がし、ジャステイスの奴らが驚きの声をあげる中、T-S Aが宙を舞う。

どうやらこのビルは外装以外は全て解体されており一階からだと一番上の天井まで見えるようだ。

凛華は作戦通り、敵が気づいた瞬間から俺に回していた手を腰の拳銃に回し、得意の一丁拳銃でやつらの武器を正確に射撃している。

「お前ら何をうろたえている！ 殺しても構わん、殺れ」
T-S Aの着地のドリフト音にあからさまに眉を顰めながらジャステイスのリーダーらしき男が声をあげる。

恐らうだが、今指示を出したやつの近くに焰さんがいるはずだ。

(それにしても……)

せつしきの一聲ですぐに体勢を立て直すところはさすがだ。

しかし人数が予測と全然違う。このままじゃ焰さんを救出できたとしても脱出は難しいな。

「日向！ 援護して！」

「おじおこ、無茶を言つな」

今までさえアクセルを少し踏んだだけで一瞬で80kmくらいは出る普通じゃないバイクを運転しながら、しかも敵の弾を避けているんだぞ。さりに銃で援護しろとか……どこのアクションゲームだよ。

「早く！」

「ああ、分かつたよ！ 転倒しても知らないぞ」

半ばやけくそ気味に俺はT-SAのアクセルをさらに踏み、今にも転倒するんじゃないかと思いつくらいジグザグに走りながら銃で凛華を援護する。

「死ねえ！」

ジャスティスのやつの一人が金属バットをぶん回しながら来たが、銃でバットを飛ばしつつ、T-SAで体当たりし遠くに吹っ飛ばす。

凛華も敵の武器を狙つて撃つている。が……

（おかしい……なんであいつらは銃を持たないんだ）

ほとんどの奴らが打撃武器を持っている。

まさか銃の訓練をしていないわけでもないし……違和感があります。

しかも凛華の弾は最初は一発一発正確に敵の武器を弾いたり壊したりしていたが今はほとんど当たっていない。

凛華は射撃の精密性に非常に長けており、その実力は迎撃科の中でもトップクラスなのだ。

「その凛華が撃つ」とに当たらなくなつていくなんて……しかも俺の弾も狙つてゐるはずなのに違つ方向にいつてしまつ。

(一休むことじとだ)

「ビル内に極微量ですが強い風が発生しています。銃撃戦を止め、今すぐ焰香奈を救出し、直ちに脱出してください」

「風……？」

「田向、焰香奈を見つけたわよー。」

オペレーターからの報告にさうなる違和感を覚えつつも、指示どおりに攻撃を交わしながら焰さんとの間で田向がつ。

敵を避けつつ向かうと睡眠薬か何かで眠られていたらしい焰さんと先ほどのリーダーらしき男がいた。

「これはこれは。防弾性に加えて原子力エンジン、か。学園もどんどんとんでもないものを作るな」

いみな状況でも一瞬でT-SAの性能を見抜く冷静さ。

やはつここつがリーダーか。

「ふむ。これにはいくら銃で撃つても無駄か」
「凛華、このまま焰さんを救出するからあの男を牽制してくれ」
「分かつたわ」

凛華は指示通り、再度ホルダーから銃を出し相手の動きを封じるため男の腕と足にめがけて発砲する。

よし、この弾道は絶対当たる。

なんだ……」「いつ？　なんでこんな余裕でいられるんだ？

刹那、絶対に当たる弾道にあつた弾がやつに当たる直前、金属が擦れ合つかのよつた音とともに、まるで男を避けるかのように弾が曲がつた。

「なつ…………！？」「

「危ねえな。それにしてもそのバイクに乗られていては厄介だ。だから降りろ」

「 つ！ 何をふざけたことを！」

もう一度アクセルを踏もうとしたそのとき、

「止めた……!?」

アクセルを押しても進まないどころか、まるで押し返されているかのようにバツクしていく。

「早く、降りろ」

先ほどよりも低く、威圧のある声と同時にT-SAが宙に浮き、

俺達」と横に、まるで突風にとぼとぼと簡単な傘のよつて簡単に吹っ飛ばされ、壁に激突する。

「あやつー」「ぐつー」

その強い衝撃に思わず声が出てしまってにはホントヒーラー・SAから降ろされてしまつ。

「まさか……念動力者なの……ー?」

「まさか、嘘だろ……?」

凛華の言葉に俺は驚きを隠せない。

ジャスティスはホントに超能力者を育成したつて言つのか?

それもこんなも物を持ち上げ吹っ飛ばすことができるほどの力を。

「ふん。見たところ貴様らはブレイカーを持つてないようだな。といつことは一年か? だとすれば我々もなめられたものだな」

男はあからさまに不愉快な顔をするが、何を思つたかすぐに余裕の笑みを浮かべる。

「まあ、いい。暇つぶしにはなるな。遊んでやる」

「つ! なめんじやないわよつ

「やめろ凛華! むやみに突つ込むな」

しかし完璧に見下されているからか、頭に血が上った凛華は太ももにいつも隠し持つてある短剣を握る。

「こんのつー

「まだまだだな」

男は小さい体を生かして小刻みに鋭く攻撃してくる凛華をいとも簡単に避けている。

「つーーー！れならー！」

凛華が得意とするサイドステップでの高速の切り返し攻撃も男は足をほとんど動かさず、まるで何かに引っ張られてるようにかわしている。

銃で援護しようにもただでさえ動きが速く標準が捉えられない上、先ほどのように曲がってしまっては凛華に誤射する可能性がある。

（俺はまだ見守ることしかできないのか………）

つい数時間前に感じた苛立ちがまた始まる。

「もうつたあー！」

男を壁際に追い込んだ凛華が大きく宙に飛び、回転しながら男に大根切りのように大きく刀を振る。

が、目の前にまで振り下ろされた刀が男を捉える直前。先ほどの弾が曲がったときと同じような音がし、まるで壁にでも当たったかのように刀が止まる

「え……ー？」

「邪魔だ」

凛華が驚いて気を抜いた隙にまたあの分けの分からぬ能力で凛華を突き飛ばす。

「大丈夫か」

「う、うん。けどやつぱあいつエスパーなんじや……」

俺は飛ばされてきた凜華を受け止めつつ、またも感じた違和感に頭を悩ませる。

弾を曲げるときも刀を止めるときも使っていたあの超能力。

そして足を動かしてゐる様子もないのにまるで地面を滑るような動き。

そして音は刀を止めていた間ずっと鳴っていた。

本当にエスパーならどんなものも一瞬で止められるのではないか？あれはまるで刀の勢いがなくなるまで盾で防いでるかのようないい感じだ。

いや、そもそもだ。なんでエスパーがあんな金属音のよつた音を出すんだ？

下級生徒のときの対超能力者の授業で習つたが念動力なら無音のはずだ。

少なくとも何かと擦れ合つよつた音はしない。

何かがおかしい。

だがあと一歩で分かりそうなのに全く分からぬ……

(へそつー、結局俺は何もできないのかよ……)

また怒りがこみ上げてくる。

（こつも安全なところから見てこなばつかで……今回だつて凜華に辛いことを任せっきりで…）

「……でふと自分のなかにある、『あるもの』を思い出す。

（やうが、いつやれを発動させてしまえば）

「日向！ 大丈夫！？」

「えつ、ああ」

「いきなり顔色が悪くなつていつてたけど……あたし達じや勝てないし一回撤退する？」

「いや、今を逃したら恐らくもう奴らを捕まえることはできない」

「だったらせめて狼火先生のところまで」

「駄目だ。その隙に逃げられちゃ元も子もない」

「じゃあどうすれば……」

「……大丈夫だ。あいつはエスパーなんかじゃない」

「……つえー？」

さつき凜華に呼びかけられる前、意識が飛び、ほんの一瞬だけ発動したのか今まで感じてきた違和感が全て解けた。

「こいつはエスパーではない。

「まあ、見てるつじ。お前にも手がついてしまうことになるけどな」

そう言いつつ俺は不良品のほうの銃をホルダーからだし、俺はさ

つかまでの不快感がまるでなかつたかのような余裕の笑みを浮かべる。

「さあ、凛華。反撃開始だ！」

第十一話 「命を駆け戻せつゝやつをよー」

「凛華、もう一度だけあいつに突撃しながら銃を撃つてくれないか？」

俺は男に聞かれないよつ、小さな声で凛華に言つ。
「で、でもあいつに銃は利かないんじゃ……」
「頼む。最後にもう一回だけ確認しておきたいんだ」
「……わかつたわ」

少し戸惑つた顔を浮かべながらも凛華は頷いてくれた。
「よし、それじゃ今から3秒後だ」

「うん……！」

俺たちが会話を終えると、男があざ笑いながら聞いてくる。
「さて作戦はできたのか？」
「ああ、今からその余裕そつな面づらをぶつ潰す作戦をな
「ほう……それは楽しみだ」

3秒！

「凛華！」

「うん！」

やつが言い終えた直後、凛華は全速力で走り出し一気に距離を詰める。

「またか。お前らは学ぶつてことを知らないのか
「凛華、撃て！」
「言わぬくともつー！」

パアアン。

やつの腹にめがけて銃を放つ。
しかし、銃声の直後また弾はやつの体に当たる直前 やつやと
同じところで曲がった。

「期待はずれだな」

男は手を前に突き出し、

「さやつー？」

凛華は真後ろにいた俺のほうに吹っ飛んできた。

「大丈夫か？」

凛華をキヤッチし、負傷していないか確認する。
どうやら足首を軽く捻つたらしい。赤くはれている。

「う、うん。でもやつぱあいつには……」

「いや、よくやつてくれた。後は俺が何とかする」

「で、でもつ……！」

「まあ、見てなつて。 いじままで頑張つてくれてありがとな。後
は俺に、任せろ」

安全だらう壁際に凛華を座らせ、安心させようといたせりの髪を
撫でながら「うと……こきなり」凛華の顔が赤くなつた。

「なんで赤くなるんだ？ まるでキュンつて音がしそうな感じだぞ。

「ヒュ、日向も氣をつけてよねつ」

「わかつてゐる」

俺は不良品のやつの銃を持ち、男に向かつて凛華と回じよつて突
撃する。

「貴様らは一体何度も同じことをやれば気がすむんだ」「はつ、勝手にござりてろ！」

男は俺たちが奇襲してきたときからエスパーのよつなことをしている。

そしてさつき凛華が突撃しているときにもう一回確認してわかったのだが、あいつは弾道を見ていなかつた。

あいつは一番最初の時に銃の種類をみていたのだ。

仮にだが、男が銃を知り尽くしているなら相手の銃の種類さえ分かれば弾の初速が、要するに弾の速度も分かり、自分にあたる直前が分かるのだ。

そしてさつきのオペレーターの報告にあつた、本来屋内に吹くはずがない風。

昼休みのときには結構強い春風が吹いていたつてのに作戦開始前は全く吹いていなかつた。

そう、こいつは超能力者ではあるがエスパーではない。

下級生徒のときの対超能力者の授業で嫌々ながら超能力の種類を

覚えた甲斐があつたつてもんだ。

「さつきの女と同じように吹つ飛ばしてやるよ

「はつ、やってみな

本来無風のところに風を吹かせる」ことができ、銃弾を逸らす」とができる超能力は一つ。

「……調子にのるなガキがつ！」

男が俺に向かつて手を出した瞬間、俺はすばやく真横にサイドステップをした。

「こいつ……」

「吹つ飛ばすんじやなかつたのか？」

ウインド・ソーサー
風操者さんよ

「貴様……！」

風操者 その名のとおり風を操る超能力者のことだ。

「図星みたいだな」

そう、さつき凜華やT-SAが吹つ飛ばされたのは念動力ではなく突風だったのだ。

銃弾を逸らすのも今日みたいに強力な風 昼に吹いていた春風なら不可能ではないだろう。

「そしてT-SAをやつかいだと言つたのは防弾性のことではなくT-SAに搭載されているバルカンの弾の初速を知らなかつたから。他のやつらが銃を持つてないのは俺らの銃弾を逸らすさいに仲間の銃弾も逸れてしまい意味がないから、だわ」

「……見事だ。まさか一年に見抜かれるとはな

男は苦笑する。

俺も見抜けるとは思ってなかつたさ。父さんに貰つたこの嬉しくもないプレゼントがなけりやな。

「しかし分かつたところでどうだと云つのだ？ 貴様が今もつている銃をこの私が知らないとでも言つのか？」

（そうだ。この銃の種類も恐らく知つてゐるのだろう）

俺は走りながら銃が半自動式になつてゐることを確認する。

（だが、こいつは不良品）

半自動式時に一回引き金を引いただけで2発、3発と同時に出てしまう使えない銃。

だが、逆に考えれば

一発目は一発目によつて加速する一

もう、やつの予測する弾速とは違うのだ。

「じゃあ、こいつはどうだッ！－！」

俺は男のできる限り死角に入るよう斜め上に飛び上がりつつ銃口を向ける。

狙いは動けなくするために太ももを。

さあ、田の中かつぽじつてよく見てろよ！

予測した弾側を超えて向かってくる加速する銃弾を！

一発田と一発田がほぼ同時に出たため変な発砲音が鳴響き、俺の予想通り初弾は一発田によって加速して男に向かっていった。

（よし、これで…）

勝った、と思つた。が、

「なつ……ー？」

今までとは違う、まるで黒板を指で引っかいているかのよつな音と予想外の状況に俺は愕然とする。
別に銃弾が逸れたわけじやない。

だが

銃弾がやつにあたる寸前で止まつている……！

「いやははや、驚いたよ」

男はまるで楽しんでいるかのよつな声色で空を（いや天井か）仰ぎながら喋り始める。

「まさか銃弾が加速していくとは……！ その発想素晴らしい！ リベンジジャーでなかつたらぜひともジャステイスに勧誘してたな」

だが、と男は（）か残念そうな顔で（）ちらりを見る。

「そんなので私に弾を当たれると思つたのか？ その顔では分かつてないようだが……まあ、（）まで楽しませてくれたせめてものお礼だ。冥土の土産に種明かしをしてやる」

そう言つと男はまだ音を鳴らして止まつている銃弾を手で払い、

風を剣のよつた形に収縮した。

「キミの推測どおり、私はN〇5、風操者だ。手下どもに銃を持たせなかつた理由なんかもキミの推測どおりだ。正直驚いた。だが、一つの可能性を忘れてはいる。いや、セヒの女の短剣を防いだときにはじけなかつたか」

ナンバーファイブ

N〇5……なにかの番号なのだらうか。

男はゆつたつとこちらに歩きながら剣をさらに収縮させてくる。

「可能性だと……ー？」

「そうだ。キミは私が防弾服も着ないでリベンジャーと戦つと思つたのか」

「……どうこう意味だ」

「まだ分からぬのか。要は防弾服がいらないんだよ、風壁があるからな」

「なつー？」

風壁。自分の周りを回るよつて風を吹かせるひとよつて作られた壁のことだ。

風操者なら誰でもでき風壁の強さは風の速度によつて変わるが……銃弾を止めるなんて聞いたこともないだ。

しかし超能力はファンタジーにててくるよつた魔法とは違ひ、呪文の詠唱をせずにそぐざに一切の常識を無視した力を発動できるものだ。言わば非常識の塊なのだからなにができるてもおかしくはない。

「ようやくわかつたようだな。そつ、せつきのキミの銃弾は私の風壁によつて止めたのだよ。いや、実際は止めたといつ表現は少し違うが……まあいい。これでなにをしても無駄だといつことが分かつたはずだ」

おいおい、ジャステイスはこんな化け物を創つたつひのうのか。

「そして風を収縮してできたこの剣はコンクリートの壁を切るで
紙切れのように切れる。そうだな……まずは小娘から殺るか
「ツー?」

男が凛華のまつを向き動けない凛華が息を呑む音が聞こえる。

(ま、まあこーーーのまあじゃ……)

しかしどうする。

今まままではここにまかすつ傷どひか触れる」とかでできな
い。

しかしどうしてここの聞こもやつと凛華の距離は縮まつてこく。

「ハコ、田向……

凛華が怯えやつた田で頬るよつてひりを見る。

それでも俺は動かない。いや、動きたくても恐怖なのか足が震え
ていて動けない。

守るものも、守るために銃も持つてこないので……

「安心しき、すぐにお前も殺つてやるよ」

その時、いつだつたか父さんがいなくなる前日、俺の誕生日の日
にこ言われた最後の言葉の一部とある光景が浮かんできた。

人は生きる意味があるから生まれたのではない。生まれたからこそ生きる意味を探さねばならんのだ

父ちゃんは俺に注射をつちながらそんなことを言っていた。

なあ、父さん。俺は生きる意味を見つけられないまま死ぬか？ それも守らなければならぬものを守れなあいま……

…………ドクン。

突如俺の体の奥から何か不思議なものが体中に流れ始めた。

(これは……)

俺はこの感覚を知っている。

一回目は父さんが注射している間。

一回目は迎撃科のブレイカー適性テストの時。

そして少し違うが風操者の正体を見抜いたときもこんな感覚だつた。

どのときも発動したときの意識がほとんどない。

だが、一回目のときは小さい頃でわからなかつたが、一回目のときは半分意識があつたからこの存在のことを薄々分かつてた。

そして光景はどんどん鮮明になつていき、これが何だつたのかを思い出す。

そうだ、他人には絶対に言つてはいけないもの。

別にこれは小説の主人公のようなピンチで目覚める、形成を逆転する新しい力などみたいな優しいものじゃない。

これはあのとき父さんが俺に投与した

「ようやく準備ができたか」

「ふ、狼火つ！？……先生」

いきなり耳の通信機から狼火の声が聞こえてきた。

「早く起動させろ」

「な、なんのことですか？ それよりなんで援護に来てくれないんですか！」

「私だつてオリジナルの力が見たいのだ」

「オリジナ尔……？」

「まあそんなことはどうでもいい。今感じているんだろ？ 体中を支配し始めている、お前の父が作った『細菌兵器』を

「…………」

なぜ狼火が知つている！？

今思い出したばかりだが、これは俺と父さん以外は知らないはずだ。

「なぜ私が知つているのか気になるようだな。しかしそんなことより早くしないと杉原が危ないぞ？」

「それはつ……けどあれは使うと意識が……」

「いまさら何を言つているんだ。適性テストのときから分かつてた

んだる。ブレイカーを使えば意識を保てるここに。そして隠し持つてきてるんだる、お前」

「そ、それは……ッ」

狼火の呪を突いてくるセリフに言葉が出ない。

「いいか、お前の専ブレは普通のとは違う、所有者との感情リンクを最優先させたブレイカーだ。それさえあれば意識を乗っ取られることはない。そして起動条件の残りはお前の意志だけだ」

「だからなんでそこまで知っているんですか！ それに、今ここで起動したら他のやつらにバレル可能性がある…」

もう一名にはバレているようだが。

「それなら問題ない。医療科のやつは眠らせているし杉原も恐怖でもう意識が朦朧としているはずだ。後でこまかせばいい。もちろん私は他人に喋ったことはない。学園側はすでに知っているだろうがな」

「なつ……」

本当に信用していいのか？

しかし男はすでに凜華の目の前までにきている。

（考えてこる暇はない、か……）

いいか日向、今までお前がやつてきたことを無駄だと思つた。

……ドクン。

父さんのセリフとあのときの情景がより鮮明になり、さらに流れが強くなり、筋肉が鼓動するように波打つ。

成功したことも、失敗したことも、嬉しかったことも、誰かを傷つけてしまったことも全ては無駄なんかじやない、今のお前がいるための、意味のあることだったんだ。

ドクン。

これ以上ないくらい気分が高ぶつてくる。

たとえ他人から批判されようとも必ずお前の味方でいてくれる人がいるはずだ。そしてこの兵器いんぎは誰にも言つてはいけない。これは自分の信じる道を進むとき……大切な人を守るためにだけ使え

父さんが注射の最後に、意識が朦朧としている俺に言つた、初めてで、最後になつた父親らしい言葉。

……なあ、父さん。

今こうして凜華を助けるためにこれを使うのは意味があることなのか？

それともいつものように「それもまた必然なのだ」とか言つのか？

……いや、そんなことどうでもいい。

今俺は俺のせいで凜華や焰さんの命を危険な目ににしてしまつている。

そして今使わなかつたら俺も含め凜華たちの命は危ない。

本当はこんな兵器使いたくないが……

仲間を助けるためなら俺は

ドクン！

さうに強く、俺自身と同調するかのような感じがくる。

「早くブレイカーを起動させろ！ ブレイカーの前に起動させたら意識を保つていられる保証はないぞ！」

「セット・アップ」

狼火の指示通りブレイカーを起動させる。

すると棒状だったブレイカーは見る見るうちに白銀の美しい刀になつた。

ドクン、ドクン！

さらに鼓動が増す。

「おー、超能力者」

俺は凜華の目の前でとじめの一撃を加えよつとしていた男に挑発する。

「……なんだ？ 命乞いならもう遅いぞ」

ドクン、ドクン、ドクン――

ああ、分かる。もう後少しうで起動する。
けど意識は保つていられるはずだ。

「それはこいつちのセリフだ、『ハリ野郎』

「なんだと……？」

さつきまでの俺とは違つ雰囲気に違和感を覚えつゝも男は俺に剣を向ける。

父さんが俺に残した最後のプレゼントよ。

ずっとあのときから握つていた兵器よ。

力を、かけがえのない仲間を守るための力を

「今、俺によーせッ――。」

その瞬間、一気に俺の体が細胞兵器に支配されていくのが分かった。

だが、狼火の言つとおりブレイカーのおかげで俺の意識はまだ保つてられる。

「さあ、始めよつぜ……」

一気に田つきが変わった俺に「なつ……！？」と驚愕の声を上げている男に獣のように低くなつた声色で、俺は戦闘狂のように好戦的な笑みを浮かべながら高らかに叫ぶ。

「命を駆け引きつけてやつをよー。」

第十一話 「せめてもつと俺を楽しませたから死ねよ!!」が

「ブレイカーだと……!? なぜ一年のお前が扱えるのだ。いや、それよりもお前はなんだ?」

男はこれ以上ないくらいに田を見開いていた。

だが俺の豹変つぱりに驚くのも無理はない。

そう、今俺を支配、いや同調しているものは、父さんが俺に投与した細菌兵器。

所有者と同調しありえない戦闘能力をもつた『狂戦士』……いや、戦闘狂にさせせるもの。別名『バーサーカーシステム』

これは政府がブレイカー開発と同時に世界屈指のリベンジャーでもあり、技術者でもあつた俺の父に極秘裏で開発を要請した、禁断の兵器。

しかし父さんは作つたバーサーカーシステムを実際に使い、その危険性から開発を中止した。

もつとも、それをなぜ俺に投与したのかは不明だが。

「ああ? んなもんぢつともいいだりつが。それよりもさつと始めるよ! ゼー!」

……ああ、狂戦士の俺よ。バーサーカー 凜華も不安や恐怖とかで氣絶してゐるみ

たいだからよかつたけどもし誰かに見られてたら俺が狂つたって思われんだろう。いや、まあ狂つた戦士だから狂戦士のわけなのではあるが……

今俺はどうなつてゐるかといつと、意識や記憶ははつきりしてゐるし、セリフや行動も俺の意思だが……バーサーカーシステムとリンクしてるので実際の言動は完璧に戦闘狂になつてしまつてゐる。

たとえば攻撃を受けたら「いいねえ、そうだよ。戦いはこうでなくちゃなあ！」などといつ超ドン引きの発言をしてしまつ。

戦闘のときも同じだ。身体能力などが桁外れになり、俺が反応できぬ攻撃がくると代わりに回避してくれるが、ただ相手を足止めする戦いなどはできない。

こんなのが俺の体の中にあるなんて、父さんに言われなくとも絶対に秘密にするわ。

とまあ、愚痴はとりあえずこいつをぶつ倒してからにするか。

「ふん、いいだろ、貴様から殺してやる」

男はそういうと剣の収縮を一度解き、もう一度収縮をせじじかのロボットアニメの機体が持つていそうなバズーカにした。

「塵となりてこの世から消え去るがいい」

男がバズーカのトリガーらしきところを引くと銃口から爆音を響かせながら風で収縮された弾が飛んできた。

直径1㍍はあるだろ?普通じゃないとてつもなくでかい銃弾いや、風弾は当たるどころか掠るだけで人なんぞホントに塵になってしまいそうな威力だ。が、

「そんなものか? 遅すぎぬ」

「そう。バーサーカーと化している俺にはその弾は愚か、速度すら分かるくらいに見える

「なあ、自分の必殺の一撃が跳ね返ってきたときついどんな感じなんだ?」

バーサーカーの俺は、楽しんでいるかのように風弾と地面のわずかな隙間にスライディングのように滑り込み、刀になつていてるブレイカーの腹で威力を殺さずに上へ軌道修正。そのまま体を捻りバック宙をし、その力で流れるように風弾をやつのほうに反転させた。

もつともこれは時間にしてコンマ2秒。

どんなに動体視力がいい人間でも風弾がいきなり反転したように見えるぐらいだ。

「なつ!?

驚愕もつかの間、威力と速度そのままの風弾が男自らに襲い掛かり、室内に爆音が木魂した。

「おい、まさか死んだんじゃねえだろ?」

ほお、バーサーカーの俺も人を殺したくないのか? これは意外

だな。

「せめてもつと俺を楽しませてから死ねよ!!」が

……前言撤回。少しでも感心した俺がバカだつた。

と俺が自分のセリフに自分で突っ込んでいるという奇妙なことを
していると男が両手を前に突き出しながら立つている。

「一体なぜ跳ね返ってきたかは知らんが……このくらいで死ぬつも
りはない」

恐らく全ての風壁を前面に集中させ風弾を防いだのだろう。それ
でも男は見るからにボロボロになつていて。

「ほお……いいねえ！ まだ戦うのか！ そうだよ、そこで死んで
もうつちやつまらねえんだよ！」

おい、さすがにその戦闘狂すぎるセリフはやめる。終わった後マ
ジで死にたくなるくらいに恥ずかしいから。

そんな俺の願いも意味なく、戦闘狂の俺の感情にブレイカーが鼓
動するように刀の輝きを増していく。

「な、なんなんだお前は。まるでさつきとは別人じゃないか」

まあ、実質別人みたいなものなわけだが。

「もつと、もつとだ！ 俺を楽しませてくれ！」

動搖する男を無視し、俺は体勢を低く、さらに輝きを増す刀を両

手で持ち、体を捻りながら刀を背中に隠すようにタメをつくる。

「なあ！ その風壁とやらの攻撃も耐えられるのか！」

男が警戒するように風壁を前面にさらに収縮し、じりっと一步引き下がつたそのとき、俺は捻りで生まれた力を一気に開放するように斬りかかる。

20m以上はあるうかという聞合いを男に向かつて一直線に、たつた一歩で。

普通の人間じゃありえないことだが、システムによつて強化された俺の筋力では、タメさえあれば20mくらい一蹴りで移動できる。

それもまた常人離れしたスピード、詳しくは分からぬが恐らく銃弾に匹敵する速度で。

風壁に当たつた衝撃で銃弾のときや風弾のときなど、比べものにならないくらい大きな音が屋内に反響する。

「なんだその戦闘能力は！？ まさか超能力者なのか！」

もはや瞬間移動に見えるだろうその攻撃は風壁がなければ男は何も対応できずに真つ一つにされていただろう。

そう、それほどまでにバーサーカーシステムは人を最狂にさせるのだ。

「そんなんもんかよ！ つまらねえ…… もつと楽しませやよお……！」

もはや守ることしか考えられない男は、顔を恐怖に染めながら徐々に風壁を切り裂いていく俺をまるで化け物を見るかのよつた目で見てくる。

「お、俺が悪かった！ もう一度とこなことはしないから、た、助けてくれ！」

「ああ？ 最後になつて命乞いか。残念だがもう遅い」

怒りでさりに輝きを増した刀で命乞いをする哀れな男の風壁を切り裂き、じりじりと壁に追い込んでいく。

焰さんや凜華にあんなことをしたんだ。助けるつもりは、ない。「弱すぎるんだよ、てめえ。もつ用はない。……死ね」

壁に張り付き、羞恥心を感じる余裕すらなくなってしまったのか、ボロボロと鼻みずを垂らしながら泣く男に俺はこの世のものとは思えないほどゾツとする目を向け、刀を引く。

……つてまさか刀で頭をぶち刺す気か！？ 人は殺しちゃいけないのに、んなことしたら絶対に死んじまつぞ！

とバーサーカーではない俺があせりながらも刀の軌道を逸らそうと

「あ、ああああああああああ……！」

声にならない絶叫をあげながら意識を失った男の頭には

何もなく、刀は頭の数センチ横のコンクリートの壁に刺さっていた。

（ま、間に合つた……）

直前まで頭に直撃コースだつたため男は恐怖から刀が刺さつたと錯覚したらしい。

俺は戦闘が終わつたことで静まつていくシステムを感じながら苦笑を浮かべる。

「ヒコ、田向……」

「凛華！ 無事だつ

」

あれ、視界がぐるぐる回つてへる。

「田向！？ ヒコ……ガ！ ……ガ！…」

どんどん凛華の声が遠くなつて

そこで俺の意識はなくなつた。

「これがオリジナルなのか……学園のやつらが固執するのも無理はない、か。だがたぶんあれはまだ完全に発動しきってなかつたな……」

しかしそれで“「ピー」と同等の性能……。

予想以上すぎる結果に狼火は一人不敵に笑みをこぼす。

「ん……狼火先生なにが……？」

「起きたか。なあに、たいしたことはないさ。それよりミッションは達成だ。あいつらを回収しにいくぞ」

通信機を介して日向を見ていた狼火は、どうやら今起きたらしい雌ヶ崎に声をかける。

「は、はい」

（さて、この化け物をどうしたものか……）

「狼火先生、日向君たちが空けた穴から飛びこみますんで衝撃に備えてください」

「ああ」

雌ヶ崎の言葉に、ひとまづこのことは後で考へることにし狼火は衝撃に備えた。

「田向ーー早く食べていつーーこれは命令よつ」

「お、おつ……」

今、俺の田の前にはなぜか紫のオーラを放つてゐる物体……玲、料理がある。

「これは凛華が加工食品で作ったものだ。

……つて冷静に解説してゐる場合か！

なんで加工食品がこんなになつてゐるんだよー？

じう考えてもおかしいだねー！

しかもこんなことにならなつて香奈と相談した結果、ほとんど調理済みのものを渡したはずだ。

いや、そもそもだな。加工食品とこののは誰にでも手軽にでき、簡単に見た田も味もおこしかるべきものなんだ。

それがどうやつたらこんなにかのギャグ漫画で「下手なのに気づいてない料理好きのヒロインが作った絶対に食べなくてはいけない紫色の何か」になるんだよつー

「は、早く食べなさいよー、べ、別にあんたに食べて欲しくて作つたんじゃないんだからねー、勘違いしないことシッ！ー！」

「あ、私はちょっとお手洗いに行つてきますね。田向ちゃんは先に食べてください」

凛華がそういった直後、俺の隣に座っていた香奈がありえない料理を見たショックの硬直状態から回復し逃げるよつとトイレへ行った。

……ってかあいつどうに紛れてこの料理が安全かどうか俺で確かめるつもりだろ。

「は、早くしなさい！」

「そ、そうだな」

ちょっとそわそわしている凛華を怒らせないために俺はガクガク震えている右手を左手で必死に押さえながらスプーンを持ち、凛華曰くチャーハンを口に持っていく。

（どうか、せめて生きていられるものでありますように。アーメン）

しかし、神に祈りを告げる「アーメン」すら言つ前に意識が消えていく。

ああ、と俺は消えかけていく意識の中思つ。

なぜ俺は凛華に料理をやらせてしまったのだろう、ヒ。

いやそもそもあの日、香奈を救出した翌日に凛華が病院で「生きて帰つてこれた＆初襲撃任務クリアのお祝いでパーティーやるつよつて言い出さなければ

そう、こうなつてしまつた原因は俺が意識を失つて病院に運ばれた翌日、先週までさかのぼる。

第十話 「せめてもひと俺を楽しめさせから死ねよ!!」（後書き）

諸事情により次話更新は遅れます。

なお、今までの話を改稿する予定なのでそのときは活動報告にて報告します。

誤字脱字等、ございましたらおしえていただけると嬉しいです。

第十二話 「え、えっと……たぶんやつじやか」（前書き）

ながらくお待たせしました！

これでジャステイス編完全完結です

第十二話 「え、えつと……たぶんやつとですか」

あの日風操者を倒した後俺はそのまま意識を失い、気がつけばいつもとは違う見慣れない天井を見ていた。

(「……?」)

どうやら個室らしい。ふと横を見てみると、どうやら眠っているらしい凛華がいた。

光のせいか、目の下にはくまがある。

「…………? 日向… 起きたのね… よかつた…」

「凛華、ここは……?」

「覚えてないの?」
「ここは治療科の病院よ」

そういうや治療科の棟にはリベンジャー専用の病院があつたんだつけ。

俺はそんなことを思いつつまだ眠いのか、目をぱぱぱしてる凛華から俺が意識を失った後のことを聞いた。

どうやら俺が倒れた後すぐに狼火たちが来て、雌ヶ崎先輩が俺を、狼火が凛華と焰さんを救出したらしい。ちなみに風操者は後で学園

の教員が回収するとか。

そして意識がない俺と焰さんはこの病院に連れてこられたとこうわけだ。ちなみに焰さんは俺より早く目を覚ましたらしく今は自室で安静にしているらしい。

「目を覚まさないんじゃないかとほんつとこ心配したんだからね」

「心配してくれたのか？ お前が俺を？」

俺の中のイメージの凛華だとありえないことだったので聞き返すと、凛華は顔を真っ赤にして、

「ちよ、ちよっとよ。ちよっと。//ジンゴよつもけつちやいんだか

「…」

どうだよ。

まあ、心配はしてくれたらうし。

「凛華、ありがとな」

「う、うん。そ、そようもつと感謝しなきこ

「はこねー」

今回ばかりは文句を言わないでおく。作戦中もいろいろ頑張ってくれたしな。

「なんだかんだ言って任務は達成できたな」

「そうね。正直なんで風操者を倒せたのか全然分からんんだけど

……

「そ、そつか。まあ任務は達成できたんだしいにじやないか

……

不思議そうに言つて、凛華はあのとき、狼火の言つとおり意識が朦朧としていたらしく、俺がバーサーカーシステムを使つていてる間は記憶がほとんどない。

危なかつた……もしかんな戦闘狂の俺を覚えられていたとしたら俺は社会的に死んでただろうよ。

仮に凛華が誰にも話さないつて言つても自殺したいくらいだ。

「それはそうなんだけど……まあいつか。私これからひょっとご飯食べてくれるから」

「ご飯？」と、不思議に思つて時計を見ると、あんなほど。現時刻はだいたい4時。俺はどうやら一日中寝ていたらしい。

「わかった。遅くまでありがとうございました」

「ご飯食べたらまたくるからしつかり休んでおきなさいよ」
それにしても早い夕食だな、と思いつつ凛華を見ると、腹が減つてゐのかばたばたとつまずき、壁に肩をぶつけながら出ていった。

「やれやれ。ほんと騒がしいやつだな」

凛華のあたふたぶりに苦笑しながらも、焰さんを自らの手で助けることができた達成感を感じる。

しかしそれもつかの間、次の来訪者が来た。

「はーい」

凛華が出て行つてからものの一分もしない部屋にノックが鳴り響く。

「ずいぶんと元気そうだな」

「る、狼火先生！？」

俺の返事を聞く前にドアを開け始めていた来訪者は狼火だつた。

「どうしたんですか？」

「なんだ。私が生徒の心配をしたらおかしいか？」

おかしい。絶対。

と、俺が疑いの眼をむけると、

「ふつ。冗談だ。今日ここに来たのはお前の容態を確かめるのもそうだが、お前が今一番気になつてることを教えてやろうかと思つてな」

気になつてこむ」と、にわたりまでの浮ついた気持ちは消え、緊張がはしる。

「……バーサーカーシステムのことを、ですか」

「ああ。できる限りは話さないといけないからな」

「いつたいどこまで知つてるんですか？ いや、そもそもどこでシステムのことを……」

「システムを知つてゐる理由は言わん。システムの知識については…

… そうだな、今のお前よりは知つてゐる、とでも言つておこうか」
どこか謎めいた感じな前置きをし、狼火は説明を始める。

「まずバーサーカーシステムとは、所有者の感情が高ぶることによって活性化する。」このときのシステムは言わば“起動準備”であつて“起動”ではない。ちょうどお前が、やつが風操者であることを見破つたときの状態がそれだ」

「ちょっと待つてください。と、言つことは俺が違和感を感じつつも見破れなかつたのにいきなり分かつたのってやっぱシステムのおかげなんですか？」

「ようはあのとき俺が感じた一瞬意識が飛んだときの状態は、やはりバーサーカーシステムは起動、いや起動準備の状態だつたのか？」

「ああ、そうだ。とはいへいくら起動準備では本来のシステムの10分の1も機能を引き出せないし、お前の意思がない限りシステムは完全には起動しない。だからお前が望まない限りバーサーカーになることはないし、せいぜい悪くても意識が少しの間飛ぶくらいだろ」

意識飛ぶとか充分問題あるだろそれ！

と心の中で突つ込みを入れつつも真剣に聞き続ける。

「そして起動の条件がお前の意思に対し、起動準備の条件はいとも簡単で一定以上の怒り、憎しみなど、要は“負”の感情をシステムが感知することだ」

今まで喧嘩をしてきたがそれでもシステムが活性化しなかつたってことは相当な負の感情がなくてはいけないのか。

「そしてここからが本題だ。お前のシステムは普通のとは違つ、“オリジナル”だ。よつて普通のシステムなら起動させてもコントロールできるが、オリジナルは起動準備ならともかく起動させる際はその専用ブレイカーを起動させておかないとシステムに完全に意識を乗っ取られることになる」

くいつと狼火は顎で俺のベッドの横に置いてある俺専用のブレイカーをさす。

「ちょっと待つてください。オリジナルってなんですか？　いやそれより普通つて言つことはシステムは俺以外にも持つている人がいるんですか？」

「オリジナルについては今は言えない。システムはこの世に3つしかない。お前とお前の親父さんと誰かだ」

狼火はさつきからさらに謎を深くさせるよつなことしか言つてない。

それにしてもなぜシステムは3つだつて分かるんだ？　父さんは秘密は厳守する人だつた。だから父さんがシステムのことを言つたとは思えない。

そこでふと一つの可能性を考える。

もしかしたら狼火もシステムを一緒に作つてたのか？　……いやそれはないか。父さん独自で開発したつて言つてたしな。

俺はさらに深まつしていく謎に頭を混乱させつゝも必死に理解しようとする。

「ともかくだ。お前のシステムは強力すぎるから必ずブレイカーを起動させてリンクしてからシステムを起動せりよ。じゃなきゃ暴走するぞ」

「専用機ブレイカーってみんなバーサーカー・システムを抑えるような効果があるんですか？」

俺がふと思つた疑問を口にすると狼火は珍しく困ったような顔をし、

「あー、全部の専ブレにあるわけじゃないが……まあこれくらいは言つて大丈夫か」

とぶつぶつなにか呟いてから、ハアとため息をつき答える。そのとき上下した胸に不覚にもドキドキしてしまつた。今まで気づかなかつたが狼火つて隠れ巨乳だつたのか……。

「お前の専ブレは他の奴らが持つてているのとは違ひ、バーサーカー・システムに対応させるために作った、ある意味本当のお前専用ブレイカーだ」

普通のとは違ひ、システムに対応した俺専用のブレイカー……？

駄目だ。ますます分からなくなつてきた。

「ああー、もうこれ以上は喋れん！ 仕事もあるし私は帰る」

俺がまた質問しようと狼火を見ると、察されたのか狼火はすぐに立ち上がりスタスターとドアのほうへ行つてしまつた。

「あ、ちょっと待つてください！」

「なんだ！ システム関連の質問は受け付けんぞ！」

や、やばっ。

今ここで帰らせたらもう一生分からないような気がして呼び止めてしまつたが……もし質問したら絶対殺されるぞ。
かと言つてなんでもありませんって言つてもそれはそれで殺されそうな気もするが……

「早くしろっ。私も忙しいんだ」

そんな狼火からの催促に俺はパツと思いついたことを質問する。
「風操者の男はどうなつたんですか？」

よし即興ながらいい質問だぞ！

「あいつは今迎撃科の教員全員で拷問中だ。手足を縛つてこの部屋の半分くらいの拷問部屋に入れて……そこでなにをしてるか知りたいか？」

「い、いえなんでもありません！ 本日はありがとうございました！」

どうやら聞かなかつたほうがいい質問だつたらしい。

結局狼火はその後すぐに帰り俺は一人暇つぶしに銃をいじりながら

ら、さつきまでの狼火の説明を整理していた。

「オリジナル、か」

結局オリジナルつてのがなんのかも分からぬままだが、ようはシステムを起動させるときは必ずブレイカーも起動させとけってことだ。

「それにしてももう少し説明があればなあ……」

そんなことを考えてるとまたしてもノックがした。

来訪者多いな、と思いつつ「はーい」と返事をすると、

「あ、あの、体調は大丈夫でしょうか？」

「焰さん？」

そう、本日三人目の来訪者さんは現在自室で休んでるはずの焰さんだった。

「もう体調は大丈夫なの？」

「ええ。だいぶよくなりましたよ。日向さんもだいぶよくなつでよかつたです」

とりあえず怪我はなかつたみたいだな。よかつた。

「そういえば凛華さんは？」

「凛華？ なんで凛華がここにいたことを知ってるんだ？」

「私が朝、目を覚ましたときにお礼を言おうとここに来たのですが……そのときに凛華さんとメアドを交換したんです。それでさつき凛華さんから日向さんが目を覚ましたってメールがきたんで来たの

ですが……」「

「ああ、やつこいつ」とね。凛華なつひなつき夕食を食べに行つたよ

そのときの凛華のふりふりふりを想ひ出してもや笑つてしま
う。

ん？ ちよつとまてよ。焰さんがここに来たのは朝で凛華は俺が
起きたときにメールを送つたつてことは……

「なあ、凛華つてこいじのくらいいいたんだ？」

「え？ え、えつと……たぶんすつとです」

「ずっととこいつと……俺が倒れてからすつとか？」

あまりにも思わなかつたのでつい声を荒げてしまつ。

「は、はい。……私が来たときは最初寝ていて、「田向……田向……」とずつと寝言を呴いてましたから。」「飯も食べてなかつたみたいでし……あつと田を覚まさないんじゃないかとす」く心配だつたんだと思います」

そ、そうだったのか……じゃあ、あのときあんなにふりふりしてたのは俺のために飯も食わずにずつと傍にこしてくれたから

「やつか。それじゃ後でお礼しなきゃな……」

正直今でもあの凛華がそんなことをするとは信じられないが……たぶんほんとなんだろうな。ああ見えて案外心配性な奴だし。ちよつと嬉しかつたりする。

今頃凛華はぱくぱくおこしそうに飯を食べてるんだろうなあなどと思つてこると、焰さんが少し頬を赤くしながら恥ずかしそうに言

つてきた。

「あ、あの。今回は助けていただきホントにありがとハハハこましだ！」

「ああ、いいよ別に。そんなお礼を言われる」とじゅねえし

「い、いえ……でも田向さんが助けてくれなかつたら私は……」

恐らく死んでいたかも。そう言いたいのだろう。

しかし焰さんはフルツと体を震わせただけでその続きを言わない。

「礼はもういいって。焰さんが今生きているだけで俺たちはやつたかいがあつたつてもんだ」

ホント、風操者のやつを倒せても焰さんが死んでしまつてたら何の意味もなかつた。だから本当に生きていよかつたと思つ。

「はー…………あと、その…………えつと…………」

すると焰さんは顔を真つ赤にして手を弄りはじめた。

「？ なに？」

「えつと、その…………！ 焰じゃなくて香奈つて呼んでくださいー。」

「へ？ お、おひ。わかつた」

焰や、いや香奈が珍しく、いや初めて俺の前で大声を出した。

正直こんなに大声を出せるとは思つてなかつたので俺はびっくりする。

一方香奈は、ぱあつと何故かすく嬉しそうな顔をしている。

(まあ、名前で呼んでもこいへうに仲良くなれたつてことか)

「これでやつと香奈と友達になれた気がするな。

すると香奈は俯いてた顔をバッと上げ、

「そ、それじゃ香奈つて呼んでみてください。」

……本気ですか香奈さん。それすぐ恥ずかしいんですけど。後
顔近いです。

「ええ……と」

とはいえ鼻と鼻がぶつかるくらいの至近距離で期待の眼差しで見
られちゃ無理とは言えない。

「か、香
」

恥ずかしくなりつも「香奈」と言おうとしたそのとき、

「日向！ パーティーするわ……よ……」

ドアを勢いよく開いて飛び込んできた凛華はこの状況とただなら
ぬ雰囲気を感じたのか、まるで「部屋を間違えました」かのよつに
くるつと引き返す。

「ま、待て凛華！ もつと詳しく聞かせてくわー！」

しかしこの俺が超気まずい空間から唯一助け出してくれるだらう
ノアの方舟をそう簡単に逃がすはずもなかつた。

呼び止められた凛華は入つていののかと戸惑つていただがすぐに氣を

とつなおす。

「や、やつ？ それじゃ話してあげるわ」

香奈がどこか残念そうな顔をした気がするがそこは気にしないよ
うにして、凛華の話を聞く。

「えっとね、私達なんだかんだで今回が初めての襲撃任務だつたじ
やない？だから初襲撃任務成功祝いパーティーをしようかと思つて」
凛華はチラチラと俺と香奈を見つつ話す。

「それで、日向の退院に合わせて来週あたりに日向の部屋で料理パー
ティーでいいかなって聞こうと……」

「あ、いいなそれ。うん、やるか」

なぜ俺の部屋なのかは抗議したいところだがこの際しあうがない。

料理パーティー、といつところも凛華がいると危ない気がするが
……この状況から脱出するためだ。やむをえない処置だらう。

「よし、じゃあ今日は各自自室で料理を考えとくとして解散でいい
な？」

「うん」「……はい」と一人の返事を聞きホッとした俺だったが

今思えばこのとき料理パーティーだけはなんとしても阻止しなき
やいけなかつたのだらう。

こうして料理バー・ティーは開催されそして今、俺は先週と同じく今度は見慣れた天井を見ていた。

「田向起きた？」

一
あ
あ
」

どうやら凜華の作つたチャーハン（ほほインスタントのはずだ）を食べた後、意識を失つてたらしい。

—その——じめんね

「へえ……お前が説くなんて珍しいな」

いつもなら「バカ日向がいけないんでしょ！」とかいつてるのだ
が。

(ああ、もしかして自分で食べたのか、あれを)

ホント、どうやつて人を氣絶させる料理がつくれるんだろうな。

それも加工食品で。

「まだに不思議なのか、「作り方どおりやつたのに……何がいけないのかしら」とぶつぶつ呟いてる凛華を横目に苦笑しながら俺はこのいつもの日常に浸る。

（風操者やシステムとかいろいろ危なくてわからんねえ）」
けど……）

「もう時間が時間だから私はもう帰るわ
時計を見ると時刻は夜の12時。じつやう香奈はすでに帰つたら
しいな。

「ああ。看病ありがとな」

「と、当然ことをしただけよつ。それじゃまた明日」

凛華は照れ隠しか俺に別れの挨拶を言つとすぐさま帰つていつた。

俺は守れたのだ。この日常を。

そういうパーティーにトオル呼ぶの忘れてたなと思いつつ俺はま
た寝る。

そして今いつしてこつも田常が繰り返され始めている。

そう。今はそれでいいのだ。今回のようなことが起つたときには
そのときどうすればいいか考えればいい。

今はただ一人のやうとした幸せを感じてこよ。

明日も早く起きなやせなと想いつつ俺は静かに眠りこついた。

第十四話 「ヒロ、田向さんに……妹が……」

「大丈夫なのか？」

教室に入ると一番ドアに近い席のカルラが声をかけてきた。

加羅崎カルラからさきかららは下級のときから同級生としてまた、トオルなんかとは違い親友としてよくつるんでいた一人だ。

身長190越えにNBAの選手にも負けない体つきをもち、髪はトオルの染めたのとは違う、地毛の金髪にモデル顔負けのイケメン面、さらに性格まで完璧なのだからあのトオルがカルラを見るたび「チキショーー！神は不公平だああああ！」と叫ぶのも納得できる。

ちなみに俺は一人で退院できたのだが医師と狼火から、今週は学園には行かなくていいから体を休めろと言われ、ずっと部屋で暇をもてあましていたので今日はあの事件以来となる久々の登校だった。

「ああ、もう大丈夫だ」

ちなみに俺は外国人らしいが、カルラと妹さんは日本生まれ日本育ちらしく日本語ペラペラだ。

「そりゃ、それはよかつたよ。なにやら襲撃任務を受けたとか……本當なのか？」

「ん、まあな」

まるで尊話を確かめるかのように聞いてきたカルラに俺は適当に答える。

別に口止めされてるわけではないから普通に「やせった」って答えいいのだろうが……なにぶんシステムとかができる限り触れたくない話題ない。

「一年なのにすげこなあ。まあ、万が一怪我でもしたら僕でも呼んでよ」

「ほんとか。カルラが来てくれるなら怪我したときも安心だな」「ぐつ、しゅぱつ！」と手術前にするあの薄い透明な手袋をはめる医者の真似をしたカルラは、見た目のわりに手先が器用で迎撃科ではなく実は治療科なのだ。

「席につけー」

その後もカルラと世間話に花を咲かせてるとチャイムが鳴り担任教師がきた。

「おし、今日は全員きてるな。それじゃ今日のHRは……」

久々のHRにいつもなら欠伸をしてくるところだが今日はなぜかやる気があった。

いや、別にHRだから特にやる」とはないけど久々だとなんかワクワクすんだよね

「うん、これでHRは終わり

はやつ！ 僕のわくわく返せ！

思わずトオルといることによつて鍛えられたツツコミ魂が反応してしまつたが、その後トオルに聞くと「いつもこんな感じだぜ」と言われてしまつた。

いや、まあ無駄に長い挨拶をする教師とかよりはいいんだけどね。むしろありがたいくらいだけね。

しかし今日だけはなぜかがっかりしてしまつ俺だった。

昼休み。

朝、凛華が「着替えに戻るの面倒だしこれからは迎撃科の制服で行きましょ」と決めたので飯をゆっくり食べても時間が余つたので先に凛華と迎撃科の棟に向かつていた。

「あんたいきなり動いて大丈夫なの？」
「ああ。医者に駄目とは言われてないしな」
「いや、そういう問題じゃ……」
「そういいかけて、まあ、日向に聞くだけ無駄よね。と凛華はため息をつく。
「そういえば今日はこの前できなかつたチーム」とでのブレイカー戦らしいわ
「やつとブレイカーをつかえるのか」

バー サーカーになつたときに一回使つたが、あれはノーカンにしておく。

しばらくして迎撃科棟の前に着くと凛華がなにやら思つ出したような顔をしてこちらを見てきた。

「そういうえば今日の迎撃科のチーム戦のチームのことなんだけど、四人くらいで一チームみたいよ」

「そうなのか？ ジャあ」

俺と凛華と香奈。

「後一人足りねえや」

「そうね、あと一人は……」

後一人をどうするか考えはじめたそのとき、

「リアがお兄ちゃんと一緒にチームになりますなのー。」

「リア！」「お、お兄ちゃん！？」

いきなりの声に、俺、凛華の順に驚きの声を上げる。

「……日向。あなたに妹なんていなかつたわよね
隣からものすごい殺気が肌にくるんだが。」

「えつと、これはだな」

説明しないと殺されそうなのでリアが無駄口を叩かないよう口を片手で押さえながら、ついでにリアにも凛華たちのことを説明する。

加羅崎リア。苗字から分かると思うがここは決して俺の妹では

なく、カルラの妹だ。年は15で世間一般ではまだ中学生だ。

髪は肩に被るくらいのサラッとした綺麗な髪だが色は珍しく兄妹で違い、薄い桃色だ。

なので白い天使の羽をモチーフにした髪留めが意外と似合つている。

瞳はカルラと同じでひまわりのような黄色だ。身長は凛華と同じくらいだが所属は迎撃科。

狙撃に関しては天才で、その実力は上級生徒をも凌ぐだとか。

ちなみに俺がまだ下級のときにリアが髪の色が理由でクラスのやつらからイジメられていたとき、俺とカルラでそのイジメっ子どもをぶちのめしたことがあり、そのときからなぜかお兄ちゃんと呼ばれ懐かれてるいる。

「……と、言つわけだ」

「ふうん。てっきり無理やり呼ばせてんのかと思つたわ」

ひ、酷いな。そんな風に思われてたのか。

「お兄ちゃんはいい人なの。悪い人じゃないなの。イジメないでな

の」

リアに責められた凛華が、むつとなり言い返す。

「そ、そんなの知ってるわよ」

「じゃあ、凛華さんはお兄ちゃんが好きなの?」

「えつ！？ そ、それは……」

「だつて好きな子のことイメージたくなるんだじゃないなの?」

いきなりの質問に顔を真っ赤にしながら狼狽する凛華をリアはまだ問おうとしてくる。

すると凛華が田で「どうにかしなきよ」とこつこつるのでしぶしぶ俺は話題変更する。

「といふでリア。なんでここにいるんだ？ お前はまだ下級生徒だる。下級はまだ普通の授業のはずだが……」

それはどうしたんだ？ と聞く前にリアは俺の腕に抱きつきながら幼い子特有の無邪気な笑みを浮かべて嬉しそうにする。

「えつとね、この前リア、狼火先生にお前はこれから上級生徒と一緒に午後から迎撃科棟にこいつて言われたの。だからこれからはお兄ちゃんと一緒にいられるなの！」

下級生徒が上級生徒と一緒に訓練だと？

そんなこと聞いたこともないが……まさかそれほどこいつは実力があるのか。

しかしそんなことよりも今気になつてしまつがないことは、その……このやわらかくてふにふにしてゐ……胸が腕に当たつてるんだが。

しかもこいつ、中学生くらいのくせに案外育つてゐる感じ、香奈や凛華と比べると、香奈へへへへへリアへへへへへ凛華つて感じだつ。

異性を感じさせるその感触にドキドキしていると、凛華がなぜか
リアじゃなく俺に睨みつけてきた。

でもってそれを知らぬふりをしてるのかリアは「お兄ちゃん」
とい機嫌の様子で頭をすりすり肩にすりつけてくる。

それでどうしたものかと俺が困惑していると

「ユウ、田舎れんじ……妹が……」

どうやら俺たちを追つてきたりして香奈が、普段はおどおじして
いるその顔を驚愕の表情にしている。

（ああ、またあらぬ誤解が……）

結局その後俺は香奈にも凛華たれと同じ説明をするめになつた。

第十五話 「しかしいつたい誰から……？」

結局俺は昼休みをフルに使うことによってなんとか香奈の誤解を解いた。

「それにしても……」

昼休みが終わり生徒が集合するなり狼火は「今日は組んだチーム」とに作戦や連携の打ち合わせをしどけ。明日チーム「J」と対抗戦だ」とだけ言い残しどこかへ行ってしまった。

そして今俺らは迎撃科の棟の一つの個室で陣形を考えているんだが

「私と日向で前衛ね。香奈は後ろから援護、場合によつては前衛に切り替えてもいいわ」

「ちょ、ちょっと待つてください。凜華さんも中距離タイプなのでは？」

「とりあえずリアは後方から狙撃つて決まつてるから関係ないの。だからお兄ちゃん遊ぼおなの」

「ちょ、ちょっとリア！ そりやつてすぐ日向に抱きつかないでよ

「そ、そうです。そりやつて胸を押し付けちゃ駄目です！ ……リアさんばっかするいです」

「あれれ、一人ともリアに嫉妬してゐなの？」

……陣形どころか一番重要なチームワークの欠片もねえ。

「……んでだ。お前らは一体何の武器にしたんだ？」

俺はとりあえずまた頭をすりすりしてきたリアを離す。

ブレイカーはその適性率の高さにによるが変化させる武器の種類は結構あり、やろうと思えばブレイカー一つで戦いの最中に刀だったブレイカーを瞬時に鎌にして相手を捕縛、なんてのもできる。

しかしそれ戦いの最中にそれができるのはかなりの上達者だし、まだ慣れたてのこの時期はメインで使う得意とする武器とサブの武器、計二種類を決め、まずはメインのほうを完璧に使いこなせるようになります。

確かにこいつらは俺が入院してる間に迎撃科でブレイカーの起動訓練は受けたはずだ。でもって運のいいことに、ここにいる全員が専ブレ持ちだ。

だからこいつらが使う武器　正確にはブレイカーを変化させたときの武器　がすでに決まってるはずなのだ。

「私は弓です。子供の頃弓道を少しやったので……まあ、他にも理由はあるんですけどね。ちなみにサブは槍です」

「弓か。銃が普及し始めてからはあまり聞かないが……まあ香奈にはなんとなく似合っている気がする。

「私はもちろん両短銃。サブは双短剣よ」

「リアはもちろん狙撃銃だけなの！」

「となると狙撃銃だけのリアは後方からの狙撃で援護に決定で……」

今聞いた武器の特性を考えながら陣形を練る。

「とりあえず俺は前衛として問題は凛華と香奈だな。普通に考えたら後ろから援護する役田なんだろうが凛華は近距離も得意だしな……」

実際ブレイカーとなると銃だから遠距離、剣だから近距離というわけではない。

あくまで形とおおまかな性質が同じになるだけで、ブレイカーは感情だけでなく所有者の意識ともリンクしてゐる。

なので剣ならば振るときに刃の部分から衝撃波がでるようになりすればリーチ外からでも衝撃波で攻撃できるし、銃も小さくて速い弾やでかくて威力がある弾などを使いこなせば近距離でも十分戦える。

それに凛華は下級のときの対ゼロ距離戦の訓練で、銃を使ってかなりの好成績を残していたはずだ。

そのためリベンジャーのブレイカーを使ってによる戦闘は複雑で、正直やつてみない限りベストな陣形はわからないのだ。

「やっぱ俺が前衛で香奈が中距離から。凛華は状況に合わせ前衛にくる、でいいよな?」

「私は日向と一緒に前衛よ。これ命令」

「私は構いません」

香奈も了承してくれ、凛華も……まあ、前衛に変えてやれば大丈

夫そつだ。つてか凛華の奴、遂に「これは命令よ」と呟つのが面倒くさくなつて「これ命令」に短縮しやがつた……。

結局決まつた後もまた凛華たちが言い合いを始めたのでそれ以降は進まず、陣形を決めただけで下校時刻となつてしまつた。

「はあ

俺は凛華と別れ自分の部屋に入るなり思わずため息をつく。

「そのまま明日の対抗戦をやつたら惨敗しそうで、少しおつへつたな。

「どうしようもないか……ん?」

ドアの鍵を閉め忘れたのを思い出して重たくなる足を引きづりながら玄関に行くと手紙のようなものが落ちていた。

「なんだ、これ

さつき入つてきたときにドアの横にあるポストから落ちたのだろう、踏んでないだけよかつたがいまどき手紙をよこすなんて物好きな奴だ。

「しかしこつたい誰から……?」

凛華やトオルは下級のときからメアド持つてゐし、カルラやリア、香奈もこの前貰つた。

となるとそれ以外の人か……。

しかし残念ながら俺は学園ではトオルのように目立つ奴ではないし、最初の頃は適性率が高いって有名で見知らぬ人から話しかかれたりしたが、それも今じゃほとんどない。

郵便の人が間違つて入れたのだろうかとあて先を確認するが住所などはなく『成宮日向』とだけ書いてある。

では誰が？と思つて裏返してみると差出人の名前は書いてない。
(となると俺の部屋を知つてる奴が直接入れたのか)

そうなるとますます変だ。

俺の部屋なんかは教員に聞けば分かるだらうからこの学園の奴らはほとんど知ることができると、わざわざ手紙に書いて届ける必要はないだろう。

怪しいな、と思いつつ封を開ける。

『単刀直入に用件のみを書かせてもらつ。お前のオリジナルは他のとは全てが違う。常識は一切通用しない。惨事が起こつてからでは遅いのだ。覚えておけ。それとむやみに使うな。使うときは本当に必要なときに誰にもばれぬようだ。特に学園にはオリジナルのことを絶対にばらしてはならない。これは忠告ではない。必然だ』

……なにこれ。新手の脅し？

オリジナルってのは……まさかシステムのことが？ しかしそうすると、『特に学園には』の部分がすでにばれてるしな。

色々と考えてみたはものの全く分からず、今日は疲れたこともあつてとりあえず手紙は引き出しの中に入れシャワーを浴びることにした。

（それにしても）

シャワーを浴びながらさつきの手紙について考える。

（全然分からなかつたけどなんか変な感じがするんだよな。どこか懐かしい感じがするつていうか……）

そう、内容は全く意味不明だったがどこか見慣れてこの字とこの字
かこれは信用できるつていうか……

「だあああー、こんなよくわからぬこと考えてられるかー…
今日はもう疲れているのだ。こんな不思議な手紙はまた今度元気
があるときに考えればいいだら。

俺はいまだにどこか引っかかるのを振り払つようこ髪を洗つ。
「よし、今日は飯食つたらすぐ寝るぞ」

よく言えば有言実行、悪く言えば都合のいい俺は手紙のことを忘
れ今日の夕食をどうするか考えながら湯船につかっただ。

第十六話 「お兄ちゃん一緒に遊んでようよな～」

「よし、集まつたな。では今から対抗戦をおこなう。まだ朝早い時間で眠いからか、どこか優しげにみえる狼火は欠伸をしながら目をこする。

今、俺達は午前だが迎撃科棟にある演習場にいる。今日は休日で授業がなく、午前から所属科別授業なのだ。

そして「よいよ対抗戦が始まるわけだが……

「お兄ちゃん一緒に遊んでようよな～」

「だからさうやつてすぐに抱・き・つ・く・なつ！」

あ～、ずつとこんな調子なわけで、結局作戦とかも立てられなかつたし、これじゃ一回勝てたらいいねくらいだし、まじ凛華さんお願いだから俺を睨まないでください。まるで俺がさせてるかのよくなつきですけど俺は全く関係ないです。

（ああ、大丈夫なのか……これ）

俺は一人氣づかれぬようため息をつく。

そういうしてのうちに狼火の話は進み、対抗戦の説明になつていった。

「それで今から簡単な説明をする。まずこれからチームごとにリーダーを決めてもらい、私に報告してもらう。対抗戦ではそのリーダーが戦闘不能になつたら負けだ。ちなみにリーダーの目印はないが誰がリーダーなのかは戦えばわかるだろ」

そうか、リーダー以外は戦闘不能になつても負けにはならないか

ら必然的にリーダーはあまり戦闘に参加しない奴になるのか。

年下に抱きつかれ、幼馴染に睨まれてる俺をよそに説明はせりに続く。

「それと今回はこの演習場のフィールドで行つわけだが、このフィールドはアグレッシンと戦うときを再現している。なのでキミ達には一刻も早くこのフィールドに慣れてもらいたい」

くじつと狼火が顎で指した方をみると、ところどころに障害物があるかなりでかいフィールドがあつた。この建物自体はコンクリートでできてるのに、フィールドは下が土のところをみると、かなり本格的なつくりらしい。

「ではまずはAチーム。成富田向、杉原凜華、焰香奈、加羅崎リアは私のところにチームリーダーの報告にこい」

だいぶいつもの調子になつてきた狼火に呼ばれ、ようやくAチームであることとリーダーをまだ決めてなかつたことを思い出す。やはり避けるのが得意な奴が適任なのだろうか。

「なあリーダーどうする？」

「田向やつてよ」「田向さんお願こします」「お兄ちゃんに決まつてるなの」

……なんでこいつときは思ひつたりなんだよ。

じつして三人から同時にこ指名を受けた俺は断れるわけもなく、肩をすくめながら素直に狼火に報告をしにいった。

「田向は刀にしたのね」

全チームの報告も終え、俺たちは第一試合だつたのでフィールドでブレイカーを起動させると、横からひょいと凜華が覗き込んできた。

ちなみに普段のブレイカーはスタンモードという言わば危険防止のための機能が働いており、仮にこの刀で相手を切りつけても怪我はほとんどない。

代わりに痛みに関しては相当なものらしい。

「ああ」

まあ、刀にしたといつよりかは刀になつたと言つたほうが正しいかな。

俺の専ブレはバーサーカーシステムに対応させるため適正率の上昇を最重視しているため、その代償として多重変化機能 ようは状況に合わせて武器を変えることができない。

そしてこの前のシステムが発動したとき無意識のうちに刀をイメージしてしまったので刀以外には変化できないのだ。

小さい頃に父さんに刀の扱い方を教えてたから運がよかつた。これが槍だとか弓だつたら全く使いこなせなかつただろうしな。

狼火は各自ブレイカーを起動したのを確認した後、ホイッスルを口にもつていく。

「よし、それでは第一試合Aチーム対Bチームを始める。スタート！」

遠くからでもはつきりと聞こえる掛け声と、ホイッスルの音が鳴り、沈黙していた室内が声援で一気に活気づく。

（敵は全員近距離系か）

開始とともに陣形を組みながら突撃してくるBチームは、種類こそは違うが全員近距離武器だつた。

こちらも対抗するため俺、凛華、香奈の順に走る。ちなみにリアには開始直後から狙撃ポイントの確保に向かってもらつている。

「よし凛華、銃で牽制しながらリーダーを探し出してくれないか？」
俺は刀を構えつつ、すぐ後ろを走る凛華に指示を出す。

恐らく戦闘に参加しても他の奴より避けることを考えて居るはず。銃で牽制してればおのずと回避がメインになつて分かるはずだと思つての提案だったのだが……

「なに弱音いつてるのよ。そんなめんどくさい」としなくても全員片つ端から倒せばいい話じやない

あ、あれ？

「別にあんな奴ら私と田向がいれば敵じゃないわ」

黙つている俺がさつきの言葉で傷ついたと思つたのか少しそっぽを向きながらフォローの言葉を付け加える凛華に、俺は返す言葉が見つからなかつた。

普通に考へてもみる。

援護系武器を使わないつてことは敵は連携に相当自信があるはずだ。それに連携どころか作戦すら立てられなかつた俺たちが真正面から戦つても勝てるはずがない。

リアの援護があれば話は別だがまだあいつは狙撃ポイントを探してるだろ？から早くても後2分はかかるはずだ。

そう、常識で考へれば開始早々から近距離ができるのは俺と凛華だけなのに手当たり次第に戦うなんて……死亡フラグだな。

だが凛華が一度言つたことをやめるわけがなかつた。

「さあ、いくわよ！ 香奈、援護お願い
「任せてください」

ああ、終わつた。

そのとき確かに俺はそう思つた。いや、ここにいる誰もがそう思ひはずだ。

しかしこの後俺は、ここつらのことをまだ何も知らなかつたのだとこいつを思いしらされることになる。

第十六話 「お兄ちゃん一緒に遊んでよつよなの～」（後書き）

次回、試合は思わぬ展開に…！？

第十七話 「けど首なんか撃つたら即死じゃ」

「

「くらえつ」

敵チームの一人が槍で突撃してくる。俺たちはそれを左右に分かれるように回避。

凛華はその勢いで回転し、反撃に移る。

それは仲間の俺が見ても魅入るほど無駄がなくスマーズな動きだつた。学年零距離戦成績上位の名は伊達じやないってか。

さすがともいえる動きで攻撃の態勢になつた凛華の銃口から立て続けに銃声が鳴る。

ちなみに弾はエネルギー弾のようなもので威力は適正率と感情によつて変化する。普通の銃とは違い弾切れが起きないのがブレイカーの利点だ。

「陣形を崩すな！ 作戦通りいくぞ」

凛華のすばやい反撃に崩れかけていた陣形が指揮官らしき男の一言で持ち直す。

たつた一言で立て直すとはやるな。
だが……

「それじゃ自分がリーダだと言つてるようなものだ」

刀を構え凛華や香奈にも伝えようとしたそのとき、予想外のこと

が起きた。

そう、陣形を持ち直した三人が凛華たちを無視してまるで狙う敵はただ一人とでも言つようになつて俺を包囲したのだ。

(な……？　まさか俺がリーダーだとバレたのか？)

助けを呼ぼうにも凛華はさつき突っ込んできた槍の男に足止めを食らっている。

まさかの展開。万事休すか……。

敵三人に囲まれた俺が少しづつ後退すると先ほどのリーダーらしき男が武器である鎖を構えながら一ヤリと不敵に笑う。

「くくく。成吉口向、今日こそ逃がさないぞ」

「なぜ……」

俺は鎖の奴とは違つて特段にリーダーみたいな行動はしていないはずだ。

それなのに何故俺のことが

「なぜ……だと？　分からんとは言わせないぞ！　いつも杉原さんや焰さんと一緒にいるくせに……あげくの果てには年下美少女を入れてハーレムチームをつくるだと！？　ふざけんな……」

杉原……ああ、凛華のことね　って俺を狙う理由はそれかよ！いや、確かに中学生入れたけども！

「俺たちには女子一人もいなってのに……」

女子いないとかそんなこと知らねーよ。誘えないお前らが悪いだろ。

「どうせ誘えないお前らが悪いって思つてんだろ？　けど、そんなことしたら俺の彼女が嫉妬して俺が怒られてせつかく誘つた女の子をむりやりどけて自分がチームに入るつて言い出すと思つたから結局誰も誘えなかつたんだけど、つてかそもそも俺の彼女が一次元なにが悪いんだよチキショー！」

うん。何言つてるが全く分からないうが、とりあえず妄想と現実を区別できないトオルみたいな痛い子だつてことは分かった。

「とにかく貴様は男の敵だ。今こそ俺たちの気持ちを思い知るがいい！」

突っ込みたい気持ちを必死に抑えつつ、発狂し始めたアホどもに一応講義してみるが、やはり俺の話を聞くつもりはないらしい。なぜなら奴らの目はすでに空腹のときに見つけた獲物を見る野獣の目と化しているからだ。

あきれていた隙に背後にも回り込まれ、逃げ道がなくなつたそのとき、

「私を忘れてもらつては困ります！」

香奈の声とともに、突如後方から炎を纏つた矢が飛んできた。そのまま矢は地面上に刺さり、矢に纏ついていた炎がまるで生きているかの如く敵を寄せ付けぬ壁のように俺の周りに広がる。

突如現れた炎。そしてそれがまるで操られるかのように動いた。これはまさか

「香奈、お前もしかして」

「……はい。私は火の超能力者なんです」

「」を構えていた香奈は驚愕している俺と目が合つと、なぜか申し訳なさそうに目を逸らす。いつもの黒い綺麗な髪は燃えるように深紅色になっている。

まさか香奈が超能力者だつたとは。

ブレイカーを使うと身体能力が大きく上昇する人はよくいる。

だが超能力者は本当にごく稀で、その確立は十万人に一人と言わ
れている。

超能力者は人によつて能力が異なるが、能力の限界はほとんどな
いため人によつて違うが、だいたい超能力者の一人の力は普通のリ
ベンジャー二十人ぐらいに相当するらしい。

そして香奈が言つていた弓を使つもつ一つの理由。

これは憶測に過ぎないが香奈の能力である「火」を一番活かせる
のが弓なのだろう。

先ほどのように矢に炎を纏わせれば矢が外れても炎を遠隔操作す
ることで追撃ができるからな。

「くそ、まさか超能力者がいるなんて」

香奈が作つた炎の壁によつて俺に近づくことができない。

これは敵も予想外だつたらしく、動搖を隠せていない。

「隙だらけよつ！」

リーダーらしき男が一時撤退をかけようとしたその瞬間、凜とし
た威勢のいい声とともにその両手からエネルギー弾が発砲される。

「ぐあ！」

その射撃は正確に敵一人の足と肩に命中し戦闘不能にさせる。

「なら私もつ」

さらに俺の周りを囲んでいた炎が収縮、火の玉となつて敵に襲い掛かり、また一人戦闘不能になる。

「日向、大丈夫?」

瞬時に敵を戦闘不能にさせた少女　凛華は、敵が反撃してこないのを確認すると一目散に俺のところに駆け寄ってきた。

「おかげで大丈夫だ。それよりお前は……」

「ああ、私なら全然平気よ」

少し安心したらしい凛華の後ろを見てみると　さつきの槍の男が仰向けになつて倒れていた。どうやら気絶しているらしい。

。

それにしてもこいつら……一人は超能力者だわ、一人は同学年の男子を一人も倒しちゃうわ……強すぎだる。

正直俺がいなくて勝てるんじや?

さすがにこのままでは俺の立場がないので、最後に残つた敵リーダーに刀を向ける。

「さあ、後はお前一人だ。覚悟しろ　」

「な、なんでこんな強いんだよお！」

「えつ？」

最後に俺がかつこよく締めよつと思つていたが、セリフの最中に敵は予想外にも逃げた。

いや、まあこんな化け物ぞろいじゃそつなるのも分からなくもな
いけど逃げんなよ！

「くそつ、まちやがれ！」

すぐに俺と凛華は追いかけるが恐怖に陥った人間は速くなるのか、全然追いつけない。

香奈も後ろから矢で狙つてみてはいるようだが、やつは武器である鎖を体に巻きつけるようにして盾代わりにされ、防がれている。

これ以上追いかけるのは無理か。

俺と凛華が諦めかけたそのとき、どこからか銃声が鳴り、同時に男がその場に倒れる。

「な、なんで？」

ビィーーーと試合終了のホイッスルが鳴り、おおおおと歓声が沸くが、当の本人の俺たちは何故倒れたのか全くわからない。

それは凛華も同じだつたようで、俺と凛華はブレイカーを停止させつつ男に駆け寄る。

すると男の首の辺りに撃たれたような後があった。

「これって、まさか……」

「リアの狙撃銃の弾だわ」

「けど首なんか撃つたら即死じゃ」

「掠めただけだから心配ないなの一
ぎゅっ。

狙撃したところから走つてきたリアが俺の背中に抱きついてくる。

「掠めるつて　」
「いつは走つてたんだぞ？　しかも鎖が邪魔で当たらないんじや」

「走つていようがリアには関係ないな。鎖だつていぐら巻きつけようが鎖の隙間を撃てば当たるな」

鎖の隙間つて……まさかあの小さな輪の部分のことか？ だがい
くらなんでも走ってる奴にそれを、しかも掠めるだけだなんて 。

だがそんな俺の気持ちを読んだのか、リアは満面の笑みで、
「弾が細くなるようイメージすればできるな。リアに不可能はない
いなー！ お兄ちゃん、リアのこと褒めてなー」

これが下級生徒にして学園一とも噂されている天才狙撃手の実力
なのか。

もはや何でもありだなと思いつつリアの頭を撫でてやううとする
と……

「ヒュ、日向。私も一人も倒したんだから褒めてよね」

「え？」

「な、何度も言わせないでっ！ これは命令よー。ほら、早く」

顔を真っ赤にして怒鳴る凜華がおかしく、笑うのを必死に堪える。
すると、

「えー、リアが先なの」

「む、私が先よ」

「リアなの！」

「だから私よー！」

……また喧嘩か。この二人は初めて合ったときから何故か仲が悪
い。

「あ、あの……せつかく勝ったんですから喧嘩は……」

深紅から黒に戻った髪をなびかせながら、喧嘩を止めに入る香奈
に一人を任せ俺は一人、先ほど思ったことの間違いを訂正しながら
むなしくため息をつく。

俺がいなくても勝てる、じゃない。

勝つために俺はこななくとも変わらない、だろ……。

第十八話 「キ、キス……するんでしょ」

結局この日はもう俺たちの試合はなく、他チームの試合を観戦するだけだった。

そしてそれもさつき終わり、帰つているとこりだ。

「ねえねえこれからどこか食べに行きたいなの」

リアがおなかに手を当てて、アピールしていく。

「そういうも~~う~~う~~う~~~~う~~~~う~~昏時だよな」

今日のよう~~う~~に午前から科目別授業があるときは大抵午前には終わる。いつもはこの後一人で家で昏食を作つていた。

「それじゃワックはどう?」

「あ、いいですね。私も久しづぶりに食べたいです」

「たまには外食もいいか。リアもそれでいいか?」

「リアはお兄ちゃんといければどこでもいいなの」

「それじゃさつそく行きましょ。時間がもつたいたいわ」

自分の案が通つたからかご機嫌な凜華を先頭に、俺たちはさつそくワックへ向かつた。

ワックとは『W』の看板が目印のファーストフード店だ。ポテトが上手いことでも有名でいつも人々で賑わっている。

そしてワックに行くことになつてからおよそ十分後、俺たちは有名店の休日の昼を舐めていたことを知る。

「なつ……！」

「！」こんなに人が……

さすがに空いているとは思つていなかつたが……まさか三百席はある席が満席とは。ワック恐るべし。

「いつや店内で食べるのは無理だな」

半分諦め氣味で呟くと、リアが俺の服をつかみながらも抗議していく。

「えー！ でもリアはワックが食べたいなの」

「でしょうね、私もここまで食べれないので」めんね

どうやらいつにせワック以外を食べに行くといつ考えがないらしく。

だがそれは俺も同じだったので結局持ち帰りにすることになつた。

幸いなことにレジはそれほど混んでなく、五分くらいで買つことができた。

そして多数決の結果、何故か俺の部屋で集まつて食べることになり、今こつして四人で机を囲んでいる。

「それじゃいただきますな～」

四人で食べるには少し小心翼ひテーブルを囲むよう座り、せつやくリアが袋から自分の分を出して嬉しそうに食べる。凛華や香奈もリアに続けて挨拶をしてから各自食べ始める。

「ん~、やっぱワックはおいしいなの

「そうね、久々に食べると結構いけるわね」

「あ、香奈ちゃんのナゲットいただき~！」

「ちゅうとリアさん！ 人のをとつちや駄目ですよ」

いつもは一人で静かに食べているのだが……たまにはこいつみ
んなで喋りながら食べるのもいいな。

そんなことを思いながらポテトをつまんでいると右肩をちょいち
ょいと引っ張られた。

「なんだリア……つてなんでポテトくわえてんだ？」

するとリアは指でくわえているポテトを指しながら、
「ふいっしょにはへよなの」

あー、なんだ。ようするに恋人がよくやるポッキーゲーム（棒状
の食べ物をお互い端っこをくわえて同時に食べていく食べ方）をし
ろつてこいつことか。

くわえているからか、言葉がハ行発音になつていてリアを見ながら
自分なりに解析する。

「…………つてなんだよ？」

「(い)ほうびなの」

「(い)褒美？…………ああ、そういうえばBチームとの試合が終わつたと
きにそんなことを言つてたな。

頭の中で試合に勝つた後のシーンを再生していた俺はしかし眉を
顰める。

「でもさすがにこれは……」

「これではリアへじやなくて俺への(い)ほん……(い)ほん。

「とにかくダメだ」といつとコアは「むむむ」などから一度くわえていたポテトを食べ、頬を膨らませる。

くわえているのに疲れたんだな。

「お兄ちゃん、いじょつて言つてくれたのに……」

「ちょっと口向ホントなの?」

リアの言葉に左から凜華が反応する。その田がどこか蔑んでいるように見えるのは氣のせいだらうか。

しかしすぐに顔を赤らめ、その蔑んだ田をなぜかキッロキッロさせ始める。

「どうした?」

「だって、それって最後に……キ、キス……するんでしょ」

「し、しねえよー」

しかもなんで「キス」「の」ところで一瞬黙り込んだんだよー。

「別に食べるだけだから心配ないな。……まあもしかしたら最後にリアとお兄ちゃんの顔が……」

「お前は余計なこと言つなー。」

リアのどこか期待のこもった田から田を逸らしつつ突っ込む。

俺にはこいついう積極的なタイプの女の子は合わないみたいだな。いつも気づけば相手のペースに引きずりこまれてしまっているからな。

「田向……あんた、やつぱ最初からそれが目的で……」

……まさかずっと一緒にいた幼馴染にすりこんだことを言われるとは。

女子一人に振り回され半泣きになる俺をよそに顔を真っ赤にする凛華をみて何を思ったか、リアはいきなり「くふふ」と笑う。

「もしかして凛華ちゃんはキスしたことないなの？」

「キ、キスくらいしたことあるわよ！」

リアの「ドリケートのない質問に、凛華は田を明後日の方向にうつむかせながら反論する。

「うかしたことあるんだ。

少し複雑な気持ちになる。

「それじゃリアが誰とキスをしたって問題ないな。や、お兄ちゃん早くやる？」

半分無理やり凛華を納得させたリアはまたポテトを一本くわえながらこちらに顔を近づけてくる。

ちなみに香奈は「キス」というセリフが出た瞬間からなぜか固まっている。

「あ、ああ」

できれば今すぐにでもやった……くないのだが、恐らくリアは俺がするまで絶対あきらめないだろう。

(まあ一本だけなら褒美として)

リアの根気に負けた俺は、チラチラとこちらを見てくる一人の視線を感じながらリアがくわえているほつとは反対の端つこをくわえる。

(「おつ、顔が近い……！」)

予想よりも全然顔の距離が近く、下手に動けば鼻と鼻がぶつかってしまう。自分の顔が赤くなつてくるのがわかる。

「ほあ、じやあ」

リアの合図とともにお互に同時に少しずつ食べていく。いや、これはかじつていいくという表現のほうが正しいだろうか。

開けた窓から吹いてくる風で、リアの綺麗な髪が俺を優しく撫でるように包んできて、この瞬間だけ俺の中の妹みたいな女の子、というリアのイメージが“可愛い女の子”だけを残して崩れていいく。

そして当たり前のことだが、同じものを両端から同時に食べているのですぐさま距離は縮まっていき、リアの甘い吐息が顔にかかる。心臓の音がさらに加速したことは言うまでもない。

そしてさらに距離は縮まり、もう唇と唇の距離はほとんどない。

今までこんなに近くで見たことがなかつたから氣づかなかつたが、どうやら女性の唇といつも妹みたいに接してきた女の子ですから、異性を意識させるものらしい。

色っぽさを感じさせつつも、まだ幼い少女の健気さが残るその唇は見た目以上に弾力性がありそうで俺の中の好奇心をくすぐる。

(ニッセイのまま勢いで……)

俺の中にドキドキしていると特有の熱い不思議な感覚が広がる。そしてリアの唇がどんどん俺の唇に近づき……ついに触れるか触れないかの限界のラインに到達したそのとき、

「「そ、それ以上は駄目ええええええ……」」

見るに耐えなくなつたのか、今まで以上に顔を真つ赤にした凜華と香奈がまるで倒れこむように俺を押す。

いきなりの不意打ちにいきなり現実に戻された俺はその勢いのまま何かの角に頭をぶつけ（あれ、これなんか既視感^{デジャブ}）「む、後少しだつたのに……」と言つリアの残念そうな声とともに意識は消えてつた。

第十九話 「おつかれ……」なんなんで思ひ出せさせたかな

「まだ起きないのかしら」

「まだ寝てこの日向のベッドで腰をかける。

いつもなら無理やつ起こしたりもするのだが……なにぶん、いつもなつたのは四分の責任もあるためさすがに起こせない。

「ひまだなあ」

少し床に浮いた足をふりふりさせながら凜華は呟く。

先ほどまでは日向をベッドに運んだり、ワックの「みの辻付け」をしたりと忙しかったのだが……今はもう何もない。香奈やリリアは雨が降りそつだから干してある洗濯物を取り込むために、つっこつき帰つていった。

ちなみに私は今日は部屋の中に干しておいたので急いで帰る必要もない。

「…………」

「…………」

「くら日向とリリアがキスしそうになつたところであっても強く押す必要がなかつたのは分かつてこる。

でもあのとき、日向がドキドキしてこるのがなんとなくだが分かつてしまつたとき、なぜか胸がいきなり痛くなつて……『つけばこんなことになつてこた』

「いや、そもそもリリアが『褒美とかいいだすのがいけないのよ

無論、それを承諾日向も日向だ。

いつもは眞面目なのこ、たまに変態の部分がでてくるのだからだ
りしな。

そもそもたかが「」褒美でなんであんな
「あれ、そういうえば私にも「」褒美あげるとかいつてなかつたつけ」
確かあの時、リアに続いて私もと言つたら「にこよ」と言つてこ
た。

「……ナビにんな」としておこで「」褒美くれ、はないわね
もしそんなことを言つたら図々しい奴だと思われるだろ？
少なくとも私はそう思ひへ。

そのときふと、凛華の頭に先ほどのコアの言葉が思ひ浮ぶ。
「キスしたことあるか」「ね」
そんなこと、したことあるわけない。あのときは勢いであるとい
つてしまつたが。

田向に男たらしだと思われただらうか。

解けるはずもない心配をしてくると、またふと頭に名案が浮かぶ。
「やうだ！ 田向に今回のことも含めてお礼を込めて……や、やう、
お礼のためにキ、キス……すれば……」
自分への「」褒美にもなる。
そこまで言おうと思つてたが、ござ葉葉こすると恥ずかしく、語
尾が自然にフォードアウトしてこぐ。

（ナビやつぱいねしかないわよな）

「」から現れたか、変な使命感を感じた凛華は拳を握り、
チラシと田向を見る。

「」から現れたか、変な使命感を感じた凛華は拳を握り、
チラシと田向を見る。

「寝て いる すきに なんて 卑怯な 気も する けど…… フア、 フアースト キス あげるんだからここの くらい は 当然よね」

「ぶつぶつと 呻きながら 腰掛け て いた ベッドから 一 口立ち、 口向に 覆いかぶさる ように 乗る。」

一人用な のか、 体重を 移動させる だけ で ベッドが キシキシ 鳴る。 そのたびに 口向が 起きない か 心臓が バクバク いや サドキドキ して くる。

「こんなに 心臓が 張り切れ そ うにな るのは 初めてだ。」
「この 前の ジャスティス 戦の とき だつて こんなには 繁張しなかつた。」

「歩が 重い。」

息が しにくく。」

心臓が のどから 出て きてしま う そ うだ。」

自分でも 顔が 熱を もつて いるのが わかる。」

口向に 近づくたびに 胸が ギューッと 締め付けられる。」

「最近 よく 感じるこの 不思議な 感じは なんだろ。」

「このままだと 生きて いる 心地が なかつた ので 口向の おなかに ゆつくり 手を 置いて 少し 休憩する。」

「そういえばここの 体勢のことを 口向に 取り付く 変態工武科が 「これ

はマウントポジションと言つて格闘技の技名であるのだが、それ以外にもう一つ意味が隠されており、「と途中から聞く氣も失せるくらい熱く語つていたが……どういう意味なのだろう。」

ふと頭に浮かんだビリビリいに疑問を振り払い、心臓が落ち着くのを待つ。

だいぶ落ち着いてくると、なぜか今まで田向にやつたこと（ぶつた記憶がほとんどだが）を思い出していく。

（私……今までずっと田向に迷惑かけてたわね）

おなかにおいでいた手を田向の頭の横に置く。

そしてこままだに寝ている田向の顔を優しく引き寄せながら、顔だけではなく体」と田向に近づいていく。

（でもさうと怒らないで、笑つていてくれてたのよね）

一人の距離はもう鼻と鼻が触れるほどになり、凛華の吐息が田向にかかるしていく。

（たぶんこれからもそんなあなたに甘えて迷惑をかけていくぞ）

今までにないくらい気分が高揚してきて田がうつとうつしていくのが自分でも分かる。

「ありがとう田向。これからも迷惑かけるほどよろしくね……」

今感じている、ずっと前に田向に対して生まれたこの不思議な気

持ちにはこまだによくわからないが、今はお礼を言えただけでも良しとする。

自分で納得した凛華はそのまま自分の唇をもう一つの唇へ

（いや、驚いた理由は夢の中で凛華が……）

「んん……」
「やつと起きたのね」

田が覚めて肩を伸ばしながら声のするほうを見てみると、

「つて凛華！？」
「な、なによ。私がそんなにおかしいの？」
「い、いや。そういうわけじゃないんだが……」

またかこるとは思つてなかつたのでびっくりした。

しかし夢は夢。現実は現実。

これくらいには区別できないとトオルと同類になつてしまつ。
そう、現実の凛華があんなことするわけないのだ。

「それよりもう大丈夫なの？」
「ああ。今はもうなんともないぜ」
「そう、よかつた」

始業式の朝もそつだつたが、いつもは俺に容赦なくぶつたり殴つたりしてくるくせにこうこうときはものすごい心配してくる。
まあそれが凛華のいいところもあるが。

凛華は俺に大怪我はないかを確認したかったようだ、

「それじゃ私はもう帰るわね」

「おう。それじゃまた明日な」

「うん。また明日」

そういうつもどおりの別れの挨拶をして部屋をでていく。

ドアが閉まる音がして、ふと先ほどの夢を思いだす。

「それにしても……夢の割には妙にリアル感あつたなあ
起きたとき凛華が横にいて驚いた本当の理由。

それは凛華が俺にキスしてくる夢を見たからだ。

「まあさすがにあれが現実のわけないけどな」
俺は夢にしては珍しく、まだキスされた感覚が残っているほおを
名残惜しそうに撫でた。

「バレてないよね」

日向の部屋を出てドアを閉めたとたん、凛華は両手で顔を隠しながらしゃがみこむ。

頬がすくべ熱い。熱でもでているのかと思つほどだ。

日向の前では極力普通に振る舞つたつもりだが……胸のドキドキ
は止まらなかつたし、日向におかしな目で見られなかつただろうか。

「キス……しちゃつた」

相手は寝ていたが。

「あううう……」こんなで明日香ちゃんと話せるかなあ

次から次へと不安が押し寄せてくる。
このままでは頭がオーバーヒートしそうだったのでほかの事を考
える。

すると自然と人差し指が唇をなぞった。

あれは夢ではなくて現実なんだということを確認するかのようこ
唇を何度も、何度も触る。

あの時、日向の唇に触れそうになつたとき、なぜか急に「これが
日向にとつてファーストキスだつたら?」といつ罪悪感が浮かび……
『気づけば唇ではなく頬に触れていた。

確かに日向がまだキスしたことがないのなら唇にしなくて正解だ
つたのだろうが……それでもただ単にあれは私が怖くなつたからだ
らひ。

何が? と聞かれてもわからないが……とにかく日向の唇にキス
する度胸が私にはなかつた。

その事実には少しショックだが それでも、あの頬にしていた
ほんの数秒。

誰にとっても時間は平等で止まつてはくれないが、あの時だけは
たつた数秒が永遠にも感じられ、すごく恥ずかしくて、でもそれ以

上に幸せで……

「ま、いつか」

だんだん自分でも恥ずかしくなつてくる考え方を半ば強引に切り上げて立ち上がる。

とにかく、今はこれでいいのだ。

田向の脣にキスする勇気がなくとも、
まだまだ時間はある。

なにも急ぐことはないのだ。

たとえ今その勇気がなくともいい。何年、何十年とどんなに長い時間をかけてでも……

「田向は絶対、わたしのものにするんだからっ！」
「これは命令！」と誰に言つてもなく空を見上げて言つた凜華は神様にむかって宣言してゐるよつとも見えた。

だから今はこの幸せをかみ締めていよ。

先ほどよりも一段と軽くなつた足取つて凜華は自分の部屋へと歸る。

そひ、まだ時間はある。だがしかしそれでも今日のよつて日々が続くとは限らない……。

第一十話 「アグレッシン迎撃戦……！」（前書き）

えー、20話書いている途中に気づいたのですが……
設定に一つ、重要なことをかきわすれていきました。
本当に申し訳ないです>
しかしこれを知つておかないと二章の内容が恐らくわからなくなる
と思うのでここにその内容を書いておきます

以下第一話より引用

通称「リベンジャー養成学園」と呼ばれるこの学園は、日本の首都東京から直線上に位置する海の上に作られた人工島に建つ、リベンジャー育成機関だ。

そもそも人工島は「近未来都市の試験運用」という名目で作られた超大型都市だ。

アグレッシンのときの戦闘時に備え、地下シェルターなどもあるかわりに「近未来都市」ということで最近の流行の店やデパート、遊園地に繁華街などもある。さらには本島とは海中電車によつて繋がつてるので、非常に住みやすいのだ。
なので学園関係者以外にもここに住む一般市民や観光客なども大勢いる。

簡単に言えば学園があるところは東京から直線上にある島で、学生や教員以外も普通に暮らしている。ということです。
こんな初步的なミスをしてしまい本当に申し訳ないです>
えー、20話書いている途中に気づいたのですが……
設定に一つ、重要なことをかきわすれていきました。
本当に申し訳ないです>
しかしこれを知つておかないと二章の内容が恐らくわからなくなる
と思うのでここにその内容を書いておきます

第一十話 「アグレッシン迎撃戦……！」

「日向、早く行くわよ

「今行くからちょっと待つてくれ」

玄関からかかる声に教科書などを鞄に詰め込みながら答える。

初めての対抗戦の日からもう一週間もたつた。

春の象徴である桜も今はもう散つてしまっている。

花は散つたときが一番きれいだ。なんて誰かが言つてたがこうしてみると、やはり咲いているときのほうがいいと思つ。

その後も週末のたびに対抗戦はあつたが俺たちの試合はなかつた。なんせ上級一年だけでもおよそ百人はいるのだ。それを5人のチームで分けたのでは、また自分のところに試合が回つてくるまでは相当長い。

狼火もさすがに一チームの人数を増やすことを検討しているらしい。

ちなみに観戦するだけではつまらないと言つことで俺たちはその間ブレイカーの訓練をし、その際一種類の武器の設定として凛華は双手剣、香奈は槍にした。

「待たせたな」

「別に平気よ。それよりも早く行かないとみんな待つてるわ

手前でスクールバッグをぶらぶらさせて待つていた凛華と一緒に急いで階段を下りる。

ちなみに凛華は一週間前からずっと機嫌がいい。

最初の何日かは何故かいつも顔を赤くしたりしていた。

最近じゃいつも笑顔のよつた氣がするし、あの日から今日まで、なんと一度も怒っていない。

しまいにはいつも待たせても文句一つ言わないときだ。

(そんなに勝ったのが嬉しかったのか……?)

無論、凛華が上機嫌でいるぶんには俺としても大助かりなのだが、ここまで優しい凛華は違和感があるというか……正直氣味が悪い。

まるで何か企んでこるよつて怖いとも思つてしまつ。

「あ、田向さんおはよー」「わこまくす」

「お兄ちゃんおはよー」

俺の脳の数少ない精鋭部隊が『では凛華はいつたい何を企んでいるか』とこう新たな疑問にぶつかつているとホールのほうから香奈トリアの声が聞こえた。

「おひ。待たせて悪いな」

今俺たちがいる寮の玄関の前に作られたこのホールは意外と広く、いつも他の奴らと待ち合わせるのに適しているのだ。

「成宮君も杉原さんもおはよー」

「お、田向おはよーすー!」

「カルラおはよー」

「ちょ、俺は無視ですか田向さん!」

爽やかな笑顔を浮かべながら丁寧に挨拶してきたカルラといつもどおり挨拶を交わす。

ちなみにいつも調子乗つて居るアホもこれまたいつもおり無視

する。

上級生徒となつてからは俺たちは各科で用事がない限り毎朝こうしてホールで待ち合わせてから学園に向かうのが日課となつている。

「わつこえは日向、今日の一時間目の数学つて宿題あつたわよね。ちやんとやつた?」

「げつ、まじかよ。俺なんにも聞いてなかつたからな……」

「もう、しようがないわね。教室着いたら私のノート見せてあげるわ

「ホントか凜華。恩にきるぜ!」

「し、仕方なくよー 勘違いしなこじー。」
「? おつ

なにをどう勘違いするのだらつかわからないけど返事はしておくれ。

すると俺の横を歩いていたトオルも焦つた顔になる。

「やべえ、俺もやつてないや。杉原さん、もしよかつたら俺こも…」

…

「無理」

「即答ですか!? てかなんど日向はよくて俺はダメなんだよ!」

「だつてあんた、どうせ知つてたけどめんどくわへつてこなかつただけでしょ」

断られた憂さ晴らしにか反撃にでようとしたトオルにすかさず凜華が釘を刺す。

「くつ……ちなみにカルラは……」

「やつてないトオルくんが悪いとゆつよ

「ぬぐつー」

頼みの綱であるカルラにも断られ、今度は本気で焦つた顔になる。

まあこいつが宿題をやつてこなるのは毎度のことと毎回誰かに「おしてもらっていたのだ。

だからこくら優しいカルラとこえど断るのも無理はないだら。

「お、俺先行くわ！」

「おひ。「与すんじゃなくてけじやんと自分でやれよ」

さすがにまことに思ったのか、トオルは額に冷や汗をかきながら一足先に学園へと走つていった。

とはいえたの学力じゃいまから授業までに自分でやるこは時間が足りない」とは明白で、走るだけ無駄なのだが……あえてそこは言わない。

そもそも自業自得なわけだし、そもそもみるつてもんだ。

「……あんたも私に見せてもらつんだから人のこと言つてられないわよ」

「わ、わかつてるつて」

俺の心を読んだらしい凜華からあきれたため息と共に冷静な突つ込みがきて、乾いた笑いがでる。

「そんなお兄ちゃんにリアが元気パワーあげるなの～」

するとリアは俺が落ち込んだと思ったのか（いや、たぶん抱きつくり実がほしいだけだろう）こいつもとばかりに、こいつのよつと中学生の年にしては成長しているその胸を押し付けるかのように腕に抱きついてきた。

「ちょっと、リア！ 田向に抱きつくなつて何回言えばわかるのー。」「違うなの。これは抱きついているんじやなくてお兄ちゃんに元気を分けてるだけなの」

「どうみても抱きついてると思こまへ……」

「成富君つて人気者だよね」

そんなリアにこれまたいつものように凛華や香奈が反応する。しかしリアが抱きつくのは今まで数えるのも嫌になるくらいしきてるので、俺含め他の奴らもやめさせることは半分諦めている感がある。

つか妹が自分の友達に抱きついているつてのに「人気者だね」つて……カルラつてしまっかり者に見えて案外抜けているな。

ジャスティスの事件から約一ヶ月。

良か悪か、時の流れは思つていてるより早いもので、始めは遠慮気味といふか気を遣つていてる部分があつた香奈も、最近じや素の自分を出してこられるようで俺たちも一段と賑やかになった。

「ひしていつものように『過』すだけでも一緒にいて樂しい仲間といつのは生涯を通してでもそつはいないと想つ。

(なんだかんだ言つていつもどおりが一番だよな)

最近たまにそんなことを思つよくなつた。

これを凛華とかに話したら「年寄りみたいね」つて笑われるだろうな。

「なにほさつとしてるのよ。学園着いたわよ」
考へに浸つていたせいが、俺は凛華の声でほやほや自分が校門の

前で突つ立つてしまつていったのに気づく。

「わりいわりい、まだ寝ぼけてたわ」

「もうだらしないわね」

「田向さんってたまに抜けてるといひありますよね
言い訳をしながら俺は後ろを向いて待つてくれている凜華たちの
ところへ軽く小走りで向かつた。

「この後もまた今までと同じ、いつもどおりのことをしてこべ
はずだつた。

「ああ……やつと飯だ」「

授業も一段落終わりこの後の昼休みの弁当を食べる準備をしてい
るトオルが疲れた右手をさすりながらやつてきた。

「まさか宿題忘れただけであんな日に遭うとは……予想外もいこと
じだぜ」

「さすがにあれば災難だつたな」

数学の時間、結局宿題が終わらなかつたトオルは罰として山のよ
うなプリントを渡され、それをこの時間中にやつておけ、と言われ
たのだ。

「あのときのお前の絶望した顔つたらもう爆笑もんだつたな
「つるせえ。杉原さんに写させてもらつたくせに。つーかあのプリ

ントやつたせいで右腕攣りしそうだしまジ最悪だわ

「俺はお前みたいに毎回やつてこないわけじゃないから見せてもらえたんだよ」

憎たらしげにこちらを見てくるトオルを軽く受け流す。

それでも先生に俺のことをチクらないといふはやつぱい奴だと思つ。今度ジユースでも奢つてやるか。

「それにしてもチャイム鳴るの遅いな

「そういえばそうだな」

時計のほうを見ると長針はすでに「12」を回つてゐる。いつもなら長針が「12」を指すのと同時に昼休みの始まりのチャイムが鳴る。

しかしいまだにチャイムがならない。

「早く弁当食べたいんだから早くしりよな
隣でトオルがぶつくさぼやいてこむ。

それもそのはずで、この学園は昼食を摂る場所は指定されてない代わりに、平等にするためにチャイムがなるまでは食べ始めてはいけないことになつてこる。

しかし長針が「1」を指してもスピーカーからはチャイムビーン
か物音一つ聞こえない。

変だな。

そう感じたそのときだった。

ビー！ ビー！

「な、なんだ！？」

「け、警報？」

いきなりスピーカーから音がでたかと思つたら、廊下にある警報機が作動していた。

「お、お、今日は警報で食べ始めるってか」

「こんなときにまでよくそんなこと言えるな」

学園に入学してから初めての音に驚いていた俺はジョークとも思える弦きに呆れる。

しかしやつらしている間も耳をかき鳴らしている警報はやまない。

いの事態に教室もざわつき始めている。

しかし何で警報がなつている？

誤作動か？ いや、それにしても全く止む気配がない。

訓練、というのも考えられぬもないが前述したよつて今まで警報がなつたことは一度もない。

ではなぜ ？

しかしその疑問はトルに聞くまでもなく、スピーカーから聞こえた声によつて明かされる。

「緊急避難警報発令、緊急避難警報発令。一般市民の方々は速やかにお近くのシェルターに避難してください。緊急避難警報発令、緊急……」

「緊急避難警報……？」

全くもって聞きなれない言葉に少なからず違和感を覚える。

するとスピーカーから機械音声ではない、聞きなれた声が聞こえてきた。

「迎撃科の狼火だ。警報のとおり、非戦闘員である下級生徒の諸君は全員速やかに学園の地下シェルターに避難しろ。繰り返す非戦闘員である……」

「おいおい、いつたいどうなってるんだよ！」

スピーカーからの指示にトオルが、いや、クラス全員がざわつき始める。

「ちょっと日向どうなつてんのよ」

「大丈夫なんでしょうか……」

この予想外の事態に凛華や香奈もすぐに俺たちのところに駆け寄つてきた。

「いや、俺に言われてもなんとも何もわからな……」

「ちょっと何いきなり黙り込んでいるのよ」

わからない、のところていきなり黙り込んだ俺を凛華が少しイライラしながら聞き返す。

(ちよつと待てよ……)

そんな凛華を、しかし俺は相手にせず考えに潜り込む。

今スピーカーから流れていた警報は恐らく島全体にも流れているだろう。

「こうことは一般市民を地下シェルターに避難させなくてはいけないほどの事態が起きた、あるいは起きるとこうことである。

そして地下シェルターとは試験段階のために不足の事故が起きたときに一時避難するためを作られた。が、この地下シェルターには確かに本当の理由があつたはずだ。

（そつ、確か……一般市民も安全の確保とも一つ、市民に……世間にアグレッシンの恐ろしさを知らせないため　）

「いや、まさかな……」

頭にでてきた一つの単語を、その可能性を否定する。

いや、否定したかった。

しかしそんな俺の願いも虚しく、狼火から衝撃の事実が明かされる。

「そして全上級生徒に告ぐ。本部の命令により、われわれ学園はこれより第一種迎撃態勢にはいる。各自各科」との棟に速やかに集まれ「

「そんなつ！」

「まさか！」

「第一種……！」

第一種迎撃態勢。

それが意味することはただひとつ。

「アグレッシン迎撃戦……！」

第一十話 「アグレッシン迎撃戦……」（後書き）

これにて一応一章は終わりとなります。

この作品は冬か春にMF文庫さんに応募してみようかとおもつて、い
るので次の三章が最終章となります。

どうか最後までお付き合っていただけたら作者としてこの上なくあ
がたいです。

第一十一話 「い、いいから服をきてくれ！」

アグレッシンが初めてその姿を地球にさらした日、まだ人類の大半がその存在を知らなかつた。

それもそのはずで、アグレッシンが姿を現したのはオーストラリア大陸付近、当時の国連がそれを人類の敵となりうる生物と理解し、さらに奴らに気づかれずに映像を持ち帰つてくるまでおよそ丸三日かかつた。

そしてその間にすでにオーストラリアはアグレッシンによつて首都キンバーラを基点に大陸の七割が壊滅的被害を被つていた。

それでもオーストラリアはその未知なる敵に政府も軍もお手上げ状態。

そしてその一日後、生き残つた住民を各国への避難完了とほぼ同時に国一つがアグレッシンの手によつて崩壊させられた。

その後奴らはほんの一時期は大陸から姿をくらました。

そのためその隙にアグレッシンらの対策を練り始める。

しかし映像からの解析は失敗、偵察部隊なども成果をあげられずいまだに世界が混乱していたそのとき、遂にアグレッシンは活動を再開。

まるで狙うかのように各国の首都を襲撃、何とか迎撃をしてもまた大陸付近から出没しては首都に襲撃しては被害を被りつつも撃退の繰り返しだつた。

いつした首都防衛戦は今もなお延々と繰り返されており、今回はその標的が日本になったというわけだ。

そして日本アグレッシン対策本部からここ近未来都市 否、日本の科学の全てが注ぎ込まれた首都最終防衛都市に迎撃命令が下るのはいわさが当たり前でもあるのだ。

「さて、今回君らがしなければならない」とは一つ。一つは命をはつてでも敵を一体たりとも逃がしはしないこと。もう一つは本部のリベンジャーがここに到着するまでの間、できる限り敵戦力を削ること」

そして今、学園は各科ごとに迎撃態勢に入っている。

医療科なら戦場となる荒地の近くに緊急治療テントの準備。工学科ならブレイカーのスタンモード（危険や犯罪の未然防止のために学生のブレイカーは常時スタンモードになつており、どんなに適性率が高くても一定以上の威力は出ないようになつてい）の解除の準備などだ。

そして迎撃科はといふと作戦確認と配置分けだ。

ちなみに迎撃戦は基本チームごとに配置されるらしい、そのチームと言つのが対抗戦のチームのことだ。

「もし逃がしてしまつたら……」

作戦内容を聞いた一年と思われる者があずあずと手を上げる。

それは誰もが考えたことで、誰もが考えたくなかつたことだつた。

だが……

「一応首都とその範囲二十kmは自宅待機命令がでているはずだが……それでも町はパニック、リベンジジャーが始末するまでに死傷者は千は超えるだらうな。それにまづこの島が襲われないという確証はどこにもない」

「……つー」

狼火の容赦のない言葉に、室内の全員が息を呑む。

“一匹も逃がさない”

それは非常にわかりやすく、そしてこれでもかといつもくらい難しいことだ。

「さて、とりあえず配置についてだが、三年と四年で前線。二年が後方で前線の漏れの始末、ブレイカーになれない一年は待機だ」

全体をゆっくりと見渡しながら狼火は説明を続ける。

「ちなみに狙撃ができるものは後方の援護としてチームの仲間とは別行動で狙撃隊として行動してもらひ。無論、一年も上級生徒だ。場合によつちや出撃もありえるから心の準備はしておけ。では各自準備が整い次第待機所に集合だ」

「はい！」

指示が終ると同時に人が流れるように迎撃科棟から出て行く。今から強化服に着替えたり、ブレイカーのスタンモードを解除しにいったりするためだ。

「日向さん」

なんとか流れから抜け出すとちょうど香奈と凜華がいた。

「やつと会えましたね」

「ホント人が多いと大変よね」

「まあな。とりあえず俺たちも解除してもらつたためにトオルのところへ行くぞ」

「あんな変態にやつてもらつのは癪だけじね」

「けど私は一旦部屋に帰つて強化服に着替えないといけないので…」

「ん、そういうえばそつか。なら俺たちも一旦戻るか」

「そうね」

これからすることを確認すると、流れが少し落ち着いたのを見計らつて俺たちは走つて寮に戻つた。

部屋に戻り、さっそく午前使つたかばんを置いてから一口水を飲み強化服に着替える。

腰ホルダーにブレイカーをセットし、外にでるともう凜華が待つ

ていた。

「随分と早いな」

「着替えるだけだから。女は男と違つてやることが早いのよ」

「そういう…… ものか？」

よく判らないがまあいい。

「それよりも香奈はまだか？」

「香奈ならさつき『もう少し待つてて』って言つてたわよ」

「ん、そうか。なら香奈の部屋の前で待つとするか」

「あ、それなら私は先に工武科の友達にスタンモードを解除しても
らいに行つてもいい？」

「それじゃ待機所で待ち合わせだな

「うん」

凛華とは別行動になつた俺は一人一つ上の階にある香奈の部屋の
前に向かう。

部屋のカーテンの奥にまだ明かりが見えるあたり、まだ着替え終
わつてないみたいだな。

(とりあえず待つか)

それから壁に寄りかかつて待つこと数分、後どれくらいかかるか
聞こうか迷つっていたとき中から「凛華さん」と呼ぶ香奈の声が聞
こえた。

「凛華は先に行つたぞ」

「ええ！？ …… ホントですか？」

中に聞こえるよつ少し大きめの声量で答えると、中から何か焦つ

てこるよつな返事がきた。

「どうかしたのか？」

「い、いえ……あの、その……」

どんどん聞こえなくなつていく声に心配になつていて、一泊おいてから「な、中に入つてくれませんか」という恥ずかしそうな声がした。

言われるままにとりあえず中に入りリビングに行く。女性の部屋らしく隅から隅まで整理が施されている。

「あの、ちょっとこっちに……」

綺麗な部屋だなあと感心していると奥の個室から香奈の呼ぶ声がしたぼうへ急ぎ歩きでそちらへ向かう。

「いつたいどうした……つて！ 何でそんな格好を！？」
「えつ！ み、見ないでくださいつ！ つて私が呼んだんでしたよね。で、でもこれにはちょっと理由があつて……」

個室のドアを開けた瞬間、俺は軍人の如くキレのあるすばやい回れ右をした。

その理由は至つてシンプル、部屋の真ん中にスタイル抜群の美女が下着姿でいたからである。

「い、いいから服をきてくれ！」

「そ、それができたらしますつて！」

服が着れないといふことはどうこうとか。俺は恐る恐る香奈のほうを向きながら聞く。もちろん顔だけを見るよつて意識して。

「な、なんでできないんだよ」

「それが……ブ、ブラを替えて新しいのを取つたらホックタイプだつたんで鏡を見ながらやろうとしたんですけど……その、買ったのが先週だつたからかですね、その……」

「その……なんだよ?」

涙声になりながら話す香奈が途中で黙り込んでしまつたので聞き返す。

すると、香奈はさらに涙声になつて、

「い、いこまで言つてもわからないんですか? うう……だから、その……む、胸が大きくなつてサイズが合わないんです! !」

最後らへんは半ばやけくそ氣味に言つた香奈の言葉を理解するまで、俺はたつぱり五秒はかかつた。

(ええと、よつするに先週はサイズが合つてたブラが今はもう着れない……とこいつことなのか?)

要するに一週間で約ワンサイズでかくなつた……と?

その驚愕の事実に俺は足が痺れるような感覚を覚える。

もちろん、いつも凛華を見ている俺としては到底信じられない話だ。が、香奈がそんな嘘を言つような奴じやないのは知つてゐるし何より今両腕によつて隠されているあの立派な二つの富士山が、今の話が真であることを物語つてゐる。

しかしそう「う」となら簡単だ。

「そ、それじゃ他のやつにすればいいじゃないか」

思ついたことを恤つて、つにつに胸元にこつてしまつ田線を無理やり部屋に泳がせる。

よく見てみると、寝室らしきこの部屋は鏡がついているクローゼットとベッドしかなく、他には少女部屋にありそうな可愛いぬいぐるみと部屋の電気のリモコンが転がつてゐる。

「それが他のはこれよつ全部サイズが下で……わざまで着てたのはもう洗濯機の中です」

「や、それじゃどうするつてんだよ」

「え、ええと……多少無理やりでもいいんでホックを留めてくれませんか?」

「言つてこむ」とが頭はわかつてゐるのだが心が、といつか理性がつこていかず念のため右と左、そして上を見る。

「…………あのや、それやるのつてやつぱつ」

「…………はい、お願ひします」

予想外すぎる展開に俺は田の前のことを理解するのに精一杯になる。

「ええと、俺女性の下着なんて着けたことないんだけど」

「や、そんなの当たり前です!」

とつあえず頭に浮かんだことをこつたら怒られてしまった。

「早くお願ひします!」

「い、いや、でもこれは……や、たすがに」

自分の顔がどんどん赤くなつていいくのに気がつかないほどテンパつてきて上手く言葉が続かない。

「下着を着ないで行くわけにもいかないです。そしてなによつての

格好で田向さんの前に立つところのは恥ずかしいんです！ 死にそ
うなんです！」

「わ、わかった！ わかったから泣かないでくれ！」

結局俺は声をあげて泣きそつた勢いの香奈に負け、顔を真横に向
けながら香奈の背後に回る。

「じゃ、じゃあこくべ」

「は、はい……あ、その前に電気暗くしてもいいですか？」

「あ、ああ」

さすがにこんなに明るい電気じゃ恥ずかしいのだろう、香奈は田
の前にあるコモロノンを取ると電気の強さを最弱にした。

「ええと、このホックを留めればいいんだな？」

「はい、そうです」

電気はほとんどないような光で、昼間なのにカーテンも締められ
てるからか部屋の中は自分の手元を見るだけでも精一杯の明るさで
正直ありがたい。

もし明るかだったらどうせやつても香奈の体を見る羽目になり、正直
すこく気まずい。

一応ホックも確認したので早速留めようとする。が、初めてだか
らか暗いからか、これがなかなかできない。

しかも力づくでやるかじりと力を入れると、きつくて痛いの
が香奈が変な声をあげるのでやつてくへてしまうがない。

いや、それ以前に自分の正気を保つだけで精一杯だ。

しかしこのままでは埒があかない。

そう思った俺は一度手を休めて香奈を見る。

「よし、このままじや終わらないから痛いかもしれないけど、今から一気に締めるぞ」

「えつ、は、はい」

疲れたのか少し息が乱れている香奈を心配しつつもまた手に力を込める。

「それじゃいくぞ……せーのっ！…」

パチン。

「で、できたぞ！」

「ほ、ほんとですか？」

一気にやつたせいかさらに声をあげた香奈だつたがすぐにちやんと留まつているか確認してくれた。

「どうだ？ 大丈夫そうか？」

「ちょっときつくて胸が痛いですけど……取れる」とはなさやつです

なんとか成功できたことによつて今まで体を支配していた緊張などの重みが一気に抜けていった。だがそれがいけなかつた。

「うわあつ！」

「田向さんつ！」

体の力が抜けたことによつて重心が大きく移動し、俺はいつの間にか踏んでいたらしいぬいぐるみで滑つてこけてしまつ。

どんづといづ純い音とともに俺は床に腰をぶつけたが、香奈が咄嗟に手でカバーしてくれたおかげでなんとか頭はぶつけずにするんだ。しかし

（む、胸が顔に……）

じつやら香奈は抱きつくように俺の頭に手を回して一緒に倒れたので、ものの見事に俺の顔は香奈の豊かな山の間の未知の世界にフイットしてこた。

「ふ、ふもふふもふも……！」

「ひやあっ！ く、くすぐったいです……。喋らないでください」「なんとか言い訳しようとすると、頭の上のほつからまた涙声が聞こえる。

「ふはあ

泣きそつになりつつも香奈が上体を少し上げてくれたおかげで俺はよつやく息が吸えた。

「う、うめんなさい。こんなにあわせちゃって……」

「こ、いや香奈のせこじやねえよ」

ずつずつと這うように上のほつからドガつて来た香奈はちよづく俺の胸の前辺りで顔を置き、謝る。

（しかしそれにしても……）

いくら下着を着ているといえ、それでも純白の布に押さえつけられながらもその大きさと形の良さをみせつけられるのに自然と目がいつてしまい、すぐにそらす。

「か、香奈？」

「」のありえないシチュエーションに動搖して氣づくのが遅れたが、しばらくたつても香奈が動く気配がない。

ちらりと香奈のほうをみるとなにやら考え事をしてこるような顔をしていた。

そして一言。

「……田向ちゃんって今デキデキしてます？」

「はいっー？」

こきなりの質問に声が裏返る。

「なんでいきなり……？」

「いじから答えてください」

「」、答えなきやだめなのか？

「はい」

「……で、ドキドキしてると決まってるんだる。俺だって男だし」

何の罰ゲームなんだと思しながら一応素直に答つ。正直恥ずかしさで死ねそうだ。

「そうですね……よね」

まやかたまたまだが、俺が胸を見てしまつたことに氣づき怒つているのだろうか？

ふと頭に浮かび、俺の頭は哀れにも次の瞬間には言い訳を必死に考えようとしていた。

しかしその予想は外れていた。

「あ、あのもし田向さんが……したいっていつのなら私は……」

「……？ したい？」

「だ、だから！ そ、その……“あれ”です」

「なつ！？」

この状況での“あれ”についてはいくつも鈍感と言われている俺でもなんとなく察せたが、いつもと雰囲気が違う香奈にいたことに困惑。

「私ずっと思つてたんですけど……田向さんがいなかつたら私はジヤステイスに連れ去られたときに死んでいたんですね」

しかしそんな俺を知つてか知らずか、どこか覚悟を決めたような顔をした香奈がゆつくりと言葉を紡いでいく。

「でも私は生きて帰れた……それもこれも全部田向さんのおかげなんです。だからお礼がしたいんです」

「……」

だいたいなにが言うのか予想がつく。
しかしあえて俺は黙つて聞く。

「命を助けてくれたんです。だから私は一度死んでいるはずだった私を助けてくれた田向さんのためなら……なんでもします」

「……」

「だから……したいのであれば、いえどんなことでもしたいことがあつたら命令してください。田向さんが……あなたが喜ぶことなら、幸せになることなら、なんでも……だから……」

「……」

あの日からずっと抱えてきたのだろうその思い、覚悟に俺は何も

言わない。

考へているのではない。

言つことは決まつてゐる。

ずっと抱えてきた思いに返す言葉はたつた一つ。

「じゃあなんで震えているんだ？」

「……つえ？」

もう香奈は、焰香奈は自分でも気づかぬいつちに震えていた。自然と、震えていた。

「本当はおびえているんじゃないのか？」

「そ、そんなことは……」

「誰がお礼が欲しいって言つたんだよ」

「つー」

なんとか言い返そうとしてきた香奈に俺は追いつめをする。その声には確かに怒りがこもつていた。

その怒りは、こんなことを言つ出した香奈にでもあるがそれだけではない。そこまで追い詰められるまで香奈の気持ちに気づけなかつた自分に、だ。

「仮に俺が命令したとしよう。けどそれじゃお前はまるで主人の言

うことを聞く奴隸じやねえか」

「で、でも」

「俺はお前を奴隸にするために助けたんじゃない」

これ以上言つと香奈のことを傷つけるかもしない。そうわかつていながらも俺の口が止まることはなかつた。

「いいか、よく聞け。俺はお前に生きて欲しかつたから助けたんだ。それなのに他人の命令を聞くなんて……そんな奴隸のような生き方は俺は認めない。そんなのは死んでいるも同然だ」

そこまで言つてふと気付く。俺がなぜ香奈を助けた理由が。

「……いや、正直に言えば俺がお前を助けたかつた理由はもしかしたらただの自己満足かもしない。か弱いヒロインを助ける、かつこいい主人公になりたかつただけという、自己満足」

「そんなことありません！ 少なくとも日向さんはそんな人じやないですよ！」

「そうか」

自分がどれほど恥ずかしいセリフを言つていることか。

そんなことは百も承知だ。

けどやめる気はない。

今さらやめられない。

たとえ相手を傷つけることになつても。

だからこれだけは、あの日の後から少しながらも感じていたこれだけは、言わなくてはいけない。

「いいか、もし仮にお前が俺に好意を抱いているのならそれはにせものだ」

「つ！」

今にも泣き出しそうな香奈の顔を見て、せつぜつとつづ。

「なんで… 私は…」

「いや、違う。少し言い方を間違えた」

泣くのも恥じずになにかを必死に伝えようとしている香奈にストップをかける。

「今お前がここにせものじゃなくて本物だと呴つても、俺は信じられない」

「なんで…」

「じゃあお前はなんでも命令を聞くなんて奴隸みたいなことを、生きてるのを自分から諦めた言つたやつの言葉が信じられるかよ」

「あつ…」

せつしきからキザのようなセツツを言つている気がする。頭の中で客観的な俺が引いているのがわかるが今はそれに構つてられない。そろ時間がないぞ」

恥ずかしさに耐えられなくなり無理やり話を切り上げようとする

と、俺の胸の前で涙を拭いた香奈はクスッと笑つた。

「わつですね……少し考えてみます」

「……わつ」

暗闇の中香奈が見せた表情は、泣いたせいで目が少し赤く腫れてたがそれをも感じさせない、最高の笑顔だった。

第一十一話 「い、いいから服をきてくれー」（後書き）

「スタンモードや香奈、凛華のブレイカーの一種類目の武器について」

最近公募用のほうも改稿しながら書いているのですが、その影響でこつちと公募用に少々ズレがおきましたへへ；

その例がこの「スタンモード」と香奈、凛華の一種類目の設定です。ですのでこの場で軽く説明しちゃいます

まずスタンモードというのは簡単に言えば訓練などのときに誤つて怪我をしないようにあります。ですので対抗戦も本編では書いてませんがスタンモードでやつてます。だから相手を戦闘不能というちゅうどいい状態にできると言つわけです（もちろん痛みはあります）

次に一種類目の武器設定についてですが、香奈は槍、凛華は双手剣となっています。

これはこの作品の特徴であるブレイカーをもつと使って“変幻自在バトル”をしたいからです。

ちなみに凛華の双手剣は本編のほうでもジャスティス戦で短剣を使つたバトルをしていたので。

香奈の槍は実はまだ保留中で場合によつては鞭などに変わるかもしれません。

ちなみにリアは狙撃に突発している変わりに他が駄目なので狙撃中のみ、日向はブレイカーの特性上刀以外は変えられない（バーサー

カーシステムに対応したメモリット）との設定です。

最終章にして「こんな」とになってしまった申し訳ありませんが、どうぞ最後まで「光翼」をよろしくお願いします。（――）

第一十一話 「あんな……嘘だら……ー?」（前編）

前回はなぜか「アコメ」がはいつてしましましたがこれからは本当にシリアルズです。

次回からくらいは途中残酷な表現が入るかもしれませんので一応ここで記載しておきます。
ではどうぞお楽しみください

第一十一話 「あんな……嘘だら……！？」

「……か、待機所は、
俺は入り口と思われる場所にある『キャンプ場』と書かれた木の
看板を見ながら呟く。

ちなみに香奈はまだ着替えるのに時間がかかるやうだったので俺
はスタンモードを解除してもらつために、一足先にここにきた。

奥では先にきていた医療科や工武科がテントの中で作業をしてい
る。

他にもすでに強化服に着替えた迎撃科のやつらが休んでい
たり工武科にスタンモードを解除したりなど……島の南に作られ、
いつもは人気のないキャンプ場は今、まさしく待機所　後方支援
場という本来の姿になっている。

そしてさらにその先には未開拓地といつ名のところどころに木が
あること以外は土で埋め尽くされている荒地……これから戦場とな
る場所が見える。

「迎撃科の諸君、聞こえるか」

しばらく待機所を回り、トオルを探していると、先ほど配布され
耳につけた小型通信機から狼火の声が聞こえた。

「たつた今本部から連絡があった。どうやら本部のリベンジャーが
ここに到着するまで一時間はかかるそうだ。敵との予測交戦時間は
およそ残り一十分。よって作戦開始は今から十分後だ。まあ簡単に
言えばお前らはこの四十分間を耐え切ってくれれば作戦は成功とな

る

今通信機から流れてくる声の張本人、狼火とその他迎撃科教員は通信科と一緒に通信科棟内の大型モニタールームにいる。モニタールームには何十台ものモニターがあり、そこから俺たちに取り付けてある通信機の内臓カメラなどから状況に合わせリアルタイムで指示を出せるのだ。

「それと成富聞こえるか？」

「は、はい」

不意に狼火に呼ばれ、通信機越しなのに背筋が自然と伸びる。

「なんですか」

何か言われるようなことをしただろうか、などと考えると予想外の言葉が飛んできた。

「ああ、お前はバーサーカーシステムがあるから……」

「ちょ、ちょっと！ 何言つてるんですか！」

この前ジャスティス戦の後システムについては『私は絶対に言わない』とかいつておきながら何さらつと言つてんだこの人！

と今のが他のやつらに聞かれてないかと俺があたふたしていると、「ああ、心配するな。これは個人チャネルだから聞こえるのはお前だけだ」

「な、なんだ……」

最初からそう言えよ、と思うがそこは必死に抑える。

ちなみに個人チャネルとはさつきまでの共通チャネルと違って特定の人にのみ通信を繋げられる。

これは主に戦闘が始まった後チームごとに通信を取り合うのに使

う。

「それで、なんですか？」

個人チャンネルといふこともあり、だいぶリラックスして聞く。

「それなんだが今日は一年は待機命令なのだが……お前らAチームは最終防衛ラインとして迎撃戦に参戦してもらつ」

「Aチームつてことは凜華や香奈も……それも最終防衛ラインだなんて無理ですよ」

リアも下級だが一応Aチーム扱いなので今はもう狙撃チームのほうで準備を進めているはずだ。

といふことは実質三人でやることになる。

素人がみたつて結果はわかっているはずなんだが……

「なあに、最終防衛ラインつていつも前衛のやつらが討ちこぼしのを片づける、いわば予備のようなものだ」

「しかしだからといって」

「大丈夫だ。お前が守る場所は一番待機所に近く、狙撃の援護も受けやすい。それにお前達の前には何十チームといふ、四年が主体のチームがいるんだ。きたとしても一匹か二匹だろう」

「はあ……」

狼火にしては陽気で明るい声の説得に無意識のうちにため息がでる。

（ホント、戦闘になると途端に機嫌よくなりやがつて……）

しかし戦場において指揮官の命令はほぼ絶対。

「そういうことだから他のやつにも云えておけよ」

「……はい」

それがどんなに無理なことでも断る」とは言えず、結局俺は頷くしかなかつた。

「……さて、早くトオルを探すとするかな」

俺は個人チャンネルが切れたことを確認しながら重くなつた足を引きづるようにまたトオルを探し始めた。

その後俺はすぐにトオルを見つけることができ、作戦開始の五分前には凛華たちと合流できた。

「さて、ではこれよりそれぞれ配置につけ。やつらが来るまでもつ時間はないぞ」

待機所と戦場を仕切るかのような防壁の前にいる俺たち戦闘員に指示が出される。

それと同時に防壁のいちぶでもある扉が、まるで地獄に誘う死神のような荒地を見せびらかすよつに開かれる。

開かれた扉から吹いてくる静かな風は、時によつては気持ちのよいものだが、今はこれから起こる嵐の前の静けさにしか思えない。

しかしいままでおこして怖気づくわけにもいかない。

俺たちは不安をかき消すように雄たけびを一つ上げてからそれぞれの作戦位置に向かつ。

最終防衛ラインを任されている俺たちAチームは事実上最後尾の位置になるため、いち早く到着した。

「日向、ホントに私達もできるの？」

「ああ。聞き間違いのはずがない」

各々得意の武器にブレイカーを起動させながら隣の凜華が不安そうに聞いてきた。

後方援護のためほんの少し後ろに陣取つている香奈も見れば緊張しているようだ。

（でも無理もないか……）

俺も緊張や不安がないかと言えば嘘になる。

しかし、事実俺たち迎撃科生徒がアグレッシンと戦うのは、もつと言えば実際に見るのはこれが初めてなのだ。

いくら口頭で『あれは恐ろしいものだ』『やつらは人の敵だ』などと言わてもそれを体感してない者には、昔の戦争の話を聞くのと一緒にでただ単に「恐ろしい敵」としか写らない。

だから今は敵はどれだけ恐ろしいものなのかといつ不安と、案外たいしたことないかもしないという期待が入り混じっている、変な気持ちなのだ。

「とにかく狼火の話によれば俺たちのところにはまだ敵はこないらしい」

「ほんとに?」

「俺に言われても……なあ。狼火がそういうてただけで本當かどうかはそのときになつてみないと」

「むう。結局は前衛の先輩方の活躍次第、か」

そんな不安定な気持ちは俺だけではなく凛華も同じでこいつしてとにかく無意識に確かな情報を欲しがる。

ちなみに今は通信機を介さずに喋っている。戦闘が始まるまでは別に使うほど雑音はないからな。

「しかしもし仮に私達のところへきたら倒せるのでしょうか……」

香奈は自分の背丈ほどもある大きな『』を携えながら、その堂々たる姿に似合わぬおどおどした目をこちらに向けてくる。

「それもわからないうけど……やるつきやないつしょ」

「それもそうですね」

「結局なにもわからないのね……」

(やばいな。一人ともこのまま戦闘したら危ない……)

香奈はともかくあのプライド高き凛華がいまだに落ち着いてないのは正直困る。

その不安や焦りからでてくる微妙な誤差で、いつもはできている連携ができなくなつたりすることもある。

(さて、何か一人を落ち着かせることができるいい言葉はないか……)

自分にも焦りが出来て「ここに気が付いていない俺がそんな気の利いた言葉を思いつくな」ともなく、それでも尚必死に考えようとしたそのとき。

「…………おい。なんだあれ…………」

こきなり聞きなれない声が耳元でした。

そしてそれが通信機越しの前衛が言ったことだと気がいたときは、すでにその言葉の意味が俺たちにも伝わっていた。

「な、なによ…………」これは、隣の凛華も前を見たとたん、呆然と立ちすくむ。

「あんな…………嘘だろ…………ー…………」

そんな俺の悲痛もしかし、目の前の現実を壊してはくれなかつた。

俺たちのところからではかなり遠いはずなのに、はつきりと見える。

そう、それはまるで何千、何万の兵士がそれぞれ束になつて襲い掛かってくるかのようだ。

それはまるで空から流星群の如く隕石が降つてくるかのようだ。

それはまるで人に痺れを切らした神が本氣で俺たちを潰そつとじてきているかのようだ

「もしかしてあれが……アグレッシン……？」
後ろで香奈が小さく、でもはつきりと呟く。

「目標接近。交戦まで残り10秒！」

片方の通信機から通信科によるカウントダウンが始まる。

しかしその声すら俺の耳には届かない。

その声を聞いたとしても、まずは目の前にここに頭が追いつかなければ。

「残り3秒」

「さあ、お前らー。ついに本来の役目を遂げるときだ！　もうわかつていてると思うがあれが人類の敵、アグレッシンだ」
もう片方の通信機からいつも聞きなれている、でもどこか高ぶつている様子の声でそれは確かなものとなつた。

「1

「準備はいいなあー！？」

「0

カウントダウンの終了と同時に爆音とともに大地が突如揺れる。
それがアグレッシンたちの着地の音だとはもちろん後方にはいる俺にはわからない。

「さあ！　迎撃戦スタート！！」

興奮した様子の狼火の大声に我を取り戻した前衛が次々とブレイカーケーブルを掲げ、叫びを上げながらその化け物と呼ぶにふさわしい生物、アグレッシンへと突っ込む。

そして悲鳴にも似たその叫びは現実とは思えない光景がこれから始まるのことを、告げた。

第一二三話 「目標交戦距離に入ります」

「一体、こちらに向かってきます

「了解」

通信機から聞こえるオペレーターの声が、前線が仕留めきれなかつたアグレッシンが「こちらにくる」とを知らせる。

次々と目標の敵の情報を伝えてくる声に集中すると、どうやらそいつはコアを守る役目をもつ外殻がほぼ破壊されており、恐らく後一撃加えれば倒せるほどだそうだ。

前衛の先輩達もそのことは承知で後は後衛の俺たちに任せ、次の敵に向かつたのだろう。

「目標接近、残り500

オペレーターが距離を伝えるとほぼ同時に、敵を肉眼でどうとか視認できるようになる。

「つづ、また気持ち悪いわね」

「そうですね……せめて虫のよつた見た目は勘弁してほしいです」

だいぶ場の雰囲気に慣れたのか、凛華と香奈の本音が通信機越しに聞こえる（前衛の戦闘は後衛と違つて凄まじく、その音は近くで話す俺たちの会話すら直接は聞き取れなくなるほどだ）。

（まあでもそのとおりだよな）

俺自身もだいぶ緊張感がとれたのか、心中で同意する。

今こちゅうに向かってきているやつを含め、迎撃戦が開始されてから十分間で三体が最終防衛ラインである俺らAチームのところまで、今のようなコアを剥き出しにした状態で来た。

すぐ横に転がっている死骸 コアを破壊され原型を留めていな
い一体はどうやらも芋虫のような形態をしていた。

そして今こちゅうに向かってきているやつもまた芋虫のような形態
だった。

「残り100。迎撃体制に入つてください」

「了解。……つたく、前線の通信を聞く限り、もっと違う形態のや
つもいるらしいが……どうしてこう、芋虫ばっかりくるんだよ」

オペレーターの指示通りブレイカーを アグレッシンの体液で
少々汚れた白銀の刀を構える。

「そんなんに余裕があるなら今からでも前衛にいけば?」
「つは、『冗談を』」

同じく両短銃を構えた凜華の言葉に苦笑を零す。

そもそも俺たちが相手しているのは外殻をほとんど壊され、体力
も削られたやつら。言つなれば弱点を剥き出しの、むりで動きが鈍くただの死に損な
いに止めを刺していくだけなのだ。

もつとも、アグレッシンたちが姿を現したとき、正直俺たちも傷

一つついてなじやつを何十匹も相手にするになるのかと思つて
いた。

いや、もしかしたら本当にそつとなつていたかも知れない。

戦闘が始まつたときはまだ前衛の三、四年ですらパニックが収まつていなかつたのだ。

そんな混乱が収まらないままに戦闘が始まつ、当然の如くアグレッシンに押されはじめた前線が後退を始めたそのとき、さすがにここから最前線まではかなりの距離があるのでぼんやりとしか見えなかつたが二人の上級生徒が戦況を変えたことはわかつた。

片方の一人がワイヤーのような細い武器を何本も同時に操り、今までに進行しようとしていたアグレッシンたちを上空のやつも含めてその場に拘束した。

なんとその数およそ百体。

これだけでも信じがたいことだが、やうにその隙にもう一方が近接系の武器で手当たり次第に外殻「」とコアを破壊するといつ圧倒的な実力でアグレッシンを圧倒。

そして何百といた敵戦力は一気に減少。こちらの士気も高まり始めの混乱もどこへやら、普段の連携を生かした戦法も復活。

狙撃隊も攻撃しにくい上空の敵を的確に打ち落とし始め、形成は逆転した。

「今」うして俺らが余裕でいられるのも全ては先輩方のおかげだつてことだ

「そうですね。じゃなきや今頃ここは見るに耐えない地獄になつていたでしょ」

「まつ、うつう」とだ

「ちょっと、ぐだぐだ喋つてると暇はもうないわよ

「なん」とはわかつてゐる

田前にまで迫つた敵を見据えながら互いに田を合わせる。

「わつと回じように香奈はバックアップを」

「はい！」

「凛華も」

「言われなくともっ！」

「目標交戦距離に入ります。迎撃してください」

「了解！」

オペレーターの指示と同時に俺と凛華は走り出す。

それに気づいたらしい敵も芋虫のよつた顔から顎を引き裂くよつて、ずりつと牙が並ぶ口を開く。

そこから超音波のような吠え声をあげ、6cmはあるだらつ縦長な、まるで芋虫をそのままかくしたよつた巨体を蛇のように引きびつて、ひりひりに突進してくる。

「これでもへらへなれー」

その突進を冷静に左右に避け、凛華が敵に向かつて銃声をけたたましく鳴らす。

そしてその銃弾は的確にアグレッシンの複眼に命中。

「たああ！」

アグレッシンが痛みにひるんだ隙に凛華は即座にブレイカーを双短剣に変更。銃の撃つた反動を應用して双方とも複眼の一つに突き刺す。

さらなる追撃に悲鳴を上げるアグレッシンの複眼に刺さった双短剣は凛華の意思により両短銃に変化。

結果、両短銃の銃口は双短剣の影響で複眼にがっちり突き刺さっている。

「この距離なら！」

銃口がしつかりと刺さっていることを確認した凛華はなんの躊躇もなくトリガーを引きまくる。

そして実質本当のゼロ距離からの両短銃による乱射は確実に複眼の一つを潰す。

「凛華下がれっ」

その激痛に怒り狂つたアグレッシンが奇怪な吠え声をあげながら近くにいる凛華を攻撃しようと暴れまわる。

「田向、あとは任せたわよー！」

「おひー… 香奈ー！」

そのアグレッシンの猛攻を華麗に交わしながら後退していく凛華を確認し、香奈に指示をだす。

「わかりました！」

俺の声を聞くが早いか炎を纏つた矢を俺に向けて放つ。

いまだに残っている複眼で凛華を追つていくアグレッシンに向かって走る俺にその矢が当たるうとしたその瞬間^{とき}、香奈の意思により炎は矢を燃やしつくし俺の刀へと矛先を向ける。

しかしその炎が刀を包んでも刀が燃やされる」とはない。

逆に刀は炎を纏つたことで威力が格段に上がる。

これは香奈が超能力者とわかつたときから考えていたことで、つい先日できるようになつた新たな連携技だ。

敵の攻撃は短剣で防ぎ、その隙に銃に変えて近距離射撃を当てるという見事なほどにブレイカーの特性を使いこなしていた凛華も、こちらが準備ができたことに気づき旋回するよつにしてアグレッシンを誘導する。

距離はすぐに縮まり、俺と凛華が互いに横切る。

「締めはよろしくね」

「任せろー。」

刀の柄を強く握り締め、体制を低く前傾にして突進していくアグレッシンに突っ込むように走る。

狙うは頭の頂上、人間で言えば脳にあたる部分。

口、複眼の上で剥き出しにされて赤く光っている六角形の物体
「コア！」

「はあああ！」

狙いを澄まし、雄たけびを上げながら跳躍で一気に距離を詰める。
しかしそれでも動じることなく、逆に跳ね返すとでも言わんばかりの四角形が宙に浮いている俺の体に向かって体当たりを仕掛けてくる。

「これで……」

しかし俺はそれを空中で刀を振るつた遠心力でドリルのように体を捻り回避。

回転をした俺の体が一回転をし終えるとそこにはもうアグレッシンの頭の真上。

「コアに止めを刺す絶好のチャンス。

これを逃がすはずがない。

まだ残っている回転の余力を使いながら刀を後ろに引き 刹那、捻れた体を戻す反動で刀を思いつきアグレッシンに向けて振るつ。

「終わりだああ！」

直後刀とコアがぶつかり合い、悲鳴のような音が鳴り響き、火花が散る。

しかし炎を纏つた刀の火力は伊達ではなく、徐々にコアに亀裂が走る。

「おおおおお！」

俺が雄たけびをあげたその瞬間、ガラスが弾けるような音とともにコアが破壊され、俺はそのままアグレッシンを頭から、魚を解体するように綺麗に切り裂いた。

倒した、という手ごたえはアグレッシンの奇妙な吠え声で間違いではないことを主張する。

「よし」「やつた！」

自然とハイタッチをする俺と凜華に香奈もホッとした顔を向けている。

どうやら同じ形状の敵は攻撃方法も似ているらしく、三度目ということもあり、だいぶスムーズに倒すことができた。

「だいぶ余裕そうね」

乱れた髪を直す凛華は、ブレイカーを基礎状態に戻しながら一応コアが破壊されていることを確認しに行く。

「まあな。最初よりかはだいぶ連携も上手くいくようになったしな

凛華に見ゆうように俺もブレイカーを基礎状態に戻し、ついていく。

ちなみに刀に纏ついていた炎は敵を切り裂き終わった後に役目を終えるよひに消えていった。

「」の調子なら私達でも前線にいけるんじゃない?

「前線とか、そんなの洒落になんねえよ」

ふと見ると凛華が本気とも思えなくもない笑みをしていたので、ほっぺをつまんでいじくる。

「むうう、そんなことわかつてるもん」

凛華はぶつぶつ文句を言しながら、なぜか俺にほっぺをいじくられるのを嫌がらない。

(けどまあ、ホント前線みたいに延々と戦闘が続く場所なんか行きたくもないよな)

そして案外凛華のほっぺは柔らかく、止めてとも言わないのでありがたく俺は右手でその柔らかさを堪能しながら考える。

そもそも一年である俺たちがアグレッシンを倒せているのも前述

したとおり前線の、特に例の一人による活躍のおかげなのだ。

それを証明するかのように通信機を共通チャネルにすれば前線たちの凄まじい戦闘音と叫び声が聞こえる。

オペレーターの声を察するこ、恐らく傷一つついてないアグレッシンたちを何体も、場合によつては同時に相手にしなければならない。

そんな状況下に置かれれば、システムがないと弱った敵を倒すのに精一杯な俺じや嫌でもバーサーカーシステムを使わざる終えないだろう。

だからこそ今回の配置は一番いい所だと言える。

「作戦予定時間は残り30分……この調子で行けば大丈夫そうだな」

「そうね」

「そうですが……こんなに上手くいっていきようじこのでしちうか

……

「香奈？」

同意する凜華とは裏腹に、香奈はかなり不安そうな声だった。

「いえ……なんだか迎激戦にしては戦場全体の緊張感が少なすぎると言いますか……」

「ちょっと香奈、不気味なことを言わないでよ」

「す、すみません。でもなんだか嫌な予感がするんです」

「嫌な予感、ね……」

確かに過去今までの迎撃戦は全て多大な被害を被つていてる。

負傷者は数百人を越えるらしいが、今回の迎撃戦ではまだ負傷者は数十人しかいない。

今回はたまたま運がよかつたとも言えるが香奈に言われるとなんだかそれも違う気がしてくる。

まあ、俺としてはこのままバーサーカーシステムを使うことなく戦闘が終わるのが一番望ましい限りだが。

(まあ、大丈夫だろ？)

香奈が不安性ということもある。

とりあえず悪いことは考えないようにし、目の前のことに集中することにする。

しかし、そうしている間にもアグレッシンとともにやつてきた地獄の影は刻々と着実に近づいてきていた。

そして数分後、香奈が感じていた予感は的中することになる。

第一十四話 もして地獄が始まる。

三体目となるアグレッシンを倒してから数分がたつた。

その間に四体目がくる」ともなく、特に「する」ともない俺たちは通信機を共通チャンネルにして前線の情報などに耳を傾けていた。

しばらぐうじてごると、戦闘音などの間に少し雜音が入つていてのにて氣づく。

(なんだ……?)

その音を聞き取ろうと通信機の音量を上げると、ビラビラそれは通信科のなにかに驚きの声を上げているらし。

「ま、まさか……」だとか「そんなつ」などといった言葉が聞き取れる。

「ねえ日向、なにがあつたのかしら」

同じくこの異変に気づいたらしい凛華が不安そうにしていて、少し後ろにいる香奈もどこか落ち着かない様子でこちらをみている。

「俺に言われても……ねえ……」

“ そんなこと分からぬ

そう呟おつとしたそのとき、

「全戦闘員に告ぐ。聞こえるか?」

突如通信機越しに狼火の声がした。

その声は心なしかビームが焦つてこむようだ、そのことに驚きを感じる。

「まあ、待機している迎撃科は全員今すぐ、ブレイカーを起動して戦場に出る！」

「なつ……！」

待機している迎撃科といえば、まだブレイカーにすら慣れていない一年がいる。

なにを考えているんだ狼火は。

頭に浮かんできた至極当然の疑問は、しかし次の言葉によつて吹き飛ばされる。

「アグレッシンと思われる新たな生命体群を確認！」「さりに向かつてきてこま！」

「さりに敵！？」

今戦っている敵の数はおよそ五百体。

今までの迎撃戦の中では確かに少ない数ではあるが戦いの最中に第一波がくるなんて聞いたこともないぞ。

それに今の敵数でも手一杯な状態なのに……後数百体でもきたら一匹か二匹ほど取り逃がすやつがでてしまうかもしれない。

だがしかし、次に聞こえた悲鳴のようなオペレーターの報告に俺たちは今までの戦闘はまだ余興だったことを思い知られる。

「敵数捕捉しました！その数

お、およそ1200……！」

「チツ……！？」

そして報告と同時に前線のほうからこすり方に向かって侵攻していく、空を覆いつくすかのようなアグレッシンの大群が視えた。

そして地獄が始まる。

第一十四話 そして地獄が始まる。（後書き）

これにて第三章 act1 は終わり、引き続き act2 が始まります。
完結まで残すところおよそ 6 話！ぜひ最後までお付き合いください！
次話投稿は早ければ月曜日です

第一一十五話 「つて、女!？」

「ま、まじかよ……」

作戦残り時間はおよそ一十分。

後もう少しどこかでの第一波。

しかもその数は第一波の一倍以上。

その報告に戦場の者が全員呆然とするのも無理はない。

「ちよ、ちよっと！ 何よあの数！？」

「まさか第一波がくるなんて……！ それもこんな数の……」

青い空を塗り替えるようにどんどん押し寄せてくる黒い空の正体はまぎれもなく、アグレッシンだ。

予想もしていなかつた事態に俺たちは戦場にいることも忘れ、ただ見上げる。

「……こつや他の一年を待機させていられるほどの余裕はないわけだ」

ただ事実を述べた言葉とともに乾いた笑いが零れる。

……どうやら絶望に陥つた人は笑えるといつのは本当らしいな。

他の戦場のやつらも果然と絶望の田で空を見上げる。

そこにはもう青空はない。

「狙撃部隊、何をしている！ 早く上空の敵を打ち落とせ！」

突如戦闘音が消え去ろうとしていた戦場に、敵の第一波の報告以来何の音沙汰もなかつた通信機から怒声が響く。

それは入学してからはじめて聞く狼火のいつもの「冗談や飄々さが一切混じっていない、本気の声だつた。

そしてその声からしばらくすると後方から狙撃部隊の射撃音が再び鳴りはじめる。

「前線！ 貴様らがボケツとしていてどうする！ そんな暇があるなら敵の一体でも仕留めて見せろ！！！ そして今後衛のやつらは直ちに前衛に移れ。最終防衛ラインも待機だつたやつらを配置せらる。いいな？ 死にたくなけりやさつさと動け！！」

「うよ、了解！」

怒涛の勢いで指示を出し始める狼火に静まり返つていた戦場はまた騒がしくなり始める。

……つてか怖えええええ！

「こんなに叫び散らす狼火は初めてだが……普段の三倍くらい怖いな。

立ち向かつたら口を開く間もなく殺されてしまうかと思つくりいだ。

……まあ狼火のおかげで混乱に陥りそつだつた戦場が統一されたのも事実だけど。

「取り乱したりしてしまい申し訳ございませんでした。サポートを再開します」

不甲斐なくも狼火の怒声にビクビクしていると先ほどまで情報を伝えていたAチーム担当のオペレーターの声がした。

上空のアグレッシンが効率よく落とされ、それによつて前線の戦闘音がさらに激しくなり始めているあたり他のオペレータも狼火の一聲で我を取り戻したらし。

それでもいまだに動搖は消えではおらず、戦場に余韻をのこしたままだ。

「先ほど狼火先生の指示によりあなた方Aチームも前衛になりました。前線では今までとは違ひ何体ものアグレッシンを同時に相手にしなければならないので私が伝える周囲の情報を聞き逃さないでください」

前衛か……。

どこか動搖を隠し切れず歯切れ悪く喋るオペレーターの言葉に俺は不安を覚える。

「ではこれより速やかに移動してください。もう第一波との戦闘も始まっています」

「了解」

俺たちはブレイカーを腰ホルダーから取り出し、いつでもアグレッシンに対応できるようにして走り始める。

凛華も香奈も俺を追つようついてきている。

作戦残り時間はおよそ十五分。

その十五分を耐え切れば後は本部のリベンジャーたちがどうにかしてくれるだろうが……

(大丈夫なのか……?)

先ほどとは違い、無傷のアグレッシンたちを何体も、それも同時に休むことなく戦い続けることになる。

そんな過酷な状況下で凛華や香奈は無事でいられるだろうか。

そして……

俺はバーサーカーシステムを使わずに戦いきれるのか。

その不安は前線に到着するまで拭われることはなかつた。

前線に向かいはじめてから数分。

途中何体か前線から抜け出してきた無傷のアグレッシンをみたが、一刻も早く前線に参戦しないとならないため、戦闘はせずにそいつらは後衛のやつらに任せることになった。

正直かなりの不安も残るが今は後衛たちを信じるしかない。

そうして走り続けた俺たちが前線の最後尾に到着したとき、そこは地獄だった。

「これが戦場……なのか」

思わずそう感じてしまつほどその光景は酷かつた。

何かの叫び声や体のどこかを負傷したと思われる者が呻き声をあげており、そいつらをアグレッシンから庇つように他の者が戦っている。

無論、無傷の者などはない。

しかしそれでも戦闘続行不能と判断され、使用許可が下りたT-SAに乗った医療科に回収された者達の分までアグレッシンと戦おうとする三、四年の先輩達の実力はハンパじゃない。

個体によつては十数メートルくらいはあるアグレッシンたちを何体も同時に相手にしているその姿はもはやアニメのバトルシーンなのではと思わせるほどだ。

しかしそんな現実離れしたこの場において嫌でも一番田に入るものが、唯一現実だという証拠　　血だ。

コアを破壊されたアグレッシン、戦場を駆け巡る先輩達、そして負傷が酷く医療科の助けを待つてゐるもの。

それらの周囲には常に紅い血が舞つており、生々しく、戦場の至る所に血溜まりがある。

そしてその血の多くは恐らく人の血……。

ええい、周りを見回すのはやめだ。みていろと吐き氣がする。

「うつ……」

少し遅れて俺の後ろにやつてきた香奈が口を押されて座り込む。凛華も座り込みはしないまでも眉をしかめている。

「お、おい香奈。大丈夫」「

「敵一体高速で接近してきますー！」

「つえ？」

座り込んだ香奈立ち寄りうつとした直後だった。

オペレーターの声に振り向いたときにはもう遅かった。

振り返った俺と凛華の目の前には黒い霧のようなもので身を纏つた狼の形状のアグレッシンが間髪いれずに襲い掛かってきた。

「なー? しまつ……」

すかさず対応しようと思つたときにはアグレッシンの牙が目前。

(避けきれない !)

直感で感じたその瞬間、まるで時が止まつたかのようにアグレッシンは牙をこちらに向けたまま空中で固まつた

「な、なにが……？」

無防備の獲物を目の前にして止まった？

それもこんな不自然に……いや、違う。

よくみてみると何かワイヤーのような細いもので拘束されている。そして周りを見渡すと同じように何体ものアグレッシングがその場で無理やり固定させられている。

「ワイヤー……固定……一 まあか！」

「ちよつとキミー、なにボケッとしてんのよー、死ぬわよー！」

そのワイヤーの主から通信機越しに怒鳴られる。

（や、やつぱりこれは序盤で戦況を変えた上級生徒の一人だ）

まあかこんな形で知ることになるとは……まあやつぱりブレイカーでこんなレベルの高い技ができるのは力がある男だよな

「つで、女！？」

「やうだけどそれがどうしたのよ？」

つっこみで口に出してしまった驚愕の声にワイヤーの主……否、女性は平安と答えた。

第一十五話 「って、女！？」（後書き）

今週テストがあるため次話更新は遅れます

第一十六話 「キーノードですね自らのやう」（前書き）

なんとか更新間に合いましたへへ；
それと戦闘が文字数の関係で少し駆け足になつてしましました（汗

第一十六話 「キラリと輝く白あらぬ」

（ちょ、まじで女だつたのかよ…？）

世の中には男でも語尾に「なのよん」とか「うつふうん」とか付けるどう考へても誤つた人生の道を逝つた人もいる。しかし今の声質は確かに女性だつたし今本人が認めたのだ。

女性であることに間違はないだろ。

……でもまさか例の一人の上級生徒の片方が女だつたなんて。

（いや、確かにありえない話ではないがそれでも普通は男つて思うだろ！ つてか思うよね！？）

と、誰にかもわからない言い訳を一人していると凜華が香奈を支えながら拘束されている敵に視線を向ける。

「日向、早く今のうちこそいつをやらなこと

「あ、ああそудだな」

その声に我を取り戻し俺はブレイカーを起動させ

「あ、ちょつとキミそこそこると血あびるよ

「へ？」

ワイヤーの主からの予言めいたものが聞こえた次の瞬間、目の前

のアグレッシンの「アガ外殻である黒い霧」と砕け散った。

そして見事に予言のとおりにその血の一部が俺にかかつってきた。

……最悪だ。本当に。

「一年だろうがなんだろうが戦場に立つたなら働け。それともただ突つ立つていいだけなら邪魔だ、さつさと死ね」

「ツー！」

砕け散ったアグレッシンの肉片から現れた男……“戦況を変えた二人”のもう一人は俺たちを一瞥する。

その手には拳型のブレイカーが装着してある。

「ちょっとお、それはいいすぎじゃない？」

「ふん、ホントのことを言つたまでだ。それよりも喋つている暇があつたら次の敵を拘束しろ」

「はいはい」

例の二人はどこか緊張感のない会話をすると。しかしその間も女はワイヤーで拘束を、男は拘束されているアグレッシンを次々と破壊していく。

……なんつう連携だよ。

対多戦や相手の行動を制限するのに特化したワイヤー系の武器で敵を拘束、そこを単体戦が有利な拳系の武器で確実に潰していく。

一見誰でもできそうな考え方そんな連携技かもしれない。が、同時に何体も敵を拘束しさらにそのスピードに負けない速さで敵を破壊

していくのを途切れなくやつていいなど尋常じやない。

「ここまで完璧な連携はまず互いを信じきつてなければできない。

「これが前線なのか

レベルの違い差に思わず息を呑む。

こんな戦場^ばで俺たちにすることはあるのだろうか。

先ほどの男の言つとおり返つて邪魔になるのではないだろうか

「前方より新たな敵接近。迎撃してください」

「……考^かえてる暇はないってか」

オペレーターからの容赦ない情報に苦笑を滲ませながら凛華たちにも知らせる。

「香奈^{かな}いけるか?」

「は、はい。もう大丈夫です」

「よし、じゃあ俺たちは今までどおりこいつ。ここのみな凛華

「ええ。それが一番ね」

凛華も満足げに頷く。

「よし、いくぜ!」

ブレイカーを握り締め、気を引き締める。

無傷のアグレッシンは初めてだが、どうにかなるだろ?。

そう信じて俺たちは向かつてくる敵を迎撃つ。

形状はさうやう先ほどの狼のよつなやつと回じで、黒い霧を纏つてゐる。

「そのタイプのコトの位置は首の下あたりです」

オペレーターの言われたとおりに見ると、確かにコトアリしそものがあつた。

「了解。それじゃ香奈は後ろから援護を。凜華は銃でやつを牽制してくれ

「その間にあんたがあこつを仕留めるの?」

「まあできればな」

「ふうん……」うつとせだけはかつ」」いんだから

「ん? なんだ?」

「な、なんでもないわよつー。とにかく危なくなつたら逃きなさいよね。これ命令つー」

「? わつ

少し氣にはなるが……さうやうそれを聞い詰める暇はないらしい。

「たあつ」

後ろから香奈の威勢のいい声とともに炎を纏つた矢が敵に向かつて飛んでいく。

それを敵は横に跳んで交わし、纏つていた炎による追撃にも冷静に対処する。

「おいおい、傷有りと無しじゃ」」まだ違つのかよ……」

その速さは先ほどまで戦っていた芋虫など比ではない。

じわりじわりと自分の中に恐怖が広がつてくるのがわかる。

正直倒せる自信はない。

そしてどうやらそれは他の一人も同じらしい。顔つきに余裕が全くない。

「こんどの何であたらぬのよー」

すばやく動き回る敵は速度を上げながら凛華に突進する。凛華もなんとか銃で応戦しようとするが、焦つていいのか一発も当たらない。

「あやあー?」

「凛華!」

「だ、大丈夫……」

左に飛び退いてなんとか避けた凛華に駆け寄ると、言葉とは裏腹に左足首を押えていた。

「おい、もしかしてお前……」

「た、ただ捻つただけよ! それよりもくるわよ!」

凛華の指示のとおり、振り向きやまに刀を振るつ。と、ちょうど突っ込んできた敵の体と衝突した形になつた。

間一髪、敵の牙は目前で止まり、頬が切れ血が顔を伝つだけで済む。

「ぐつー!」

その事実に恐怖を覚えつつ刀を下にざらし足を切断しようとするが、思ったよりも敵の力が強く逆に押し返される。

「へんつー。」

「田向さんー。」

俺が攻撃を防ぎきれなくなり、止めを刺そつと敵が飛び上がったところを香奈の炎が襲つた。

「わ、悪い。助かった」

避けきれず炎に包まれ、奇怪な悲鳴を上げてゐるアグレッシンから一旦距離をとる。

思った以上に敵がすばやく、全くこいつのペースにもつていけない。

(こいつセレナつたら一気にコアを破壊するか?)

ならば炎で動きを封じられた今がチャンスだ。

「よし、凛華。一人で一気に接近してコアを破壊するぞ!」

「わ、わかったわ!」

凛華は一瞬何かに我慢するような顔をした後すぐに敵に向かって走り出す。

俺も刀を片手に敵との距離を縮める。

敵も俺たちの接近に気づいたが、炎をせいで動きがかなり鈍い。

「はあつー。」

敵がふらついた隙に凛華の双短剣がのど下めがけて突き刺される。

ガキイとなにやら金属がぶつかり合つよつた音がし、コアにビビ^{ビビ}が入る。

「やつた……」

「おい、凛華^{凛華}氣を抜くな！」

アグレッシンは完全にコアを破壊しないと死なない。
ほつとした凛華の顔に次の瞬間敵の前足の鋭利な爪先が襲い掛かる。

「嘘ツ！？」

爪が顔に触れる寸前で凛華はなんとか後ろに飛び退く。

「おおおおー！」

そして凛華が飛び退くと同時に俺は刀をコアに突き刺す。

数秒後、パリン！ というガラスが割れたような音とともにコアは砕け散った。

「田向さん大丈夫ですか！？」

アグレッシンを包んでいた炎が消え、香奈が心配そうに近寄つてくる。

恐らく香奈のところからだとアグレッシンの攻撃が俺に当たつたうに見えたのだろう。

「俺は大丈夫だ……それよりも凛華が」

「凛華^{凛華}……ツー！」

俺の姿にひとまず安心した香奈は凛華のほうに田^田を向けたとたん

言葉を失つた。

なぜなら凛華の左足首から溢れんばかりの血が流れているからだ。

「凛華さん大丈夫ですか！」

「え、ええ。まあね」

我に返つた香奈を安心させようと凛華は無理やり笑みを作る。

「凛華、お前やつを捻つたてのは……」

「やつちはホントよ」

ばつの悪そとにする俺に凛華は「だけど」と話を続ける。
「さつき後ろに避けよつとしたときに左足だけ反応が遅れて……」

「まさか直撃したのか？」

「いいえ、かすつただけよ」

やつじつて凛華は「ほり」と押されてくる手をだけ傷口を見せて
くる。

しかし手をだけた瞬間凛華の表情は引きつり、呼応するように傷
口から血が流れる。

「お、おいつ！ 全然大丈夫じゃねえじゃねえか！？」

「う、うるさいわね……」れぐらい大丈夫よ

そういうて立ち上がりやつとするが、すぐにふりつき香奈に支えら
れる。

「凛華さんこれ以上は無理ですよ」

「そうだ、香奈の言うとおりだぞ」

「うつ……で、でもまだやれるもん！」

お前は意地を張る子供か。

「いまだに鬪志だけはあるらしい凛華に俺はため息をつく。

「はあ……頼むから医療科のやつがくるまで大人しくしてくれ。じやなきや俺が戦えないだる」

「……それってどういう意味よ?」

俺の最後の言葉に凛華が首をかしげる。

「……できれば言いたくないんだが。

「だから……お前がそんな状態のままだと気になつて戦闘に集中できないつての!」

「きつ、気になるつて……」

半ばやけくそ氣味に言つた俺の言葉に凛華はびっくりしたような顔をする。

氣づけば香奈も驚いたよつてひからを見ていた。

あかん、超恥ずかしい。

やつぱり普段言わないことは言つべきじゃないな。

「とにかくだ! 今オペレーターに医療科のやつ呼んでもうつから大人しくしている」

「わ、わかつたわよ……口向がそんなに心配してくれてるんなら……」

「」

凛華が最後そっぽ向いてなにやら言つたよつだがよく聞こえなかつた。

まあいい、とりあえず医療科を呼ばないと。

幸いにも今は周りに敵がないので（恐らくあの一人が殲滅したのだろう）オペレーターとの会話はスムーズにいった。

「よし、三分後くらい到着するらしい。それまでは大人しくしてろよ」

「ん……」

いきなり大人しくなった凜華を不思議に思いつつ、俺は一息つく。
しかしここからが問題だつた。凜華が戦えなくなつた今このあたりは俺と香奈しかいない。

たつた二人きりで残り十分弱を乗り越えられるのだろうか……。

第一一十七話 「…………ねやあみなわこ…………」（前書き）

「田更新が遅れて申し訳あつませんでした」（――）

第一一十七話 「……おやすみなさい……」

「左方から一体、前方一体、後方一体きます」「つ！ あと少しのところで敵かよ……香奈は後方を頼む」「わかりました！」

オペレーターが伝えてきた情報のとおり敵が見えた。

数分前、医療科に通信を入れ制服の切れ端で凛華の怪我の止血をしていたときは周りには敵影一つ見えなかつた。しかしそうぞう回収班が到着するといつときに予想外の敵襲ときた。

しかもそのほとんどが凛華に狙いを定めているようだ。

回収班が到着するまで俺たちが守るしかないだろつ。

「やあつ！」

状況が状況なためか香奈はブレイカーを手から背丈ほどどの槍に変えて後方の敵に襲い掛かる。

とはいえた今はあくまで凛華の安全が最優先のため深追いはしない。

あの調子ならあれば香奈に任せといて大丈夫そうだ。

となると残るは左方と前方。さてどうするか……

「田向！ 左方は私に任せて」

「凛華！？ だから戦うなって言つてい……」

「銃一つあれば足止めくらいはできるわ」

俺の言葉をさえぎつて言つた凛華は返事も聞かず敵に発砲を始め

る。

今凛華の周りは香奈の炎で囲むように盾を張つてある。正直任せていいのかはわからないが三体同時は俺も無理だ。

それに怪我も今のところ悪化してはないみたいだし、こぞとなれば炎の盾が守ってくれるだろ？

俺はとつあえず凛華に左方を任せ前方の敵に意識を向ける。

一体は先ほどと同じオオカミ。

もう一体は物語の竜を思わせるような形状をしている、言わばドラゴンか。

こいつはアグレッシンの中では一番多く見られる形状で、大抵のやつが10㍍にどぎきそうな巨体と並外れた破壊力をもっている。

この一体を同時に相手にしなきゃならないのか。

本来ならまずオオカミを確実に始末してからドラゴンなのだろうが……オオカミをやつていてる間にドラゴンが凛華のところに辿り着かないという保証はない。だからこれは駄目だ。

(なら)

俺はオペレーターに敵予測進路を確認し、その進路上、すなわち敵の真正面に立つ。

そしてブレイカーを起動させ、抜刀の構えをとる。

さらに敵が俺に気づいてもなお、その進路を変えないと確かめてから、目を閉じる。

そのままタメをつくりつつ、意識を集中し、“とあるイメージ”をブレイカーに注ぎ込む。

ブレイカーもそれに反応するように輝きを発する。

イメージすることはただ一つ。

斬撃から生み出される衝撃波

!!

「はあっ！」

溜められた集中力とタメによる抜刀により、刀は超速で空を斬り、次の瞬間、それは起きた。

ほぼ水平に振るわれた刀の軌道を中心に、空気が振動を始める。それはすぐさま形を定めないまま、斬撃の威力をもつた衝撃波と成す。

振動を続ける衝撃波はそのままイメージ通り敵に向かつて一閃の如く大気を駆ける！

ブレイカーだからこそ可能な刀によるリーチ外攻撃。授業でもそんなんにやらなかつたが上手くいったようだ。

（後は二）の衝撃波でどれだけ敵にダメージを『えられるか……）

しかしその心配を消すかのように衝撃波は敵と衝突、そして爆発する。

イメージ通りに撃てたなら衝撃波は脚部にかなりのダメージを与えているはずだ。

（どうだ？）

朦々と砂煙が舞う前方を祈るように見据える。

やがて舞っていた砂煙は晴れ、敵の姿が現れた。

「敵脚部へのダメージを確認。軽傷ではありますが一体とも傷の修復のためしばらくは動かない模様」

「よしー！」

オペレーターからの報告に思わず拳を握る。

どうやら動きを止めるだけのダメージは『えられたようだ。オペレーターの言うとおり当分は動けないだろつ。

これで凜華に近づかせないという目的は達成できた。

「凛華、大丈夫か？」

「あたりまえよ！」

すぐに凛華の元に駆けつけるが、痛みに耐えながらも笑顔を見せる凛華の周りに敵はいない。

「どうやら」ちらも足止めに成功したらしい。

「凛華さん、田向さん大丈夫ですか？」

「香奈」

すると数秒もたたないうちに香奈が「どうに駆け寄ってきた。

「そつちの敵も大丈夫なのか？」

「ええ。今は炎に焼かれている頃でしょう」

「そ、そうか」

さらりと恐ろしい」とを言つ香奈に俺はたじろぐ。

いや、本人は事実を言つただけなんだらつけど……まさかそんな言葉がでてくるとは。ちょっと意外だ。

「よし、これで後は回収班を待つだけ」

なんとか危機を乗り越えたことに安堵したそのときだった。

突如遠くから大きなエンジン音と聞きなれた声がした。

「おおい！ 待たせたなあ！」

「トオル！？」

そう、サイドカーを取り付けたT-SAに乗っていたのは紛れも

なく、トオルだった。

「なんでお前がここにいるんだよ！」

持ち前の速さですぐに田の前に到着したT-SAの前部座席に座つているトオルに声をかける。

「武科のこいつは待機所にいるはずなのだが……

「私がお願いしたんです」

「し、雌ヶ崎先輩？」

ヘルメットをとつて俺の質問に答えたのは一ヶ月前、ジャステイス戦でお世話になった医療科の先輩だった。

「第一波がきてからは負傷者の数が多くて……医療科の人だけでは対応しきれなくなつたんです。しかし迅速な応急処置を施すため回収班を一人にすることはできません。ですからT-SAの運転をする前部座席を医療科以外の生徒にやつてもうつことになつたのです」

先輩は俺たちに簡単に説明をしながら凜華をサイドカーに乗せる。

「そこでの俺が志願したわけよ」

「お前がか……珍しいこともあるんだな」

「へつ、まあな……わざわざ荒っぽく運転したのに先輩が抱きついてこなかつたのは計算外だつたけどな」

「結局下心があつたのかい！」

くそつ、素直に感激した俺がバカだつた！

しかしそれでもトオルが自分の命を危険に晒してまできてくれた

のは確かだ。

……心の中だけで礼を言つておくか。

「ま、帰りは安全運転で頼むば」

「当然だろ！……先輩はビツセ治療で忙しだらつしな

「だから一言多い

「準備できましたよ」

俺たちが無駄話をしている間に凛華はサイドカーにしつかり固定され、先輩も座席に座つていた。

「了解しましたあ！ 運転中もし危なくなつたら俺で……

「いいから早くしてください」

後ろから叱られ肩をすくめるトオル。

すると凛華が申し訳なさそうな顔で手を覗いてきた。

「日向、香奈。迷惑かけてごめんなね……」

「そんな……私は大丈夫ですよ」

「ああ。別に迷惑なんかじゃないわ。それよりもひとつお詫びしてこ

い

「……ん。わかったわ」

俺たちの言葉に安心したらしく、それにつられて凛華は目を開じる。

疲れて眠つてしまつたのだろう。むしろあんな怪我をしておいてここまで起きていたことのほうがすごい。

「それじゃ俺たちは一足先に帰つていいるや」

「おや。先輩、凛華のことをよくしてくれてお願いします」

「もうろくな任せで

その言葉を最後にトオルはエンジンを入れる。

その後走り出すやすぐで100kmを超えたT-SAはもう見えなくなった。

「これで一安心だな……」

一つの難関を乗り越え、まつと一息つく。

……そう、気を抜いてしまった。

いや、正確にほんのひと時、ここが戦場であることを忘れた。

戦場での気の緩み。

それはほんの一秒たりともしてはならない、まつとも基本なことでもある。

そしてそれをしてしまったがために悲劇は起きる。

「田向さんッ！ 危ないッ！…」

俺が一息ついたまゝにその瞬間、香奈が悲鳴のよくな声とともに駆け寄つてくる。

なにが香奈をそんなに焦らせているのか。確かめようと俺は振り向く

「……え？」

そこには負傷した脚部を修復した跡がある、大きな前足の尖った鍵爪を振り上げている竜の姿があった。

竜との距離は無いに等しく、その鍵爪が俺のことを狙っていることは明白だった。

（なんだよこれ……まさか俺は死ぬのか……？）

そして鍵爪は俺にこの状況を理解する暇も『え?』と振り下ろされる。

そこからは全てスローモーションのよつに見えた。

俺はただ呆然とその場に立ち尽くし、横から香奈が走つてくるのがわかる。

振り下ろされてくる鍵爪は正確に俺の心臓部分を狙つており、もう避けきれないことがわかる。

そして鍵爪が大気を切り裂き、俺の体へと到達しようと

「日向さんッ！？」

刹那、俺の体が横から強い衝撃に押されたことによつてスローモ

ーションは解ける。

そしてその勢いに成されるがままに地面へ押し倒され、強く体を打ち付ける。

「つーなにが……？」

すぐ田の前に香奈の顔があることから、横から突き飛ばしてきたのは香奈だらう。

もし香奈が助けてくれなかつたら俺は確実に死んでいた……。

「香奈助かつ……ん？」

そしてふと自分の周りから、特に香奈を抱えている手元からべつとつとした感触があることに気づく。

「なんだこれは……」

恐る恐る香奈に回していく手を自分の顔へと近づける。

するとやつには少し暖かく生々しい、血がついていた……それもそこはじりじりに飛び散つている。

俺は起き上がり、香奈を膝の上に乗せながら呟く。

「血……まさか……香奈?」

たぶん頭のなかではこの血が誰の血なのか理解している。しかしそれでも俺は震えそづな声で香奈に呼びかける。

「おー、香奈。香奈？……香奈ー。」

「……田向……さん？」

三度田の願いにも似た叫びで、消え入りそつた声が返事をする。

「香奈ー よかつ 」

言葉は途中で息を呑む音に変わった。

香奈は胸……それも左胸あたりから酷い出血をしていた。

血でよく見えないが肩から胸まで引き裂かれた制服から見える傷口はかなり深く、鋭利なものに抉られたような傷跡がある。

「あやかさつき俺を助けたとき」「……」

「田向……さん……」

その傷跡の意味を理解し、なんとか止血しようとする俺に香奈は手を伸ばしてくれる。

「怪我は……あつません……でしたか……？」

そう言い、香奈は血に塗れた手を必死に伸ばして俺の頬を撫でる。

「……ああ

「やつ……ですか」

出すだけで精一杯な声でなんとか返事をすると、香奈は安心しきつたような、なにかやり遂げたような表情になつた。

「間に合つた……んですね

「……ああ

「田向さんを助けられた……んですね

「……ああ

「ひれでやつと……田向さんの役にたてた……んですね

「……………ああ」

「」か必死に、すがるよつてひづりを見てくる香奈になんとか応えれる。

田の前にいる香奈は見ているだけで痛々しいが、田を逸らしてはいけない。

「やうですか……なり……よかつた……」

もう一度俺の頬を撫でながら嬉しそうに笑う。

しかしどうみても香奈は息をするだけで辛そうだ。

「ああ……なんだか……眠くなつてきました」

「…………香奈？」

何回か頬を撫でていた手は止まり、香奈の田が虚ろになつてゆく。

「」めんなさい……ほんのすこしだけ……眠らせてください……

「つー、まさかお前」

“死ぬんじやないだろつな？”その言葉が続く前に香奈は一言、

「…………おやすみなさい……」

やうこそ田を閉じた。

「香奈？」

嘘だろ？

「おこ、香奈ー。」

田を開けろよー。

けれど香奈が田を開ける気配は一向にない。

(なんで、なんで)「んな……ー。」

「香奈あああああーー。」

悲痛な叫びが、戦場に響いた。

第一一十七話 「……おやすみなさい……」（後書き）

「ちょっとした次回予告へ

日向を助けた代わりに瀕死の傷を負つた香奈。

だがここは戦場。

こちらの都合もお構い無しに傷を修復したアグレッシンたちは日向に襲い始める。

しかし日向は香奈を片手で抱き、一言狼火に告げる。

「今すぐ前衛のやつらを撤退させや」

「……なに？」

「聞こえなかつたか？ やつらを殺すのに他のやつは邪魔だと言つてんだよ」

そして狂戦士は舞い降りる。

次回第一八話！ 日曜日更新予定！

次話の内容は予告の内容と少しズレル可能性があります

第一十八話 「償え」

「くそつー。」

だいぶ出血も止まつてきているのに香奈は目を開けない。傷は左肩から胸の手前あたりまであり、特に肩付近の傷は深そうだ。

なんとか息はしているが意識が無いこの状態は非常に危険だらう。

（俺が油断したばっかりに……）

もしもっと周囲の動きに気を配つていれば、少なくとも敵の接近は気づけたはずだ。そしてかわすことも。そしたら香奈がこんな目に遭つこともなかつた。

（また、俺のせいなのか）

「おい成富！ 何をボケッとしている。敵は待つてはくれないぞー！」

通信機から怒声が響くも俺の耳には届かない。

（そもそもあいつらが……あいつらかわいなれば……！）

そうだ、あいつらをえこなればいいのだ。ならば俺が成すべきことはただ一つ。

「」の事態のそもそもの「元凶」、アグレッシンへの復讐。

そう思つた瞬間にあふれ出した、殺意にも似た感情。

それは今まで抑え込んできた兵器を呼び起^もす引き金となる ！

「狼火、聞こえているな」

「……ほつ。もちろん聞こえているぞ」

呼び捨てだつたにもかかわらず狼火は気に留めずに答える。むしろ何かに気づいて楽しんでいるようでもある。

「今すぐ前衛のやつらを退却させろ」

「なぜだ？」

「流れ弾で人を傷つければ意味がないからだ」

「本当にそれだけか？」

「……戦うのに邪魔だからだ」

「そうか。それは確かに退却させたほうがよさそうだな。だがその前にお前はそれまで待てるのか？」

「」いつ、さてはカメラか何か使って今の俺の状況に気付いてやがるな。

俺は小さく舌討ちをする。

「30……30秒だけだ。それ以上抑えられる自信はない」

「……そうか。釘を刺すようだが本部のリベンジャーが到着するまで後5分。それまでだからな。覚えておけよ」

そこで通信は切れた。

恐らく指示を飛ばすためだろう。

「……30秒だけだ。それまで待て」

香奈の容態を確認しながら自分に 体の中にいる細胞兵器に言
い聞かせる。

迎撃戦が始まってからすぐ、システムが起動し始めたことには気付いていた。

だが凛華たちの手前といふこともあり、ここまで抑えていた。もつとも、ただ“発動するな”と思うだけのことだが。

しかし今は抑えるのが非常に辛い。

別に今発動しても凛華も香奈にもバレないとか、そう簡単な話ではない。

たぶん俺がやつらを殺したいと……システムを発動させたいと思つてしまつたからだろ？

けれどだからといって発動させでは仲間に危害を加えないといつ自信はない。

だからこうして唯一システムを知っている狼火に頼んだのだ。

（人を傷つける可能性があるくらいなら30秒くらい耐えてみせる
ぞ……）

しかし右方からちょうど脚の修復が完了したらしいオオカミ型のアグレッシンが俺に襲い掛かってくる。

……やはり狼火の言つとおり敵は待つ気などないらしいな。

さつきまでの俺だつたら一人で戦つても勝てなかつただろう。だが今は違つ。

俺は苦しそうな顔をしている香奈を優しく抱きかかえながら静かに立つ。

そして香奈を片手で抱きながら右手でブレイカーを持ち、起動。そのままなんの警戒もしないで迫つてくる愚か者に向かつて刀を振り上げる。

「30秒後だ……それまで貴様らも黙つていろ」

その言葉とともに振り下ろされた刀はちゅうど襲い掛かろうとしていたアグレッシンをコアジと斬り、破壊する。

それによつて他のアグレッシンたちは何を思つたか、同じく攻撃しようとしていた動きをぴたりと止めた。

（……攻撃を諦めた？）

しかしこいつらがそう簡単に引き下がるわけがない。
一体なぜなのか……

そのとき、小さくだが確かに遠くから地響きの音が聞こえた。
それも四方八方からだ。

やがて姿も見えるようになり、先ほどの疑問は解決される。
「アグレッシンか……」

そう、それは数百に上るアグレッシンの大群だった。

狼火の指示によつて俺以外の前衛は退却したはず。ならば敵を見失つたアグレッシンどもが残る俺を狙つのも当然のことだろつ。

そして今俺の周りにいるやつらはそれにいち早く気付いた。だからこそ、して俺を確実に仕留められるよう仲間の到着を待つてゐるといつことだ。

だがそれは俺にとつてもちよつといつ。

これで30秒稼げる。それもあるがもつと大きな理由が一つ。

一度に多くのアグレッシンを相手にすむことができる。

「それでこそ殺し甲斐がある…………！」

必死にシステムを抑えながら俺は咳く。

それから沈黙が続き、ほんの数秒がたつたとき。

突如アグレッシンの一體が吠えながらこちらに向かつてきた。

どうやら我慢を止めたそいつは見間違えようもない、香奈を負傷させたあのドラゴンだった。

「30秒まであと3秒……開幕の生贊としてはひどいが……

香奈を横にゅつぐつとおろし、俺はアグレッシンのほうを向き田を開じる。

残り3秒。

そして俺は、問う。

「さて 貴様、誰の許しを得て生きている?」

もちろんアグレッシングが答えるはずがない。

2秒。

しかしそれでも言葉を続ける。

「貴様はやつてはならない」とした。そんな貴様がこの大地に立つていいはずがない

1秒。

俺はゆっくりと目を閉じたまま刀を振り上げる。

「ならば貴様が成すべきことはただ一つ。貴様の命をもつとしてその罪を」

閉じていた目をゆっくりと開く。

その瞳は怒りと復讐で染められた、真紅の瞳だった。

そして0秒。

「 償え」

次の瞬間、振り下ろされた刀から桁外れの威力をもつた斬撃が大気へ放たれ、目前のアグレッシンを襲う。

音速で放たれた斬撃は衝撃波を纏いながらアグレッシンの硬い外殻を一瞬で、正面から斬り裂いてゆく。

さらにアグレッシンの内部で衝撃波が分裂し、爆散。

まさに叫ぶ暇も与えられずにその巨体を切り刻まれたアグレッシンは、細かな肉片と大量の血の雨を残して目の前から消えた。

「さあ……」

血で紅く染まつた刀を指でなぞりながら、血に飢えたような獣のように、叫ぶ。

「殺し合いの時間だッ！！」

それを合図にアグレッシンたちも一斉に襲い掛かってくる。

そしてほんの数分だけだが、“数百のアグレッシン対一人の狂戦士”という、異常な戦いが始まった。

第一十九話 「最後の宴といひつけーー！」

「はあああッ！…」

ドラゴン型が始末されたのを起爆剤に、周りの数百のアグレッシンたちが一斉に襲い掛かってくる。

それに対しても俺は、ただ体を一回転させるように刀を振る。ハ。

即座にブレイカーから飛ばされた斬撃は、刀の軌道上の敵をまとめて真っ二つにする。

そして時間差によつて生まれた衝撃波が俺と香奈を中心とした竜巻となり、外へ広がるように全方位の敵を捉え、捕縛し、押しつぶす。

「ははは……あははははは！」

次々と粉々になつてゆくアグレッションを見ながら俺は笑う。

時間にしておよそ2秒。

そのほんの一瞬で生み出した攻撃は、一気に百を超えるアグレッションを殲滅した。

（前とは全然違つ……！）

敵の位置、数、そして各個体それぞれの行動予測。香奈には一切当たらず攻撃するには刀をどのように振るい、どのタイミングで

力を入れればいいのか。

全てわかる。

戦闘における全てのことがこの真紅に染まつた瞳に映され、そして感覚として脳へも伝わってくる。

この衝撃波による全方位一斉攻撃も、システムがなければできな
い基盤だつたう。

システムがこの戦場の全てを俺に伝え、俺はその指示を元に動く。
そして戦闘面においてバーサーカーの俺にやれないことはない。

初めて味わうシステムとの一体感。そしてその威力。

俺の周りのアグレッシンは残り約三百七十体。

その全てを残りの作戦時間で殺しきれる。

そう思えるほど、バーサーカーシステムは強い。

「さあ……体に血を一滴たりとも残すな！ その血で大気を染め、
そして華やかに散つてみせろ！…」

残り数分間、存分に楽しませてもらひや…

「ようやく発動したか」

焰香奈の通信機に内蔵されているカメラで一部始終を見ていた狼火はため息混じりに呟く。

目の前のモニターにはシステムを発動させ、バーサーカーと化した成宮の姿がある。

その戦闘能力は前のジャスティスのときより格段に上がっている。

そしてあの真紅の瞳……

「システムの力を引き出せているようだな」

システムの力を全て引き出すには一つだけ必要不可欠なものがある。

それが復讐心、または殺意だ。

その意思をシステムが感じとったとき、初めてシステムの本来の力 戰場の全ての情報を把握できる圧倒的な力を引き出せる。

逆に人が相手だったらシステムの力を引き出すのは難しいと言える。

だからジャスティス戦のときはできなかつたのだろう。

なによりあの真紅の瞳こそがシステムを完全に起動させている証だ。

「ここにきてあの状態になるとは……」これは本部のリベンジャーもいらないかな?」

狼火は苦笑を滲ませる。

圧倒的な戦闘能力の向上。

この『ただの一般人でさえ超人にしてしまつ』ところがこのシステムの長所であると同時に短所でもあるのだ。

正常な人が持てばなんの問題もない。が、これがもし人を殺すことになんの躊躇^{ためら}もない者が手にしたらどうなるか……この先は言うまでもあるまい。

だからこそ成宮の父は、あの人はシステムを作ることを中止するとともに禁じた。

このバーサーカーシステムを、究極の殺人兵器にしないために。

「……ま、この映像を見れば誰でも禁止にするよな」
画面の映像に映る成宮の姿。

それは全方位から何十、何百と襲い掛かってくるアグレッシンたちを一人で次々と生き者にしていく、本来ならありえない光景。

まさしく、復讐^{バーサーカー}と殺すことに餓えた狂戦士の姿だ。

「ホント、あなたのせいだ」こつはとんでもない化け物にならうとしていますよ……成宮さん

あの日に初めて出会った、あの男のことを思い出す。

狼火の名が有名になるきっかけとなつたあの迎撃戦。初陣で緊張していた狼火に声をかけてきた男 それが成宮の父だった。

その後連絡先を知り、その日の電話で初めてバーサーカーシステムのことを知った。

もちろんその“オリジナル”を自分の息子に投げたこと、そしてその理由も。

しかしその次の日には連絡が取れなくなり音信不通。

そして気付けば息子の成富日向が入学してきたのである。

しかも成富日向のデータを見たら父親は行方不明と書かれていた。

（本当に不思議な人だ……）

いつたい今頃どこで何しているのか。

知りたい気もするが、それよりもまずは手伝うことになったあの人の計画を進めなくてはならない。

「実戦によるシステムの起動。そして真紅の瞳……もう第一段階まできたか」

誰に向けるでもなく狼火は一人、静かに呟いた。

「……さあて、そろそろ締めに入るか」
衝撃波による攻撃を止め、周りを見渡す。
作戦残り時間が3分を切った。

“作戦”という概念をもたないアグレッシンたちは、何度も前で仲間が殺されようが無鉄砲に突っ込んでくる。
だからこのまま衝撃波の攻撃を続けていても勝てるわけだが……
それではつまらない。

「やっぱ戦いはもつと楽しまなきやなあ！」

瞳に映し出される敵の残り数は一十体。

戦法を各個撃破に変えても十分香奈を守れる数だろう。

（なら）

「存分に暴れさせてもらおうか……」

叫ぶと同時に一番近い左方の敵に突撃。

タイプはオオカミ型。

敵もこじらに気付いたようで持ち前の素早さで鋭い爪を突き出してくる。

「……ひやはつー」

それをまず刀の腹で受け流すように回避。その勢いのまま体を捻りながら宙返りし、敵の背後に降り立つ。

敵が驚いて後ろに振り向いたときにはもう遅い。

魚の解体のように体を撫でた刀が既にコアを切断し終え、アグレッシンはそのまま地面に崩れ落ちた。

「さあて、次の相手は――」

次の獲物を決めようと視線を泳がせると、残りのやつらが束になって一斉にこちらに向かってきているのが見えた。

残り十九体のうちオオカミ型が六体、芋虫型が五体、そしてドーラゴン型が八体。

それも横たわっている香奈を無視して、俺にだけ狙いを定めて。

(衝撃波を封印してこの数を相手にするのか……できるか?)

俺は考えようとしたが、すぐにやめる。

「……いいねえ、いいねえ！ やっぱ戦いはこうでなくちゃ面白くねえッ――」

そう、今さらバーサーカーを抑えることは不可能なのだから。

作戦残り時間2分。

「最後の宴といこうぜ！――」

迫りくる足音に答えるように吠え、大群のなかへ向かって駆しる。

バーサーカーの圧倒的な身体能力のせいいかやつらが速いのか、あるいはその両方か。数百メートルもあつた距離はものの数秒で縮まる。

敵の射程距離に入ると同時にオオカミ型が三位一体で突っ込んでくる。

「まだまだあー！」

それを上空に高く飛び上ることで回避。勢いを殺すこともできず、ぶつかり合つた三体を着地と同時にコアを破壊。

そのまま動きが鈍い芋虫型を素早く始末する。

残りオオカミ型が三体にドラゴン型が八体。

「もつとだー！ もつと戦えるだろー！」

それに応えるようにドラゴン型が襲い掛かってくる。

やつらの攻撃はかすつただけでも致命傷になるだろー。

そのドラゴン型が前後左右で八体も迫つてているのだ。普通なら恐怖に怯えるところだ。

（だが ）

バーサーカーの俺に恐怖などない。あるのはただひとつ。

「ああ、この緊迫感……最高だ。楽しすぎるッ！」

まずは左方からの体当たりを横にサイドステップして回避。そのまま刀の柄をバトンのように指で回転させて受け流し、最後に首を切断。

これで一体。

間髪いれずに前方からきた敵の噛み付きを刀の腹でガード。そのまま刀の柄をバトンのように指で回転させて受け流し、最後に首を切断。

これで恐らく自分の間は動けないだろう。

次に左方と後方から一體同時に俺を押しつぶそうとしてくる。

それをステップを踏むように避けた後、一気に接近し即座に二つのコアを破壊。

これで三体。

これでまずは一段落か……しかし間を空けずに翼を修復したらしい一体が上空から飛来し、ミサイルのように頭から突っ込んでくる。

「ツ！ ははっ、これは休む暇もねえなあ！」

セリフとは裏腹に楽しそうに叫ぶ俺は敵を迎撃つように跳躍。後衛のときに芋虫型にやつたことを応用し、敵とぶつかる寸前で体を捻りながら敵を一刀両断。綺麗に解体された巨体は先ほど首を切られたアグレッシンの元へ落ち、お互にコアを押しつぶす。

これで五体。

さりにビセクセに紛れて飛び込んで来たオオカミ型の三体を手だけを動かして瞬殺する。

残るはドラゴン型三体。

俺は一回ブレイカーを待機状態にし、ホルダーに戻す。

（前方に二体。左方に一体……定石ならまずは左方の敵からだらうが……）

「問答無用！！」

バーサーカーの俺は当然のように前方へ……まあわかつてたからいいんだけど。

ブレイカーを持たずに迫る俺をやつらはチャンスと思ったのか、三体とも大地を揺らして突進してくる。

距離は瞬きしている間に縮まるが、俺は一向にブレイカーを出さない。

「やっぱ最後まで楽しまないとなッ！」

敵の前足が俺に届く直前に両手でその爪を捉え、そのまま爆発的な瞬間筋肉を使って前方宙返りをし翼を掴む。

アグレッシンは俺が田の前から消えたことで急停止をしたが、俺が乗っているのともう一体が止まりきれずに衝突する。

「よつと」

すぐに飛び降りた俺は空中でブレイカーを起動させ倒れてくる一体のコアを破壊。

これで七体。

「……わひと」

最後の一體が背後から噛みついてくるがそれを体を横に倒すことで避ける。さらに空を噛み切った敵の田を刀で突き刺す。

耳を覆いたくなるような悲鳴を上げ、のたうちまわる敵から一田離れ、作戦時間を確認する。

（残り時間は 10秒か）

恐らく次の攻撃が最後となるだろう。

かすかに遠くから本部のリベンジャーを乗せたヘリの音が聞こえることが何よりの証拠だ。

「まだ物足りない気もするが……まあいいだろう」

どこか不満げに呟きながらブレイカーで足元に衝撃波を起こし、アグレッシンの頭上へと飛翔する。

痛みから立ち直ったアグレッシンを見下すように見つめ、刀を背に持っていく。

「これで……」

そして地球の重力が衝撃波の浮上力を上回り、頭から一気に急降下。

その先にはアグレッシン……先ほどまでは数百体いた中の、最後の一體。

よつやくにじりに氣付いた敵に迷いなく振りかぶったブレイカーを敵の頭に叩きつける ！

「終わりだあああああ！！」

ズシャアアアアといつ快音とともにアグレッシンの血が噴水のように飛び散つてゆく。

その巨体が倒れていくとともに俺の中でシステムが納まつていくのを感じる。

そしてしばらくして静まり返った戦場に作戦終了の合図が鳴り響いた。

第一十九話 「最後の宴といひつけー！」（後書き）

次話、遂に完結……！！

「朝か」

軽快な風見みの音はたなき起これば
疲労で重たい体をくぐり
りと持ち上げる。

しばらくして頭が目覚め

まだ眠い目を擦りながら寝巻きのままキッチンへと向かう。

あの日からもう二日が経つた。

あの後、作戦終了の合図が鳴り響いた後のこととはあまり覚えていない。

気付けば俺は香奈を抱えて待機所に立っていて、医療科の人たちが香奈を急いで連れて行った。

その後治療の結果、香奈は一命を取り留めた。あと少し治療が遅っていたら手遅れだつたらしい。

しかし、まだに目を覚まさず、カルラが言うには大丈夫だそうだが……やはり心配だ。

「くああ～……ねむ

大きなあぐびを一つしてできた朝食を皿に盛り付ける。

学園は特別休暇ということで一週間休みになつており、昨日も一昨日も夜遅くまで香奈の見舞いに行つていた。

……まあ見舞いつて言つても、香奈が起きたときに誰か傍にいるれるよう隣で座つてゐるだけだけだ。

結局昨日も香奈が田を覚ますこともなく、帰宅した。

ちなみに凛華は「今田はこじで泊まる!」と言い出し、カルラにお願いして許可を取つてもらつていた。

「あ、そういうやケータイの電池切れてたんだ。充電しなきや」ふと思いつ出し、朝食を持つていくついでに充電器に差し込む。

しばらくしてケータイを起動させると時刻は十時を回つていた。

「うわあマジかよ……また田覚ましのセシト間違えたのか」昨日寝たのは結局明け方の二時くらいで、寝ぼけていたからだろう。

本当は七時に起きよつと思つていたので少々落ち込む。うん、やっぱ起きよつと思つてた時間に起きれなかつたときつて独特の敗北感だよね。

学園が休みでよかつたと思つてつーストをかじつてると、好きなアニメのOP曲とともにケータイが振動した。

開くと受信メールが一通あり、送られてきたのは一時間前だった。どうやら電池が切れていたから今送られてきたらしい。

開いてみると凛華からだ。

『件名 早く来なさい！！』

本文 <本文なし>

『<』

……主語がねえ。

まひるん、件名に書いているあたり急いで送つてきたことはわからぬ。

ナビニレジゼビに行けばいいのか全くわからないじやないか。

セヒビヒ返信したものかと迷つてるとまた受信メールが一通。凛華からでこれまた四十五分前のやつだ。

早速開いてみる。

今度はちやんと本文があつた。

『件名 <件名なし>

本文 早く病院に来なさい！ 香奈がお待ちかねよ

「香奈がお待ちかね……？」

じよりへ考へてから頭の上で電球が光る。

（とこつことはもしかして田を見ましたのか？）

だとすると行くべき場所は一つだけ。

俺ははやる気持ちを抑えながら急いで私服に着替え、医療科棟へと向かった。

「はあ……はあ……」

寝起きで、しかも一回も休まずに走り続けるとさすがに息が辛い。

だがおかげですぐに医療科棟に着いた。
久しぶりにみたが……やっぱでかいな。

ここは最新の医療機器を整え、医療科の生徒が学ぶ場でもある傍ら、この島でもっとも大きな病院もある。

そのため全科の中で一番でかいのだ。

香奈が入院している病室は確かにこの棟の三階のはず。

一息を整え よし、汗もだいぶ引っ込んだな。

大きな自動ドアをくぐり、香奈の病室を目指す。
さすがに院内で走るわけにはいかないので急ぎ足で歩いていると、
すれ違った人に急に呼び止められた。

「あ。ねえねえキミキミ」

「はい？」

振り返ると男女の一人組み。

あれ、どこかで見たような

「ほらあ、やっぱりあのときの子じゃん」

「確かにそのようだ」

「あ、あの。あのときって？」

満足げに頷く女性と不機嫌そうな表情のまま頷く男。

制服のバッジを見る限り、どうやら上級三年のようだ。

「あれ、覚えてないの？ ほらあ、キミ達が前線にでてきていきた
りのピンチを救つたお姉さんだよ、
綺麗な赤髪を弄りながら顔を寄せてこじる彼女に、
感いたながらも、
ふと思い出す。

「もしかして敵を拘束しまくつてた人……？」

「そうそう！ 正解正解大正解！ あ、ちなみにこっちがあなた達
に血をぶっかけた張本人ね」

「……ふん。 あそこにいるのが悪い」

「またまたあ。 本当は謝りたいんですけど？」

「……黙れ」

「はあ、やだやだ。 これだから素直じゃない男は」

女性は男に呆れてため息をつき、男もまた一段と不機嫌な顔にな
る。しかし全然険悪な雰囲気ではないのはやはり一人の仲が深いか
らだろう。

完全に置いてけぼりにされているが……なるほど。 この人たちが
あの『戦況を変えた一人』か。

正直四年だと思っていたが、まさか三年だったとは驚いた。

女性のほうは身長は俺と同じくらいで香奈に勝るくらいの超ナイ
スバディ。

男のほうも身長が高く、不機嫌そうなところを除けばかなりのイ
ケメンだった。

そこでふと俺はこの人たちの名前を知らないことに気がつく。

「あの、先輩達の名前は

「おー、用は済んだしもつ帰るだ

「ええー。もう帰るのぉ？」

いや、だから名前……。

「つむれこ。ここに来たかったのは俺だ。その俺が帰るといつたんだから帰るだ

「ええー。つまんなあい」

ええー。無視ですかあ。

すると男が一つため息をついてから、

「……ドーナツ買つてやる」

「ホントー。じゃあ帰るー」

物で釣つたよ！

そしてホントに無視だよー！

いや、もちろん聞こえなかつたんだろつことはわかつていろが。

「んじゃそういうことだからバイバーイ

右手で男を引っ張りながら元気よく手を振つてくる彼女は、どうにもあんなに実力がある人のようには見えなかつた。

「結局名前聞けなかつたな……」

去つていく先輩達に軽く会釈しながら頭を下げる。

少しちつたひない氣もするが、それよりも早く香奈のもとへ行かなければ。

俺は止まっていた足を再び病室へ向かつて運び始めた。

医療科棟二階にある、A - 09と書かれた病室。

ここが香奈の病室である。ちなみにこここの病室は全て個人用だ。

ドアの前に立つて一つ息を吐き、そつと開ける。

「あ、日向さん」

「お兄ちゃんだなの~」

俺を見るなり香奈、リアが声をあげる。

そして。

「日向ッ!! あたしがメールしてあげてから何分立つてるのよ~」
「す、すまん。ケータイの電池が切れててさ」

怒涛の勢いで突つかかってくる凛華をなんとかなだめる。

……ちなみに仮に電池があつたとしてもメールを読む時間は変わらなかつただろう。

「まだに『むづづく』と言いつつもなんとか納得したらしい凛華を横目に、香奈の容態を確認する。

「もう起きていて大丈夫なのか?」

「はい。さつき看護師さんがきまして、『あら、もう大丈夫そうねえ。近いうちに退院できそうね』って言つてましたし

「そうか」

屈託のない笑みを浮かべた香奈を見て一安心する。だが、気になることが一つ。

「あのや、やっぱり残ったのか？……傷跡」
そう、あのアグレッシンにやられた傷は相当深かった。

いくら最新の医療をもつてしても完全に失くすことは無理じやないのだろうか。

しかし香奈はそれでも笑顔のまま、

「それなら時間とともに薄くなつていき、最後はわからなくなるくらいになるそうです。だから大丈夫ですよ」

「そうか……ならよかつたよ」

一番の悩みの種が消えたことでホッとする。
さすがに自分のせいで生涯残る傷を負わせてしまつては合わせる
顔がないからな。

「よかつたわね田向。もしこれで一生残ることになつてたら男として失格だつたわね」

「う、うるせえ。それよりもお前も足大丈夫なのか？」

凛華もあのとき負傷し、今も軽く包帯が巻かれている。
松葉杖とかは使ってないから大丈夫そうだが。

「まあ大丈夫よ。傷口がちょっと見せられないだけで少しすれば治るわ」

「そつか。そりやよかつたよ」

「……ふん」

ふにふこと頬をつねつてやると少しそっぽ向いてしまつた。

しかし頬が緩んでこむといひをみると、もしかして凛華はこれ好きなのだろうか？

（凛華つてたまに幼いことにあるよなあ）

くすくすと笑いを堪えながら弄くつていると、珍しく今まで静かだつたリアが突然立ち上がる。

「凛華ちゃんばっかズルイなの！ リアにもやつてなの」
「ちょ、リアは駄目よー」こいつもしかしたらロココンかもしけないんだからっ！」

「なつ！？」

根も葉もないことを言われた！？

「ふえ、そうだつたの？ でもそれならリアは大歓迎なの～。あおにじちゃん！ 食べて食べてなの！」

田をらんと輝かせながら、なんとも公共の場で言つてはいけないセリフを言つコア。

……たぶんその言葉の意味を知らないで使つてはいるんだろう。そういひう。やうすじよう。

「おー、リア。そのセリフ間違つても他の男に言つなんよ、特にトオルとか。

「？ 言われなくともお兄ちゃんにしかいわないなの、今やう向を？ とでも言つまつた眼でこりを見てくるのだから対処に困る。

理由を説明するわけにもいかず、おうおうしてこると、なにか思

い出したような凛華が声をあげた。

「さて、私達はもう帰るわよ」

「えつ、もう帰るのか？」

俺まだ来たばっかなんだけど。

しかしそんなことはお見通しだつたよつで、凛華はチラシと香奈を見ながらリアだけ連れて行く。

「もちろん日向はまだここにいていいわよ…………香奈も話したいことがあるみたいだし」

「ちよ、ちよっと凛華さん！」

いきなり慌てた香奈に意味ありげにウインクする凛華。

そのまままだ状況を掴めていないリアを引っ張りながら病室を出ていった。

「……なんだつたんだ。あれば」

「あ、うう……な、なんだつたんでしょうね…………」

状況が読めず立つ立つかない。

ふと香奈を見てみると、手をもじもじさせながら俯いていたから見えにくいが、頬が少し赤くなっていた。

「熱もあるのか？」

もしそうだとしたら一応看護師を呼んだほうがいいのだろうか。
などと考えていると香奈があたふたと手を振る。

「いえ！ 大丈夫です！ 大丈夫ですか～っ！」

「お、おつ」

大慌てで必死に否定した香奈は「コホン」と一つ気持ちを落ち着かせてから話し始める。

「とにかく、これで借りは返しましたからね」

「借り?」

なんのことだか分かつていかない俺に香奈は「くつと頷く。

「田向さんが私をジャステイスから助けてくれた借り、です」「ああ。そのことか」

確かに作戦前に香奈の部屋で同じようなことを聞いた。香奈がそのことをずっと気にしていたことも。そのことずっと縛られていたことも。

「だからあなた、奴隸みたいなことは何もつぶさにませんから」

「……そうか」

どうやら俺が黒歴史にしたいほど恥ずかしいことを喋った意味はあつたらしい。

……もう一度言えと言われても絶対言つてやらないが。

その後じばらく沈黙が続いた後、ポツリと香奈が呟く。
「それともう一つ……どうか本当に言いたいことなんですね?」
「…………そのときに話したこと覚えてます?」

「ああ」

「そのときに田向さんが私の気持ちを『任せもの』だつて言つたことも」

……あー。そんなことも言つてたな。

確かに『お前がもし好意を抱いているならそれは任せものだ』だつ

たけか。

「覚えてるよ」「

あのときは感情的になつてたからな……今思つと前何様だよと
言いたくなるくらいのセリフだよ。

そのときのことを思い出すと、今でも後悔の念しかない『仄』がする。
……なんだかだんだん虚しくなつて俺はため息を吐く。

しかし香奈はそんな俺に気付かずに話を続ける。

「あの後、迎撃戦が始まるまで少し考えてみたんです。それで答え
を出したたんですけど……聞いてくれますか?」

「おっ」

「や、それでは……あの、あまり大きな声で言いたくないのでこつ
ちにきてください」「お、それもそつだなと思つて言われるがままに香奈のすぐ隣に
立つ。

そして香奈はしまりく少し迷つたよつた素振りをしてから、何か
を決心した瞳でこちらを向いた。

「それじゃ近くで話せるように少しがんぐだなさい

『重つとねつ』膝になる。

「なみにここのベッドはだいぶ低いのだけの状態だと香奈の肩く
らこの高さになる。

「えつと……は、恥ずかしいので皿を開じてこしてもいいですか?」

「? オフ」

なんとかはわからないが皿を開じる。

すると香奈がじりじり寄つてくる音がある。

耳元で囁つのだらうか。

少し力が入つた香奈の両手が俺の頬に触れた、次の瞬間

「んっ……」

「ツー?」

いきなりだつた。

引き寄せられるよつて香奈の柔らかい唇が、俺の唇と重なつた。

「んう……」

さりげに香奈の両手の力が抜け、香奈の唇だけが俺の頭を支配する。

なんだかほんのり甘い香りがし、ものすく柔らかい。

しかし弾力もあって、とても俺の恋愛経験では言い表せない感覚だ。

実際はほんの数秒なのだろうが、俺には数時間とも感じられる時間が過ぎ、香奈の唇がゆっくりと離れていく。

……このままずっとでもよかつたのにと思つてしまつたのは男なら皆同じだと信じたい。

頬を染めながら恥ずかしそうに笑つ香奈は、いきなりのことに呆然としてこの俺に小れくれれやく。

「これが私の気持ち……」

そして言い直すよつて言葉を紡ぐ。

「私のあなたへの気持ちは、本物です」

そう断言した香奈は、息が止まるくらい華やかで、どんな男でも一瞬でほれてしまいそうなくらい綺麗で、どんな天使でさえも霞んでしまつくらい可愛い最高の笑顔だった。

謝礼

週一更新といつもたり連載の中、この作品が完結までこれたのも皆様の応援があってこそです。

本当にありがとうございました！

この作品は処女作でもあつたためにものすごく思い入れがあり、今の気持ちを文章にするだけの力がないことだけが悔しいです><

これからもぜひ、蒼鳥の次回作を楽しみにしていただけたらと思います。

全体を読みきつての感想などをお待ちしているとともに（いやつかり書いちゃいました（笑）、ここまで付き合つてくださった皆様に心より感謝を）。

追伸；

この作品は今月中に改稿してMF文庫Jの新人賞にだすつもりです。
そのためしばらくしたら一回話の中身を全て削除します。

しかし恐らく落ちますので、そしたら改稿したほうでまた載せよう
と思います。

詳しきは「お知らせ」ところのを近日更新しますのでそこ。

ちなみに終わりが中途半端だなと思った方々へ。
もしかしたら続きを書くかもしれないのにこりいう終わり方にしました。

しかし、次回作の新作のほつも考えてありますので正直、続きを書くかどうかは蒼鳥の気まぐれです（笑）

ひとまずは「凛華はやっぱ可愛いなあ」か「よし、俺が食べてあげるよリア」か「香奈さんマジ天使」と思っていたければ幸いです
(最後の最後でふぞけましたごめんなさい)（笑）

重要なお知らせ

まだ途中までしか読んでいない方も必ずお読みください

今作、「光翼のリベンジャー」は近田MF文庫の新人賞に応募するための改稿が終わり、投稿することになりましたので、明日一時的にですがこのサイトから話の内容をすべて削除いたします。

話の内容を削除するだけであって、この作品自体を削除するわけではありません。

しかし、選考が発表されるまで（どんなに長くても来年の4月ころには発表）はこの作品が読めなくなることに変わりはありません。

く：

選考中の間はイラストコーナーと、このお知らせだけ残しておくれとになります。

読者様の中でただいま途中までしか読んでない方には、まことに申し訳ないのですが選考が決まるまでお待ちしていただくことになります。

本当に申し訳ございません（――）

しかし、選考落ちが確定しましたらすぐに改稿したほうの「光翼」

を随時更新していくので、お気に入り登録などはそのままにしてお勧めします。

初めての公募となりますので、まずは一次選考突破を目標にしたいと思っています。

まことに勝手で申し訳ないのですが、どうぞよろしくお願ひします

三（一）三

ちなみに来月の下旬から新作を投稿する予定です。

それについての詳しい報告などは活動報告などでやつておりますので、よかつたらどうぞ新作のほうもお読みください。

これからも蒼鳥のことをおへくお願いします 三（一）三

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1722t/>

光翼のリベンジャー『だけど俺は戦闘狂だった』

2011年12月25日22時44分発行